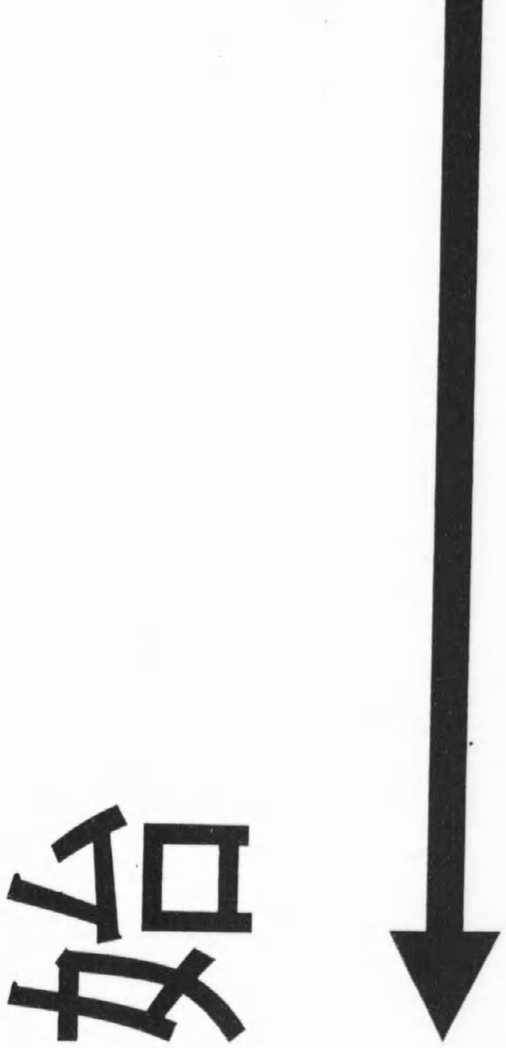

袋口

910.8-Ko47ウ
1200500754866

26. 11. 30

910.8
K047
(2)

國語國文學講座 廿二

源氏物語講義〔前篇〕

池田龜鑑

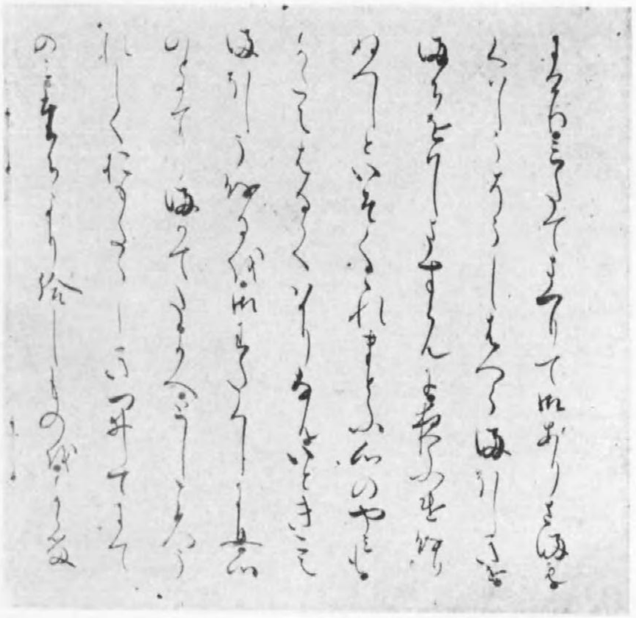
716
96

源氏物語講義　前篇　目次

口繪
古本　二葉
河内本　六葉
はしがき……一
桐壺……四
帚木……七三

〔目次終〕

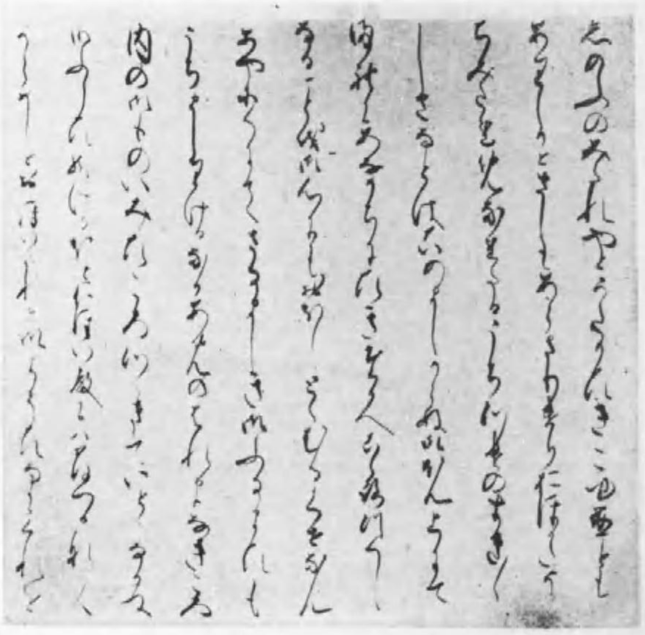
河内本　二十四頁語釋參照



河内本　三十九頁語釋參照

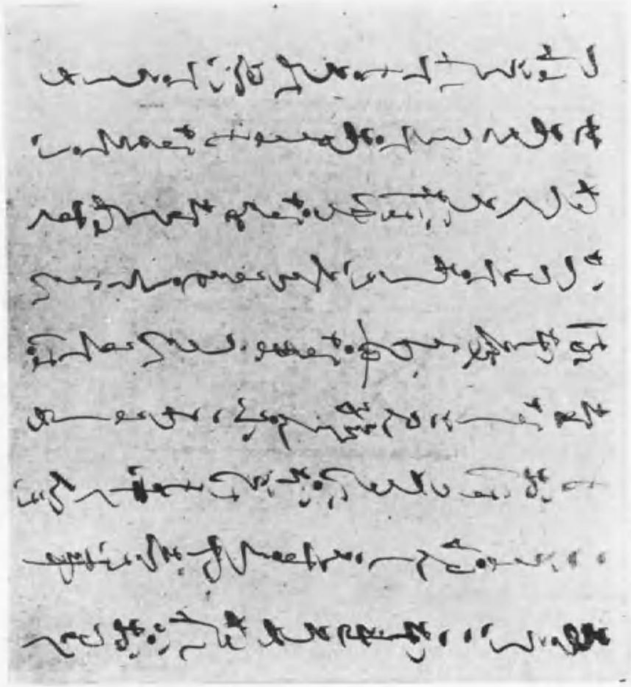
古本　六十三頁語釋參照

河内本　六十三頁語釋參照

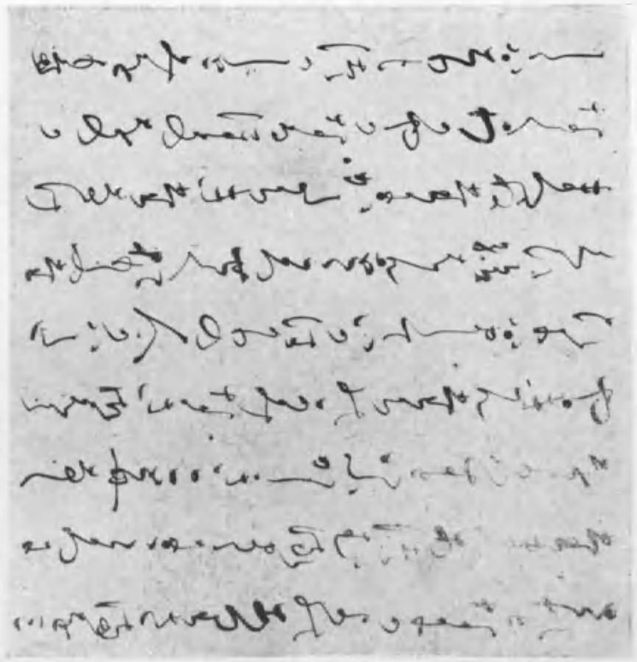


古本　七十六頁語釋參照

河内本　八十五頁語釋參照



照參釋語頁三十百　本内河



照參釋語頁七十九　本内河

源氏物語講義　前篇

池田龜鑑

はしがき

一、本講座は文部省檢定試驗に應じようとする人々の參考を目的として企圖された由でありますから、この目的に合致せしむるため、次のやうな方針のもとに講義をすすめることに致しました。

イ　專門に過ぎる學術的な立場は不必要であるのみならず、本講座の目的に合致しないと思ひますから、受驗の實際に必要な程度の語釋に止め、主力を通釋に注ぐことにしました。但し桐壺帚木兩卷は出來るだけ本格的な立場を加味して、本文校訂・諸註の比較等を試み、研究態度の一般を示すこととしました。

ロ　出來るだけ短時日の中に、出來るだけ多くを修得し得るやうに、過去の出題範圍を中心とし、なほ將來出題されさうな卷々を選びました。

ハ　源氏物語そのものについての詳細な解題は之を省き、本文の「解釋」を主とすることにしました。

ニ　本文は文學作品として優秀な部分を選擇するといふのではなく、試驗問題として採られさうな部分を選びました。

ホ　本講義は頁の都合上抄譯になつてゐますが、略した部分には梗概をかかげて、今抄譯する部分が、如何なる位置にあるかを明示することにしました。

二、本講義は、講座の目的と、與へられた頁數の關係上、通俗的なものにならざるを得ませんでしたが、眞の受驗準備法は、要するに實力の涵養にあり、實力の涵養は、本格的な研究を措いて他に方法はないと思ひますから、よろしく他の有力な參考書によつて、進んで眞摯な研究に入られるやうに希望いたします。

三、參考書としては次のやうなものがよいと思ひます。

源氏物語湖月抄　北村季吟著
源氏物語評釋　萩原廣道著
新譯源氏物語　藤井・佐々・沼波・笹川諸氏著
對譯源氏物語　宮田和一郎氏著
對譯源氏物語講話　島津久基氏著
定本源氏物語新解　金子元臣氏著
源氏物語綱要　藤田德太郎氏著

なほ源氏物語の解題については岩波講座日本文學や、新潮社版の日本文學大辭典等の拙稿を御一讀になれば、受驗準備としては、大體間にあふことと思ひます。

桐壺

いづれの御時にか、女御更衣あまた侍ひ給ひけるなかに、いとやむごとなき際にはあらぬが、すぐれてときめき給ふありけり。初より、我はと思ひあがり給へる御方々、めざましきものにおとしめ、嫉み給ふ。同じ程、それより下臈の更衣たちは、まして安からず。朝夕の宮仕につけても、人の心を動かし、恨をおふ積にやありけむ、いとあつしくなりゆき、もの心細げに里がちなるを、いよ〳〵飽かずあはれなるものに思ほして、人のそしりをもえ憚らせ給はず、世の例にもなりぬべき御もてなしなり。上達部、上人なども、あいなく目をそばめつゝ、いと眩き人の御おぼえなり。唐土にも、かゝる事の起にこそ、世も亂れ惡しかりけれ、とやうやう天の下にもあぢきなう、人のもて惱みぐさになりて、楊貴妃の例も引き出でつべうな

りゆくに、いとはしたなき事多かれど、かたじけなき御心ばへの類なきをたのみにて交らひ給ふ。

父の大納言は亡くなりて、母北の方なむ、いにしへの人の由あるにて、親うち具し、さしあたりて世のおぼえ花やかなる御方々にも劣らず、何事の儀式をもてなし給ひけれど、取立てて、はかばかしき御後見しなければ、事とある時は、なほよりどころなく心細げなり。

語釋 ○女御——中宮に次ぐ女官。始めは四位・五位の間に過ぎなかつたが、仁明天皇以後、次第に貴く、後には、女御から直ちに皇后となるやうになつた。○更衣——昔後宮に奉仕して、天皇の御衣がへの事を司る女官。後御寢所に侍するに至る。女御の下に位する。○やむごとなき際云々——從來の諸說では更衣の素性が大臣などの娘でなく、貴からぬ家の娘であるとの意に解してある。自分は、皇后とか、中宮とか、女御とかのやうに歷として正夫人の地位でなくの意に解したい。父母の身分や家柄を云ふのではなくて、現在の本人の地位について言ふのだと解しておく。○めざましき者に——めざましとは、意外な、驚くべき、心外なといふ意。心外で癪にさはる奴としての意である。○下臈——臈は僧侶が安居の功を積んだ年を數へるに言ふ。轉じて一般に年功を積むこと。下臈とは、上臈に對して、臈を積むことが淺く、地位の低いものをさす。官位の低いものの意である。○あつしく——病氣して熱があるの義で、病がち、病弱の意。○里がち——里とは宮中に

對し、宮仕人の實家をさす。○上達部――公卿に同じ。公は攝政・關白及び大臣、卿は大・中納言・參議及び散一位。位では三位（參議は四位でも）以上。○上人――殿上人。四位・五位にて昇殿を許された人。（藏人は六位でも）○あいなく――わけもなくの意。眞淵は愛敬無しの意に解す。古註では河海抄以來專ら「愛無し」の意とし、又あぢきなしと解する說もある。宣長が玉の小櫛に「何といふわきまへもなしに、うちつけに物することなり。こゝもその意にて、おのが身にかゝらぬ人までも、何といふことなしに、目をそばむる也。註に無愛也、あぢきなく也などいへる皆かなはず」と言つたのが最も穩當であらう。○まばゆき――細流には、人のそねみてうちも向はぬ顏也とある。しかし契沖が「御おぼえといふによれば、日のかがやく時、まばゆくて見難きやうの意なるべきにや」と言つたのが正しい。○楊貴妃のためし――昔、唐の玄宗皇帝が楊貴妃を愛して政事を怠り、安祿山の亂を起した例。○はしたなき――工合の惡い。途方に暮れるやうな。○いにしへの人――いにしへ人とある本がある。古風な人。昔風な人。昔氣質の人の意。○よしあるにて――よしある人にて、由緒ある人にての意。玉の小櫛に「よしある人にての意也。人は上にある故に省けり」とあるのが正しい。○御後見――未成年者又は女子等を助けて、生活上の世話をなす人。○事とある時――一本に「ことある時」とある。源註餘滴に「ことと」の例を帚木・野分・椎本・家持集・著聞集等に求め「すべてことといふ詞はとりたててその事をするに云ふ詞なり」とある。眞淵が新釋に於て「吉凶とも大なる事あるをいふ」と言つたのが正しい。湖月抄が晴わざとのみ限定したのはよろしくない。○よりどころなく――たよりとする所がなくて、よるべなくての意ではなく、「心細げなり」を限定する副詞と見た方がよいと思ふ。枕草子に「かたはらなる子どもの心ちにも、親のひるねしたるは、よりどころなくてすさまじ」とあるのも、「よりどころなくてすさまじ」の意ではなく「せむすべもなく」「いはむ方なく」「格別に」「非常に」といふ程の意であらう。

通釋　何時の御代であつたか、女御や更衣が大勢お仕へしてをられた中に、大そう賤い身分（中宮とか女御とかのやうな）ではない人で、一段と時を得て榮えてゐられるお方があつた。宮仕の當初から、我こそは帝寵を專らにして見せようと、自惚れてゐられた方々などは、心外で癪にさはる奴として、言ひおとしたり、そねんだりされる。自信のある方々でさへさうであるから、まして同じ階級か、又はそれよりも低い身分の更衣たちは、なほ更不安である。朝夕のおつとめにつけても、更衣は氣ばかりもみ、他人の恨を負ふことの積り積つた爲めか、次第にひどく病身になつて行つて、何とはなく心細げに、ともすれば實家に居勝ちであるので、帝は益々物足りなく不憫なものとお思ひになつて、他人の非難をもおかまひにならず、世間の引きあひにでもなりさうな御振舞である。上達部・殿上人なども、ただわけもなく目をそむけて、「ひどくまぶしい位な更衣の御寵遇だ。支那でもかういふ事の原因によつて、世も亂れ、惡い事があつたのだ」と、次第に國中の人々までも、不本意に思ひ、人々の氣苦勞の種になつて、おしまひには、楊貴妃の亂の例でも引き起してしまひさうになるので、更衣は大層工合の惡いことが多いけれども、有がたい帝の御寵愛が、類のないのを頼みにして、宮中の生活をつづけてをられる。

父の大納言はなくなつて、母北の方、その人は古風な由緒ある身分の人で、兩親そろひ、現在まのあたり世間の名望も花やかな他の女御方にもおとらず、何かの宮中の儀式をも、取りまかなはれたけれど、別にこれといふしつかりとした御後見人がないので、いざ何かといふ事のある時には、

やはり何と言つても、格別に心細さうである。

前の世にも、御契や深かりけむ、世になく清らなる、玉の男御子さへ生れ給ひぬ。いつしかと心許ながらせ給ひて、急ぎ參らせて御覽ずるに、珍らかなる兒の御貌なり。一の御子は、右大臣の女御の御腹にて、よせ重く、疑なき儲の君と、世にもてかしづき聞ゆれど、この御匂には、ならび給ふべくもあらざりければ、大方のやむごとなき御思ひにて、この君をば、私物に思ほしかしづき給ふ事限なし。

母君、初よりおしなべての上宮仕し給ふべき際にはあらざりき。覺えいとやむごとなく、上衆めかしけれど、わりなく纏はさせ給ふあまりに、さるべき御遊の折々、何事にも故ある事のふしぶしには、まづ參う上らせ給ふ。ある時は大殿籠り過ぐして、やがてさぶらはせ給ひなど、あながちに、御前去らずもてなさせ給ひし程に、おのづから輕きかたにも見えしを、この御子生れ給ひて後は、いと心こ

とに思ほしおきてたれば、坊にも、ようせずば、この御子の居給ふべきなめりと、一の御子の女御は思し疑へり。

人より先に參り給ひて、やむごとなき御思なべてならず、御子達などもおはしませば、この御方の御いさめをのみぞ、なほ煩はしく心苦しう思ひ聞えさせ給ひける。かしこき御蔭をば頼み聞えながら、おとしめ疵を求め給ふ人は多く、我身はかよわく物はかなき有樣にて、なか〳〵なる物思をぞし給ふ。

御局は桐壺なり。數多の御方々を過ぎさせ給ひつゝ、ひまなき御前渡りに、人の御心をつくし給ふも、げに理と見えたり。參う上り給ふにも、あまりうちしきる折々は、うち橋、渡殿、こゝかしこの道に、怪しきわざをしつゝ、御送迎の人の衣の裾堪へがたう、まさなき事どもあり。また或時は、えさらぬ馬道の戸をさしこめ、こなたかなた、心をあはせて、はしたなめ煩はせ給ふ時も多かり。事に觸れて、數知らず苦しき事のみまされば、いといたう思ひ侘びたるを、いと

どあはれと御覽じて、後涼殿に、もとより侍ひ給ふ更衣の曹司を、ほかに移させ給ひて、上局に賜はす。その恨ましてやらむ方なし。

この御子三つになり給ふ年、御袴著の事、一の宮の奉りしに劣らず、内藏寮納殿の物を盡して、いみじうせさせ給ふ。それにつけても、世の譏のみ多かれど、この御子のおよすけもておはす御容貌、心ばへ、ありがたく珍らしきまで見え給ふを、え嫉みあへ給はず、物の心知り給ふ人は、かゝる人も世に出でおはするものなりけりと、あさましきまで目を驚かし給ふ。

語釋　○さきの世――帝と更衣との前世の宿緣。○玉の男の子――玉は美稱。源註餘滴・玉の小櫛等に和漢の例をあげてゐる。花鳥餘情に「玉の緒と命のかたへもとりなし侍る也」とあるのは、已に宣長の指摘した如く誤である。「玉の男の子みこさへ」の「さへ」について、首書に「或抄 此さへおもしろきてにをはと也。更衣のためには姫宮にても幸なるに玉のごとくなる若宮をさへと也」とある。○いつしかと――廣道は「御產は更衣の御さとにてあるなれば、帝の何時か生れ給ふとやうに心もとなく待遠におぼしめしける故に云々」と言つてゐるが、この何時しかは、生れ給ふに續くのではなく、御對面し給ふにつづく副詞である。いつか早くの意。○一の御子――後に朱雀院と申すお方。○右大臣の女御――右大臣の娘なる女御の意。東宮の女御といふのを東宮の御母なる女御の意に解するが如し。弘徽殿女御と申す。○よせ――信望。信頼。○御匂――花鳥餘情に「人に賞翫さるることをにほひとは言ふ也」とあり、細流に「其人の威德を匂ひと言へる也」とあるが、眞淵が「世になく光あるをいふ」といひ、契沖が「色の餘光あるをにほひとは言へり」といつてゐるのが正しい。下文に「いみじき繪師といへども、筆かぎりありければいとにほひなし」とあるにあはせて考ふべきである。艷麗なこと。つやつやしいこと。○大方の――おしなべての。一通りの。○やんごとなき御思ひ――第一皇子としての表向の御寵愛。○私もの――源註餘滴に桑華物語・うつぼ物語等の例を引いて、「何れも殊さらにとりわきてわがものとせる心なり」とある。○母君――桐壺の更衣。○おしなべての――普通な。尋常な。○上宮仕云々――花鳥餘情に「典侍・内侍の如く朝夕に御前に祗候するをば、上宮づかへといへり」とある。又源氏物語新釋に「さは言へど大納言の女にもあれば輕からぬを、寵のあまりに、常に御前に侍れば、なかなかに重からず見ゆると事のうらを書けり」とある。○上衆――下衆に對する言葉。貴人。上臈。○やがて――そのまま。○あながちに――しひて。無理に。○自ら輕き方にも云々――上文「初よりおしなべての上宮仕し給ふべき際にはあらざりき」と首尾應ずる。女御・更衣には各々定まつた御殿があつて、そこに祗候する。朝夕御前に侍するは、典侍・内侍の如き身分の低い女官のする事である。それだから、自ら輕き方と言つたのである。○思ほしおきてたれば――おきて給ひたればの意。思ほしは敬語。「おきつ」は下二段の他動詞で、掟をなす。處置するの意。○坊――東宮坊の略。春宮。○ようせずは――わるくすると。○一の御子の女御――第一皇子の御母弘徽殿の女御。○人より先きに――他の女御より先きに。○やんごとなき御思――正夫人としての歴とした御地位に對する主上の思召し。○御

いさめ――御苦情。御嫉妬。○疵を求め――紫明抄に「直き木に曲れる枝もあるものを毛を吹き疵をいふがわりなさ」といふ後選雜二、高津内親王の歌をあげ、漢書景帝紀の「吹毛求疵」の語をあげてゐる。故意にあらをさがす意である。○なかなかなる――なまなか御寵愛を受けない方がましのやうな。○桐壺――清涼殿の東北にある。淑景舍の別名。庭に桐がうゑてあるからこの名がある。○あまたの御方々云々――眞淵の新釋に、略圖を載せてゐる。清涼殿から桐壺に行くには、弘徽殿・麗景殿・宣耀殿等を過ぎる馬道による由、花鳥餘情に詳しい。○ひまなき御前渡り――湖月抄に「更衣の局へ帝のおはして御方々の前を通り給ふ也」とある。廣道の評釋に「あまたの御方々の前を更衣のわたりて清涼殿へ上り給ふをいふ。舊說はひがごとなり」とある。しかし自分は廣道の說よりも、舊註の方がかへつてよいと思ふ。下文「まう上り給ふにも」とあるから、更衣が清涼殿に參上することとしたら、無意義な重複である。○人の御心をつくし給ふ――諸註は他の女御・更衣たちが嫉妬するの意に解してゐるが、自分はこの「人」は更衣をさし、更衣が千々に心をいためる意に解したい。○うちはし――移橋（うつしはし）をつづめた名であるといふ。時にのぞんで何處へも用ある所に移すことの出來る橋。內橋・打橋などの字をあてるのはよろしくない。○渡殿――殿に渡るべき細殿。廊。○あやしきわざ――花鳥餘情に「ここかしこの道に不淨をまき散らし侍ることをいへり」とあり、村上天皇の御時の宣耀殿の女御と藤壺中宮との御ねたみの事實をあげて說明してゐる。源註餘滴に「此處の文きたなきものの所をよく隱してかけり」と評してゐるのは當つてゐる。○えさらぬ――避けることの出來ない。○馬道――殿中の長廊下の稱。殿中を貫通して構へた板敷の道といふ。○はしたなめ――玉の小櫛に「はしたなからしむるにて、更衣を迷惑せしむるを云ふ」とある。○後涼殿――このよみ方について俊成は、コウラウデンとよむべきであるとした由、河海抄に見える。清涼殿の西にある。○うへつぼね――常の局の外に、清涼殿の御座所近いあたりに特別に設けた局である。上局は弘徽殿と藤壺ばかりに限るので、その外に賜はるは例のないことである。○御袴着――チヤクコともいふ。男兒が初めて袴を着る儀式である。年齡は一定しない。古くは多く三歲の時に之をなし、後世は五歲又は七歲の時に之をした。但し三歲に限るものでない例は、源氏物語官職故實祕抄に見え、また河海抄に、皇子三歲着袴の例が見えてゐる。○內藏寮――職官志によれば、金銀・珠玉・寶器・錦綾その他のものを管理する中務省の被管。頭・助・允・屬以下の職員より成る。○納殿――拾芥抄又は西宮抄によれば、累代の御物を納める所で、宜陽殿に在る。

通釋　前世に於ても、御宿緣が深かつたのであらう、世にならびないやうな綺麗な玉のやうな皇子さへもお生れになつた。帝は、その皇子を、何時になつたら見られるか、早く見たいものと待遠く思召されて、急いでお召しになつて御覽になると、珍らしいほどの幼な御子の御器量である。第一の皇子は、右大臣の御娘の女御の御腹であつて、天下の信望が重く、勿論疑ひのない皇太子であられると、世間でも大切にあがめ申してゐるけれども、この若宮の艶やかなお美しさには、とても比較になりさうにもなかつたので、帝は第一皇子として表向きに、一通り大事なものとお考へになるまでで、この若君をば、本當に心からの可愛いものとして、限りなく大切にお育てになるのであつた。

若宮の母君は、はじめから普通の典侍や內侍のやうな、低い宮仕をなさるやうな身分ではなかつ

た。世間からもたいそう尊い人と評判され、如何にも貴人らしく見えるけれど、帝がむやみにお側につきまとはさせられる結果、然るべき管絃のあそびの折々や、何事にかぎらず趣のある事が催されるその時々には、先づ誰よりも先きに、この更衣をお召しになる。ある時には、墾朝遲くまでおやすみ過されて、そのまま御側におとどめになるなど、むりにも御前を離れないやうに御取扱ひになるので、自然更衣は、身分の輕々しい者のやうにも見えたけれど、この皇子がお生れになつた後は、帝も大層格別に處置されるので、東宮にも、わるくするとこの若宮がお立ちになりさうなやうすだと、第一皇子の母女御は、疑ひを抱かれた。

この第一皇子の母女御は、他の方々よりも先きに入内されて、歴とした御地位に對する帝の思召も並々ではなく、御子たちなどもお出でになるので、帝はこのお方の苦情だけを、何と言つてもやはり煩さく、又氣の毒にもお思ひ申された。更衣の方では、有がたい帝の御庇護におすがり申すものの、けなしたり、故意にあらを探したりされる人は多く、自分のからだはか弱く、たよりないやうな有樣で、かへつて御寵愛を受けない方がましのやうな物思をなされる。

更衣の御部屋は桐壺である。あまたの御方々の御部屋の前をお通りになつて、ひつきりなしに帝が更衣の御方にお渡りになるにつけても、更衣が氣がねをして、心をいためなさるのも、まことに尤ものことと見えた。又更衣の方から、御前に參上なさるにしても、あまり頻繁な時には、うち橋や渡殿など、こちらあちらの道に、けしからぬ事をしておいて、更衣のお伴をして送迎をする女房達のお召物の裾を豪なしにするなど、不都合なことがある。又ある時には、是非さけることの出來ない馬道の戸を、兩方から閉め、こちらとあちらとで心を合はせて、きまりの悪い目にあはせ、困

らせたりなさる時も多い。何かにつけて、數知らず苦しい事ばかりがまさるので、大層ひどくしをれてゐるのを、帝は一しほ不憫と御らんになつて、後涼殿に前からお出でになる更衣のお部屋を、他にお移しになつて、その部屋を桐壺の更衣の上局として下さる。その更衣のうらみは、ましてやりばもない位である。

この若宮が三つにおなりになる年、御袴着の儀式があげられたが、第一皇子が御袴をお召しになつた時に劣らず、内藏寮や納殿の物を悉くお用ひになつて、すばらしく遊ばされる。それにつけても、世間の非難だけ多くなるばかりであるけれど、この若宮が段々と成人して行かれる御器量といひ、御氣質といひ、世に二人となく珍らしいほどにお見えなさるので、人々はあくまでもそねみ通ずことがお出來にならぬ。物の道理のお分りになる人は、「よくもこんな立派なお方が、この人間の世にお生れになることであつたよ」と、あきれるほど目をおどろかされる。

その年の夏、御息所（みやすんどころ）はかなき心地に煩ひて、まかでなむとし給ふを、暇さらに許させ給はず。年頃常のあつしさになり給へれば、御目馴れて「なほ暫し試みよ」とのみ宣はするに、日々に重り給ひて、ただ五六日（いつかむいか）の程に、いと弱うなれば、母君泣く〳〵奏して、罷でさせ奉給ふ。かゝる折にも、あるまじき恥もこそと心づかひして、御子をば

とどめ奉りて、忍びてぞ出で給ふ。限あれば、さのみもえとどめさせ給はず、御覽じだに送らぬ覺束なさを、いふ方なく思さる。

いと匂ひやかに、うつくしげなる人の、いたう面痩せて、いとあはれと物を思ひしみながら、言に出でても聞えやらず、あるかなきかに消え入りつゝ、ものじ給ふを御覽ずるに、來し方行く末思召されず、よろづの事を、泣く〳〵契り宣はすれど、御いらへもえ聞え給はず、まみなどもいとたゆげにて、いとどなよ〳〵とわれかのけしきにて、臥したれば、いかさまにかと思し召し惑はる。

輦車の宣旨など宣はせても、また入らせ給ひては、さらにえ許させ給はず。「限あらむ道にも、後れ先だたじと契らせ給ひけるを、さりともうち捨ててはえ行きやらじ」と宣はするを、女もいといみじと見奉りて、

「かぎりとて別るゝ道のかなしきにいかまほしきは命なりけり」

いとかく思う給へましかば」と、息も絶えつゝ、聞えまほしげなる事はありげなれど、いと苦しげにたゆげなれば、かくながら、ともかくもならむを御覽じはてむと思し召すに、今日始むべき祈禱ども、さるべき人々承れる、今宵よりと聞え急がせば、わりなく思ほしながら、まかでさせ給ひつ。

御胸のみつと塞がりて、つゆまどろまれず、明しかねさせ給ふ。御使の行きかふ程もなきに、なほいぶせさを限なく宣はせつるを、「夜中うち過ぐる程になむ、絶えはて給ひぬる」とて泣き騒げば、御使もいとあへなくて、歸り參りぬ。聞し召す御心惑ひ、何事も思し召しわかれず、こもりおはします。

御子は、かくてもいと御覽せまほしけれど、かゝる程にさぶらひ給ふ例なき事なれば、まかで給ひなむとす。何事かあらむとも思ほしたらず、侍ふ人々の泣き惑ひ、上も御涙のひまなく流れおはしますを、怪しと見奉り給へるを、よろしき事にだに、かゝる別の悲しからぬはなきわざなるを、ましてあはれにいふかひなし。

語釋　○御息所――玉の小櫛に「此物語の例をもて考ふるに、細流にも註せられたる如く、御子を生み奉り給へば、御息所と申せり。さてそは女御更衣などの外に、別に此品あるにはあらず。女御更衣などにわたれり。」と言つて、若紫・若菜等の諸卷にあらはれてゐる例をあげて說明してゐる。○心地――心地惡しきこと。病氣。○限りあれば――かういふ時のきまりといふものがあるから。湖月抄に「別ををしませ給ふとても其限りあればと也」とあるが、自分は賛成しかねる。この「かぎりあれば」は、「御覽じだに送らぬ」にもかかる。帝の御地位として、お引きとめになつたり、御見送りになつたりすることがお出來にならないといふ心であらうと思ふ。宮廷の掟、規則といふほどの意。下文にもこの例が多い。○匂ひやかに――艶やかに。輝くごとく美しく。前にも出た。○うつくしげなる――かはいらしげな。今の美麗といふ意ではない。枕草子のうつくしきものの條を參照。○われかのけしき――細流抄に「あるかなきかの氣色なり。正體もなき體也」とあり、孟津抄に「我か人かなどとうたがふほどによわき心なり」とある。○いかさまにか――いかさまにせむかの略。玉の小櫛に「俗言にこれは何とせうぞといふ意也。まどはるといへるにて知るべし云々」とある。湖月抄の傍註に「何としてか更衣の病をたすけんと也」とあるのは正しくない。○輦車の宣旨――輦車は、和祕抄に「輿に輪をかけて、手にて引く車をいふ。內裡の門のうちなどをのる也。」とある。宣旨は、天皇の口勅を宣べ傳へる事で、先づ內侍が勅旨を承つて藏人に傳へ、藏人が上卿に告げ、上卿が外記に命じてその旨を記さしめて宣下するのである。○え行きやらじ――湖月抄に「たとひ病氣おもくとも、帝を捨てては更衣の里へゆかれじと也」とあり、玉の小櫛に「ゆくは死てゆく也。上の語、次の歌にて知るべし」とあるが、今は前者に從つておく。○今日始むべき祈禱ども、さるべき人々承れる――今日始むべき祈禱どもにて、然るべき人々の承れるその祈禱どもの意。細流抄に「今夜より更衣の里にて修法をもさせんとて也。是も深くおぼしめすにより、退出を許し給ふなり」とある。○つと――動かずうつらないさまに用ひられる副詞。ひしと。ぢつと。玉の小櫛に、「かやうののみは、胸のみふたがりて、他の所はふたがらざる意にはあらず、ふたがりの下にある意にて、ふたがるのみにて、ふたがらぬひまはなきよし也。つとは俗言にぢつと見てゐるなどいふぢつとの意にて、ぢつとは卽ち此つとの訛れる言也。御むねのふたがりたるが、ぢつとしてゆるばぬ也。註に頓てといふに同じといひ、又集都（ツトツト）などいへる、みないみじきひがごと也」とある。○行きかふ――河海抄に「交加」の字をあててある所から、岷江入楚は「ゆきちがふ也」と言つてゐるが、さうではなく、眞淵が「ゆきかへる也。萬葉に往反の二字を書きたるにて明らけし」とあるのが正しい。○いぶせさ――おぼつかなさ。心もとなさ。氣のもめること。○かくても――玉の小櫛に「かくてもは御母更衣はうせ給ひてもの意也」とある。○かかる程に――花鳥餘情に「七歳以下の人の、親の喪にあひて服假のことは、律令格式等の文に見えざる事也。所詮今の世に於ては、七歳以下の人は一向に服も假もあるべからざる事に定まれり云々」とあり、細流に「七歳以前の人服忌の事、醍醐の御代に法を立てらるること兩度改まれり」とある。ここに源氏三歳にして喪に服したかの如く見えるのは、延喜以前、まだ服假の一定してゐなかつた時代のことを念頭において書いたものと思はれる。○怪しと見奉り給へるを――今一本に「怪しと見奉り給ふ」とあるに從つておく。玉の小櫛補遺に「ここに脫あるべしと故大人にさきに聞きたるを小櫛にはもらされたり」とあり、廣道の評釋に「をもじ下に係る所なし。もしくは衍文か」とある。○よろしきこと

云々――河海に「さまでならぬこと也」とあり、細流に「なほざりの別れさへとなり」とあり、新釋に「常ざまにて、いと勝れ劣らぬ事を云へり」とあり、評釋に「俗言に相應な事でさへと云意なるべし」とあるによつて、意は明かである。相當な理由があつてさへも、かうした親子の別れは悲しいものであるのに、まして、更衣死別に起因する別れであるから、一しほ悲しいといふ意であらう。

通釋　その年の夏、御息所は、一寸した病氣にかかつて、實家に退出しようとなされるのを、帝はどうしてもお暇をお許しにならない。年來、御息所は持病のやうにおなりになつてゐることであるから、帝もお馴れになつて、「やつぱりもう少しの間このまま養生して見るがよい」とばかり仰せられる中に、大そう衰弱して行くので、更衣の母君は泣くなく奏上して、御退出をおさせ申し上げられる。こんな場合にも、飛んでもない恥を受けるやうなことが無いとも限らないと心配をして、若宮をば宮中におとどめ申して、こつそりと御退出になる。全儀式のまゐりさいふものがあるから、帝もさうばかりもお引きとめになる譯に行かず、せめてお見送りをと思召しても、それさへもなされぬ氣がかりさを、いふに言はれず思召される。

大そう艶やかに、かはいらしげな御息所が、ひどく顏もやせて、大そうしみじみと物思に沈みながら、言葉に出して訴へ申す事もせず、あるかないかに銷沈していらつしやる樣子を御らんになると、帝は過去未來のことのお辨へもなく、色々なことを泣く泣く御約束遊ばされるけれど、御息所は御返事をもえう申し上げられない。目つきなども大そうだるさうで、一しほ力なくなよなよとして、正體もない有樣でねてをられるので、帝はどうしたものかと、途方にお暮れになる。

帝は御息所に輦車勅許の宣旨を仰せ下されたものの、又御息所の御部屋におはいりになつて、どうしても御退出をお許しになることが出來ない。「死出の道にも、後れまい、先き立つまいとお約束をなされたものを、いくら何でも、私一人を後に殘して、出て行くことは出來まい」と仰せになる帝の御有樣を、女も大そうひどく悲しいことと見奉つて、

限とて別るる道のかなしきにいかまほしきは命なりけり

――今がこの世のかぎりとして別れて出て行く道の悲しいにつけても、何とかして生きたいのは命でございました――

本當にかねてから、かうした事にならうと存じてをりましたなら（もつと申上げて置く筈でございましたのに）と、息もきれぎれして、まだ申上げたさうな事はあるらしいけれど、大そう苦しげにだるさうだから、帝はこのままにしておいて、死ぬとも生きるとも、どちらなりとも結末をお見屆しようと思召されるのに、「今日お實家で始める筈になつてをりました御病氣平癒の御祈禱――それは相當な人たちが承つてゐますのでございますが――それを今晩から始めますから」と、人々が申上げて御催促申すので、帝は御不本意ながら、たうとう退出おさせになつた。

その後、帝は御胸がいつもひしと塞がつて、少しもお眠りになれず、一夜をお明しかねになる。御見舞の御使が、行つてまだ歸る間もない時に、やはり待遠しくてたまらぬ旨を、際限もなく仰せになつてゐたのに、「夜中すぎの時分に、おかくれになつてしまはれた」と言つて、里の人々が泣き惑いでゐるので、御使も大そう張合がなくて、宮中に歸つてきた。その由をお聞きになる帝の御心の御困惑、何事の分別もおつきにならず、ただ引きこもつておいでになる。

こんな事情でも、若宮はお側において御らんになりたいとひどく思召されるけれど、かうした喪中に、宮中にお出でになるといふ先例はないことであるから、お里に退出なされようとする。若宮は、どんな事があらうかとも一向御存じなく、近侍の人々が泣いたり取亂したりして、帝も御涙がとめどもなく流れてお出でになるのを、不思議なこととお見上げ申していらつしやる。相當なわけがあつてさへも、かうした親子の別れは悲しいものであるのに、まして更衣死別のための別れであるから、一しほあはれに、何と言つても甲斐のない有樣である。

限あれば、例の作法にをさめ奉るを、母北の方、同じ烟にも上りなむと、泣き焦れ給ひて、御送の女房の車に、慕ひ乘り給ひて愛宕といふ所に、いといかめしうその作法したるに、おはしつきたる心地、いかばかりかはありけむ。「空しき御骸を見る〳〵、猶おはするものと思ふが、いとかひなければ、灰になり給はむを見奉りて、今は亡き人となりなむ」と、さかしう宣ひつれど、車より落ちぬべう惑ひ給へば、さは思ひつかしと、人々もて煩ひ聞ゆ。

内裏より御使あり。三位の位贈り給ふよし、勅使來て、その宣命讀

むなむ、悲しき事なりける。女御とだにいはせずなりぬるが、飽かず口惜しう思さるれば、今一階の位をだにと、贈らせ給ふなりけり。これにつけても、憎み給ふ人々多かり。物思ひ知り給ふは、樣貌などのめでたかりし事、心ばせのなだらかにめやすく、憎み難かりし事など、今ぞ思し出づる。樣あしき御もてなし故こそ、すげなう嫉み給ひしか、人がらのあはれに、情ありし御心を、うへの女房なども戀ひ忍びあへり。「なくてぞ」とは、かゝる折にやと見えたり。

はかなく日頃過ぎて、後のわざなどにも細にとぶらはせ給ふ。程經るまゝに、せむ方なう悲しう思さるゝに、御方々の御宿直なども絶えてし給はず、たゞ涙にひぢて明し暮させ給へば、見奉る人さへ露けき秋なり。「亡き跡まで、人の胸あくまじかりける人の御覺かな」とぞ、弘徽殿などには猶ゆるしなう宣ひける。一の宮を見奉らせ給ふにも、若宮の御戀しさのみ思ほし出でつゝ、親しき女房、御乳母などを遣しつゝ、有樣を聞し召す。

語釋　○限りあれば――諸註に、いくら悲しみ惜んでも、物には限りといふものがあるから、よいかげんな所であきらめてといふ意に解してゐる。自分は、前にも「限りあればさのみもえとどめさせ給はず、御らんじだに送らぬ覺束なさを云々」とあるのも後に、さばかりおぼしたれど、限りこそありけれと世の人も聞え云々」とあるのも、又「帝よろづに居起ち思しいとなみて、限りある事に事を添へさせ給ふ」とあるのも、夕顔の卷に「人となりて後は、限りあれば、朝夕にしもえ見奉らず」とあるのも、みな、「限り」をきまり・格式・掟といふ意に解すべきであらうと思ふ。それでここの意味は、破格な、盛大な葬儀を營みたく思召されるが、宮中での格式といふものがあるから、み心にまかせることは出來ず、例の作法にて葬送し給ふの意と見るべきであらうと思ふ。「例」の字がこれで生きて來ると思ふ。○例の作法――この「例」は「例の人」といふ場合の「例」と同じく、尋常の、なみの、普通のの意である。○こがれ――玉の小櫛に「こがれは煙の縁の詞をもていへるにて、文のあやなり。此たぐひ多し。心をつくべし」とある。○愛宕――河海抄に「桓武天皇平安城に遷都の時、此地を諸人の葬所に定めらる。見延暦遷都記云々」とある。○空しき御骸を見る見る――玉の小櫛に「これはいまだ葬に出たゝれざるさきにいはれたりし語にて、かねてはかくの給ひつれどと也」とある。○三位の位――河内本には、「みつの位」とあり、又古本系統の古寫本にも「みつの位」とあるものがある。弄花抄に「みつの位とよむべきにや」とあり、細流抄に「三つのくらゐと讀む也」とある。和祕抄には「おほきみつの位」とある。眞淵の新釋に「此三位は音にさんみと唱ふべし。或説にみつのくらゐと訓むべしと言ふは、宣命などよむ時の詞によりてはいふらめど、物語にていふは平語なれば、音にて書きたり。みつのくらゐとよまんならば、三位おくり給ふと書くべし云々」とあり、玉の小櫛もまた之に從つてゐるが、自分は河内本その他の古寫本に從つて、「みつのくらゐ」とよんでおく。○宣命――宣は宣傳、命は勅命、勅命を受け傳へて告げ聞かせることである。湖月抄に「大臣勅をうけたまはりて、内記に命じて作らしむるよし、延喜式にあり。贈位のむねを書きたる宣命也。少納言これをよむと云々」とある。○女御とだにいはせず――湖月抄に「此詞にて后にもなすべく思召しおかれし心見えたる也。大納言の女立后の例、河海に委し」とある。しかし新釋に指摘してあるやうに、后ではなく、女御と見なければならぬ。○今一きざみの位――更衣が生前中四位であつたのを、今三位を贈られたのである。山下水に「更衣は四位女御は三位也」とあるが、中古までは女御も多く四位であつたから、必ずしも三位といふことは出來ない。○めやすく――見苦しくなく。○さまあしき御もてなし――岷江入楚に「存生の時は御寵愛のすぐれ御門の政道をも忘れおはしましたるやうなりし故にこそにくみしかとなり。尤も面白し。そねみ給ひしかといふまでを、前の詞の注釋と見るべし」とある。○うへの女房――主上の御前近くつかへる女房。中宮・院などは、それぞれ宮の女房、院の女房等とよぶ。○なくてぞ――この歌出所不明。最初に見えるのは伊行の源氏釋である。次いで奥入に引かれ、舊註悉く引抄す。契沖云「今案　奥入に引かれたる歌、今考ふれば六帖第五物語、ある時はありのすさびに語らはでこひしき物と別れてぞ知る。此歌ありて奥入の歌なし。何に出たるにや」とある。○のちのわざ――四十九日の法事。○御方々の御宿直――湖月抄に「女御更衣達の帝へ御番にまゐり給ふ事也」とある。河海抄に榮花物語の例を引いてゐる、○露けき秋――紫明抄に「人はいさことぞともなきながめにぞ我はつゆけき秋も知らるる　後撰」と引歌をあげてゐる。廣道の評釋に「案にこ

れは引歌にはあらず、類似のみなり」と云つてゐるのが正しい。岷江入楚に「尤も面白き歟」と云ひ、評釋に「傍にて見奉る人までも帝の御心をおしはかり奉りて涙がちなりといふ意を、露けきとはいへる也。さて秋なりといふに、時のおしうつりたることを思はせたる筆のはたらき、さらにめでたし」とほめてゐる。○人の胸あくまじかりける――この「人」は評釋に「弘徽殿ミヅカラノ玉フ也」と註す。○人の御おぼえ――この「人」は更衣自身をさす。○弘徽殿――弘徽殿の女御。

通釋　宮中での御格式といふものがあるので、御本意ならず尋常のきまつた儀式で葬り奉るのを、母北の方は「娘と一緒に煙となつて、立ち上りたい」と泣きこがれなさつて、野邊の送りの女房たちの車に、是非と頼んで乘せてもらつて、愛宕といふ所で、大そう壯嚴な儀式を行つてゐるその所に、おつきになつた時の心地は、どんなに悲しいことであつたであらう。北の方は、かねて「はかない遺骸を、現在眼前に見てゐながら、それでもやはりまだ生きてをられるものと思ふのが、甚だ詮ない事であるから、いつそ灰におなりにならうとするのをお見かけして、それで今こそこの世にない人と、すつかりあきらめをつけよう」とけなげに仰つてゐたけれど、今この場にのぞまれると、車から落ちてしまひさうに、お取り亂しになるので、多分こんな事になるのだらうと思つたことだつた」と人々も持てあまして、お困り申し上げる。

宮中から御使がまゐられる。三位を追贈される趣を、勅使が來てその宣命を讀む、それは悲しいことであつた。帝は、生前にせめて女御とだけでもよばせずに終つたことを、物足りなく殘念に思召されるので、もう一階の位だけでもとの思召しで、御追贈になるのであつた。これにつけても、お憎みになる方々が多い。しかし物のお分りの人々は、更衣の樣子や、容貌などの立派であつたこと、氣立てがなだらかで、見苦しくなく憎まうにも憎みにくかつた事などを、なくなつた後、今更のやうに思ひ出される。よそに見る目も工合が悪い程の御寵愛ゆゑに、誰もがそつけなく嫉妬をされたのである。人柄の立派で、情けの深かつたみ心を、禁中の女房たちなども、戀しがり、慕ひあつた。「なくてぞ人は」といふ歌は、かういふ場合の事ではなからうかと思はれた。

とりとめもなく數日がたつて、帝は死後の法事などにも、ねんごろにみ使をつかはして御慰問になる。日數がたつにつれて、仕方もないほど悲しく思召されるので、他の女御更衣たちの夜の御伺候も、全くお絶えになり、ただ涙にぬれて、その日その日を明し暮されるばかりなので、この御樣子を拜する人まで、涙がちな、露つぽい秋の折からである。「死んだ後まで、他人の胸のすうと晴れまいほどの愛せられやうだ」と、弘徽殿の女御などは、やはり容赦なく仰つた。帝は、第一皇子をごらんになるにつけても、若宮の御戀しさばかり思ひ出されて、親しい女房や、御乳母などをお遣しになつて、若宮の御樣子をおたづねになる。

野分だちて、俄に膚さむき夕暮のほど、常よりも思し出づる事多くて、靫負の命婦といふを遣す。夕月夜のをかしきほどに、出し立てさせ給ひて、やがて詠めおはします。かうやうの折は、御遊などせさせ給ひしに、心ことなる物の音をかき鳴し、はかなく聞え出づる言の葉も、人よりは異なりしけはひ容貌の、面影につと添ひて思さ

るゝも、闇のうつゝには猶劣りけり。命婦、かしこにまかで著きて、門ひき入るゝよりけはひあはれなり。やもめ住なれど、人ひとりの御かしづきに、とかくつくろひ立てて、めやすき程にて過ぐし給へるを、闇にくれて伏し沈み給へる程に、草も高くなり、野分にいと荒れたる心地して、月影ばかりぞ、八重葎にもさはらずさし入りたる。

南面におろして、母君とみにえ物も宣はず。「今までとまり侍るがいと憂きを、かゝる御使の、蓬生の露分け入り給ふにつけても、恥かしうなむ」とて、げにえ堪ふまじく泣い給ふ。『參りてはいとど心苦しう、心肝も盡くるやうになむ』と、典侍の奏し給ひしを、物思ひ給へ知らぬ心地にも、げにこそいと忍び難う侍りけれ」とて、やゝためらひて、仰言傳へ聞ゆ。

語釋　○野分だちて――野分は和名抄一に『暴風。波夜知。又能和岐乃加世』とあつて、野の草を吹き分ける風の義。秋冬の際に吹く暴風のこと。「だち」については異說がある。花鳥餘情に「たちは達也。野分のやうなる風也。立にはあらず」とある。一葉抄にも「野分めいたる風なるべし。立にあらず」とある。しかるに岷江入楚に「暴風。立てと讀むべし」とある。廣道の評釋に「たちては其風の吹立つなり。たをにごりよみて、野めきてとやうに說ける註はひがことなり。さてはふく風などの詞なくては聞えぬことなり」とある。廣道の說もさることながら、文勢を見るに、舊註の方がよいと思ふ。○はだ寒き――「はだ」を「はた」と濁らぬよみ方もある。弄花抄に「將字の心なるべし。一譯同之」とある。孟津抄に「肌寒、將寒、兩說也。將を可用也」とある。しかるに、眞淵の新釋には「後世人將寒意也といふはいかにも足らぬ沙汰也」とあり、玉の小櫛にはこれに對して「はたは又の意にて、又寒くもありといふ意の詞也。そは秋になりて、大かたはまだ暑くて、涼しきがここちよきころ、俄にあまり涼しくなりて、こゝろよきながら、はや又少し寒くもある意也。」と反對してゐる。評釋に「膚寒きなり。將といふ說はわろし」と契沖・雅野・眞淵等の說に贊成したのが穩當であらうと思ふ。○靫負の命婦――源氏官職故實祕抄に「ゆげひの命婦とは、中臈の女房の呼名にして、或左衞門の命婦或は右衞門の命婦などとめさるべきのかへ名なり。本襲ゆげひの號は、男官の左衞門府の異名にして、これは武職なれば靫を負ふの心なり。靫は矢を盛る器也。（中略）又命婦といふには、內命婦・外命婦のわかちあり。妃・夫人・嬪及び女御・更衣・みくしげ殿などの類は內命婦なり。中臈格なるは外命婦といへり。其命は爵命あるの義なり。職員令中務省內外命婦義解謂婦人帶五位以上曰內命婦也五位以上妻曰外命婦也（下略）」とある。命婦とはすべて五位以上の女官をいふ。官名はその父・兄・夫の官名である。○夕月夜――評釋に「夕月夜は宵のほど月夜にて曉の闇なる頃を云ふ。八月の十日ごろのさまなり」とある。ここは夕月夜の頃

の月をさす。藤裏葉の巻に「七日の夕月夜かげほのかなるに」とあり、篝火の巻に「五六日の夕月夜はとく入りて」とあるのと同じ。○はかなく聞え出づる言の葉――林逸抄に「歌の事也」といひ、岷江入楚に「ことのはとは歌などをいふべき歟」とあるのをはじめとして、湖月抄も、評釋も歌のことにしてゐるが、玉の小櫛に「俗言になんでもないことを、ちよつといふ詞もといふ意也。傍註に歌也といへるはわろし」とあるのが正しいと思ふ。○面影に――髣髴として眼前に見える姿かたち。まぼろし。○闇のうつつ――伊行の源氏釋に古今集十三戀三の「ぬば玉の闇のうつゝは定かなる夢にいくらもまさらざりけり」の歌を引き、奥入以下の諸註みな之にならふ。細流に「夢にいくらもまさらざりけりといひたるよりは、此俤は猶はかなきとなり。引歌のとりざま奇妙なり」とある。○やみにくれて――源註餘滴その他新註に後撰集十五雜一兼輔朝臣、人の親の心はやみにあらねども、子を思ふ道にまどひぬるかな　なる歌を引く。湖月抄に「更衣を悲しみ給ふ心のやみに暮れまよひて母君のふし沈み給ふ也」とある。○八重葎にも――奥入に新勅撰集一春上貫之の「とふ人もなき宿なれど來る春は八重葎にもさはらざりけり」を引き、以下の諸註之にならふ。伊行の釋には、「八重葎しげれる宿の云々」なる拾遺集の惠慶の歌を引いてゐるが、定家は證歌となすべからずと斥けた。○南面――寢殿の南に面する部分。正面のこと。玉の小櫛に「必ずしも南向の家ならで、南おもての屋にはあらざれども、方角は何方にまれ、正面の所を南おもてといひならへる也」とある。○蓬生のつゆ――河海抄に拾遺集の歌なる「いかでかは尋ねきつらんよもぎふの人もかよはぬわがやどのみち」を引いてゐる。母北の方の卑下の詞である。○え堪ふまじく――評釋に「げには今までとまり侍るがいとうきをとあるをうけてげにと言へるなり。えたふまじくは、命もこらへがたき樣に見ゆ

るを言ふ」とある。○典侍――官職故實祕抄に「十二司の中、内侍司其長官は尚侍、次官は典侍、判官は掌侍と書きて、よむには、ないしのかみ、ないしのすけ、ないしのぜうとよめり。但しぜうたる人はただないしとよぶならひ也」とある。

通釋　風が野分めいて、俄かに膚寒く感ずる夕暮時、いつもより一入多くなき人の事を思ひ出されて、靱負の命婦といふ女房を、見舞におつかはしになる。夕月が面白く出てゐる時分に、命婦を出向かせられて、そのまま物思にふけりながら、眺めてお出でになる。かつてかやうな折には、必ず管絃のみ遊など催されたのであるが、更衣は格別上手な樂器の音などかきならし、ほんのちよつとしたことに申し出す言葉も、他人とは格別にちがつてゐた御樣子や容貌が、幻となつて、ちつといつも身につき添つてゐるやうに思召されるけれど、それも闇の中の現實に比べると、やはりずつとはかないものであつた。

命婦が更衣の里に行きついて、車を門内に引き入れるとすぐ、もうあたりの樣子はあはれである。母北の方は後家暮しではあるが、かの人一人の御まかなひに、何かと家まはりの手入をし、見苦しくない程度にして、生活してきたのであるが、一人娘の死を悲しむ心の暗にかきくれて、頭もあげず嘆き沈んで居られる間に、いつのまにかお庭の草も高くなり、それが野分のために一入荒れたやうに見受けられ、誰も訪ねて來る者もなく、ただ月の影だけが、八重葎にもさはらずにさしこんでゐる。

母屋の正面に、命婦を車からおろして、母君はふとすぐさまには物を仰ることも出來ない。「今まで生き殘つてゐますのが、大そうつらうございますのに、その上こんな尊い御使が、みすぼらし

い荒れ家の草の露を分けてお訪ね下さいましたのにつけまして、本當におはづかしいことでございます」といつて、本當に命も堪らなささうにいたいたしくお泣きになる。命婦は「先日典侍がお使として伺はれました時『こちらにお伺ひいたしましては、本當においたはしくて、心も肝も消え失せるやうでございました』と奏上されましたが、何の分別もない私如き者の心にも、なる程と、こらへきれないやうな氣が致します」といつて、しばらく間をおいて、仰せ言をお傳へ申上げる。

『暫しは夢かとのみたどられしを、やう〳〵思ひ靜まるにしも、さむべき方なく堪へ難きは、如何にすべきわざにかとも、問ひ合すべき人だになきを、忍びては參り給ひなむや、若宮のいと覺束なく、露けき中に過ぐし給ふも、心苦しう思さるゝを、疾く參り給へ』などは、かばかしうも宣はせやらず、咽せかへらせ給ひつゝ、かつは人も心弱く見奉るらむと、思しつゝまぬにしもあらぬ御氣色の心苦しさに、承りも果てぬやうにてなむ、まかで侍りぬる」とて、御文たてまつる。

「目も見え侍らぬに、かくかしこき仰言を光にてなむ」とて見給ふ。

程經ばすこしうち紛るゝ事もやと、待ち過す月日に添へて、いと忍び難きは、わりなきわざになむ。いはけなき人も、いかにと思ひやりつゝ、もろともにはぐくまぬ覺束なさを、今は猶、昔の形見になずらへてものし給へ。

など、こまやかに書かせ給へり。

宮城野のつゆ吹きむすぶ風の音に小萩がもとを思ひこそやれ

とあれど、え見給ひはてず。「命長さの、いとつらう思う給へ知らるゝに、松の思はむ事だに、はづかしう思う給へ侍れば、百敷に行きかひ侍らむ事は、ましていと憚多くなむ。かしこき仰言をたび〳〵承りながら、みづからはえなむ思ひ給へ立つまじき。『若宮は、いかに思ほし知るにか、參り給はむ事をのみなむ思し急ぐめれば、理に悲しう見奉り侍る』など、内々に思ひ給ふるさまを奏し給へ。ゆゝしき身に侍れば、かくておはしますも、忌々しうかたじけなく」など

宣ふ。「宮は大殿籠りにけり。見奉りて、委しく御有様も奏し侍らまほしきを、待ちおはしますらむを、夜更け侍りぬべし」とて急ぐ。

語釋　○たどられし――評釋に「たどるは手取の意にて物を捜りさぐりするやうの事にいへり」とある。○露けき中に――評釋に「涙がちなる憂の中にといふ意なるを折から秋なればかくのたまへる也」とある。○かしこき仰言を光にて――岷江入楚に「天子のみことのりを明詔なども言ふ也。光にてと尤も面白し」とある。○もろともにはぐくまぬおぼつかなさを――一葉抄に「もろともに。更衣ともろ共といふ詞也」とあり、岷江入楚・萬水一露・湖月抄等皆この説に從ひ、眞淵の説も同様である。然るに、玉の小櫛に「これは諸共にはぐくまぬがおぼつかなきをと有りけんを、がもじを落し、きをさに誤れるなるべし。本のままにては穩かならず。或抄におぼつかなさを思ひやりつゝと返りたる文也といへるはわろし。さてはつつといふ詞よしなし。さてもろ共には、更衣の母と諸共に也。若宮里におはしまして、祖母一人してはぐくみて、帝のもろ共にはえはぐくみ給はぬよし也。更衣と諸共にといへる註はひがごと也。さてはおぼつかなきといふ詞にかなはず。」とある。宣長の本文校訂についての新説は面白いが、河内本・古本等のいづれにもこれを實證することの出來る古寫本は一本もない。むしろ本文はこのままで、「はぐくまぬ」の下に「が」の一字が省かれたものと見るべきであらう。又「もろともに」は宣長の説よりも、舊註の方がよいと思ふ。更衣と諸共にである。「昔のかたみになずらへて」は、舊註新註みな若宮を更衣の形見になずらへての意に取つてゐるが、むしろそれよりも、母君が自らを更衣の形見になずらへて、更衣の身代りと思つての意に解する方がよいと思ふ。○ものし給へ――參内し給へ。○宮城野云々――花鳥餘情に「宮城野は宮禁にたとふ。露ふき結ぶは涙をいふ。小萩がもとは若宮をいふ。」とある。契沖は赤染衛門集に見える類歌によつて、「宮木野はただこはぎをのたまはん料にて、宮中にかくるまでは有るまじきか。又露吹結ぶ風の音とつづきたる意泪にもあるまじきか」と言つてゐるが、玉の小櫛には宮城野と禁中とは關係あるべしと云ひ、露ふき結ぶ涙と見るはわろしと云つてゐる。○命長さの云々――紫明抄に「莊子曰壽則多辱」と引いてゐて、諸抄皆これに從つてゐるが、莊子でなく老子に出た言葉である。○松の思はむことだに云々――伊行の釋に古今六帖の「いかにしてありと知られじ高砂の松の思はむこともはづかし」なる歌を引歌としてあげ、奥入・紫明抄・河海以下皆これに從ふ。眞淵は「是は古今集に何をして身のいたづらに老ぬらん年のおもはん事ぞやさしき。又いたづらに世にふるものと高砂の松をや老の友とおもはむ。この二首などを以て、つづめて書きけんかし。」といつて、六帖の歌を否定してゐる。が今は古註に從つておく。命つれなく永らへて、高砂の松から輕蔑されるのもはづかしいとの意である。○百敷――河海抄に、百官の座をしく故禁中を百敷といふ」とあるが、契沖や眞淵は萬葉集の例を引いて、その然らざる由を考證した。百と多くの石にて堅固に造つた城といふ意で、大宮の枕言葉、轉じて禁中、内裏をさす。○思ひ給ふる――湖月抄本その他に「思ひ給へる」とあるが、河内本はもとより、青表紙系統の古寫本、古本系統の古寫本等、いづれも「給ふる」とあるのが正しい。○ゆゆしき――新釋に「子を先きだてていまいましき身なりといへり」とある。河海以下の舊註みな同じ。○いまいましう――新釋に「是も忌々しきにて右に同じ語なるを、上のは自らを言ひ、ここに御子のためにいまいましきをいふ。○おはしますらむ

を――評釋に「このをいかがしきやうなれど、後世ににといふべき意のをにて例多し。課にはあらず。

通釋　「帝の御言葉に『しばらくの間は、夢ではないかとばかり、迷はれたが、段々心が落ちついて來ると、夢でないこと故さめようもなく、悲しみが堪へがたいにつけても、それをどうしたらよからうと、せめて相談する人もない有樣であるから、そつと參内しては下さるまいか。又若君が大そう心もとない有樣で、涙がちな淋しい所に、日を送つてゐられるのも、氣の毒に思ふことであるから、早くおつれして參内しなさい』など、てきはきとも仰しやり切らず、むせかへり〳〵遊ばされて、一方には人も御氣が弱いと見奉るかも知れないと、御遠慮なさらないのでもなささうな御樣子のお氣の毒さに、仰せ言を、皆までお聞取りもしない位にして、御前を退出してしまひました」といつて、勅書を母君にさし上げる。

母君は「あまりの悲しみに目も見えませんが、このやうに有がたい仰せ言を光として、拜見いたしませう」といつて御らんになる。帝の御文に「時日がたてば、少しは嘆きのまぎれることもあらうかと、それを待ち過ごす月日がたつにつれて、ひどく堪へ難いのは、困つたことである。幼い人もどうしてゐるかと思ひやりながらも、兩親そろつて育てないのが氣がかりであるから、今はやはり昔の人のかたみと思ひなして、參内しなさい」など、こまごまと、お書きあそばされてゐる。

宮城野の露吹き結ぶ風のおとに小萩がもとを思ひこそやれ

――宮中でも野分の風の音に、とかく涙にぬれがちであるのに、若宮はどうしてをられるかと思ひやられる――

と、奥に一首の御製が添へられてゐるけれど、母君は、悲しくて最後まで御らんになりきれない。

「長生をするのは、本當につらい事だと、身にしみてをりますのに、高砂の松の思はくでさへ恥かしく思はれますから、宮中にお出入致しませうことは、まして一段と憚り多い事でございます。恐れ多い仰せ言を、度々承りながらも、私といたしましては、とても參内を思ひ立つ譯にはまゐりますまい。でも若宮は、どう御存じでございませうか、參内なさらうことばかり、お急ぎになる御樣子でございますから、それも斷ち難い御緣で御尤もの事と、悲しくお見上げ申してをりますなど、内々思つてをりまする旨を御奏上下さい。不吉な私の身でございますから、若宮がかうしてこのままここにお出でになるのも、緣起がわるく、おそれ多いことでございます」など仰せになる。命婦は「若宮はもうおやすみになつてしまはれたのでございますね。お見あげ申して、委しく御樣子も奏上致し度いのでございますが、帝もお待ち遊ばしていらつしやいませうし、それに夜もふけてしまひませうから」といつて、命婦は歸りを急ぐ。

「くれ惑ふ心の闇も堪へ難き片端をだに、はるくばかりに聞えまほしう侍るを、私にも、心のどかにまかで給へ。年ごろ嬉しく面正しき序にのみ、立ち寄り給ひしものを、かゝる御消息にて見奉る、かへすがへすつれなき命にも侍るかな。生れし時より、思ふ心ありし人にて、故大納言今はとなるまで『ただこの人の宮仕の本意、必ず遂

げさせ奉れ、我なくなりぬとて、口惜しう思ひくづほるな』と、かへすがへすいさめ置かれ侍りしかば、はかばかしう後見思ふ人なき交らひは、なか〳〵なるべき事と思ひ給へながら、ただかの遺言を違へじとばかりに、出したて侍りしを、身に餘るまでの御志の、萬にかたじけなきに、人げなき恥を隱しつゝ、交らひ給ふめりつるを、人の嫉深く積り、安からぬ事多くなり添ひ侍るに、よこさまなるやうにて、終にかくなり侍りぬれば、却りてはつらくなむ、かしこき御志を思ひ給へられ侍る。これもわりなき心の闇になむ」と、いひもやらず咽せかへり給ふ程に、夜も更けぬ。

「上もしかなむ。我が御心ながら、あながちに人目驚くばかり思されしも、長かるまじきなりけりと、今はつらかりける人の契になむ、世にいさゝかも、人の心を狂げたる事はあらじと思ふを、ただこの人ゆゑにて、數多さるまじき人の恨を負ひしはて〳〵は、かうう捨てられて、心をさめむ方なきに、いとど人わろく、頑になり侍るも、前の世ゆかしうなむと、うち返しつゝ、御しほたれがちにのみおはします」と語りて盡きせず。泣く〳〵、夜いたう更けぬれば、今宵過ぐさず、御かへり奏せむ」と急ぎ參る。

語釋　○くれ惑ふ心の闇も堪へがたきかたはしをだにはるくばかりに――河内本には「くれ惑ふ心の闇もかたへはるくばかりに」とある。古本系統の本には或ひは「くれまどふ心のやみもすこしだにはるけ侍るばかりなん」とかはるくばかりなん」とか、或ひは「くれまどふ心のやみもすこしだにはるけ侍るばかりなん」とかある。意はいづれも同じ。心の闇については、伊行の釋に「人の親の心は闇にあらねども、子を思ふ道にまどひぬるかな」といふ後撰集なる兼輔の歌を引歌としてあげ、奥入以下の諸抄皆これに從ふ。○私にも――勅使としての公の立場ではなくての意。○かへすがへすつれなき命――「かへすがへす」は孟津抄に「すみて可讀」とあるが、眞淵は「すみて讀むといふはわろし。連聲の常にて下は必ず濁る例也」とある。岷江入楚に「或祕說云私云上の詞にいのち長さのいとつらう又その前に今までとまり侍るがとあり。これ等にて見れば、かへすがへすつれなき命といへる尤も味あり」とある。○思ふ心ありし人にて――思ふ子細のあつた人にての意。評釋に「上に父の大納言はなくなりてと、何げなき語の中に、更衣の種姓をかたり出でおきて、ここに至りてその委しき由を著はしたり。それはた殊更には說かずして、母君の語の中に挿みたる、いともいともめでたし。さて思ふ心ありしとは、更衣の宮仕して、もしくは帝の御寵をかうぶり、若宮など生れ給はば、いみじく家の榮えともなるべく思ひおきてられたる意にて、そのかみの風俗すべてやうなりしなり。心あらん人

は心とどめて見るべし。さて又上に、夜ふけ侍りぬべしとていそぐといひおきて、又かく長々しき物語を說き出でたるは、このほどに益々夜の更けぬべき種子としたる文のたくみなり」とある。○思ひくづほる――沮喪する。心屈する。○いさめ――湖月抄に「遺言せられし也」とある。忠告といふ意ではなく、注意するといふほどの意である。○まじらひ――前にも出た言葉。首書源氏物語に「或抄、あまた交りて宮づかへするをまじらふといふ也」とある。○人げなき――評釋に「いといとあなづられて人がましくももてなされぬを人氣なきといへり。」とある。○かくしつつ――新釋に「これはかくしかくしと重ぬる辭也。或說に乍也といふはこゝには叶はず」といふに從ふ。○よこさまなるやうにて――横死のやうな有樣で。弄花抄に「人のそねみつもりてうせぬれば横死のごとく思へり」とある。○わりなき――評釋に「子を思ふあまりのかたくな心を云ふ」とある。○今はつらかりける――新釋に「母君のかへりてはつらくなんかしこき御心ざしを思ふ云云といへるに同じ」とある。○まげたる事はあらじ――河内本に「まげたる事はとどめし」とある。河海抄に「定家卿自筆本にはとどめたるとおもひしをとあり。同心歟」とある。寄表紙本の古寫本にさうなつてゐるものもあるが、多くは底文の通りになつてゐる。○あまた――負ひしにかかる。○さるまじき人の云々――首書に「或抄うらみらるまじき人にうらみられ給ひしも更衣ゆゑと也」とある。○人わろく――人目悪く、又人聞きわるく。ざまわるく。○なり侍るも――河内本・古本等皆かくの如し。寄表紙古寫本に「なりはつる」とある本も多い。岷江入楚に「或抄侍るはつる兩說云々。はべる用之」とある。○さきの世ゆかしう――新釋に「前世に如何なる契ありてかと也」とある。○なくなく――山下水に「決前生後の句」といふはよろしくない。眞淵や宣長の指摘したやうに、

「いそぎ參る」にかかる。○いたう更けぬ――首書に「前に夕月夜のをかしきほどに出したてさせ給ふといふにかけて見るべし。夜のふけ行きたる景氣餘情たぐひなし」とある。

通釋　母北の方は「子ゆゑの闇に迷つてをります心の堪へ難い片はしをなりとも、せめて晴らせる位に、申し上げたうございますから、公儀のお使ひでなく、御ゆつくりとお出向き下さい。いつもは、喜ばしく面目を施しますやうな場合にばかりお立ちより下さいましたのに、今回は、このやうな悲しい御おとづれで、お目にかかりますとは、かへすがへす無情な命でございます。娘は生れました時から、私共にも思ふ仔細のありました子で、故大納言が息を引きとる際まで、ただもう『この娘を宮仕に出すといふかねての希望を、必ずとげさせてあげてくれ。自分が死んだからと言つて、決してふがいなく、心をくじいてはいけない』と、くれぐれもいさめておかれましたから、はきはきとお世話をしてくれる人のない宮中の交はりは、なまなかしない方がましの事とは存じながら、ただひたすら故人の遺言を背くまいとの心ばかりで、宮仕に出したのでございますのに、身にあまるほどの御寵愛が、萬事につけて勿體なうございますにつけて、人がましくもない程にうけた恥をしのびしのびして、交はりをしてをられたやうでございましたが、他人の嫉妬が深く積りつもつて、不愉快な事が日毎に多くなりますので、横死のやうな風で、たうとうこのやうなことになつてしまひましたから、かへつて勿體ない御寵愛をつらく存じてをります。これと申しますのも、道理の立たない子故の闇でございます」といひも果てずむせかへつてをられる間に、夜も更けてしまつた。

命婦は「帝もやはりその通りでいらつしやいます。『自分ながら、無暗と、人目のおどろく程更

衣を思つたのも、どうせ長くつづきさうもない二人の仲の前兆であつたよと、今となればかへつてつらく思はれた更衣との契である。これまで、ほんの一寸でも他人の心をまげた事はない筈だと思つてゐるのに、ただこの更衣ゆゑに、怨みを負ふべきでないあまたの人々の恨みまで負ひ負ひしてきたその果は、かうしてこの世にうちすてられて、心をとりをさめやうにもその方法がないのにつけても、一しほ人ぎきが悪く、偏屈な有様になつてしまつたのも、これも宿縁と思へば、前世が知りたい位である』と、くりかへしくりかへしして、涙がちでばかりお出でになります」と語つて、つきる時はない。でも泣く泣く「夜が、ひどく更けてしまひましたから、今宵のうちに御返事を奏上いたしませう」といつて、急いで内裏に歸りまゐる。

月は入方の空清う澄み渡れるに、風いと涼しく吹きて、叢の蟲の聲々もよほし顔なるも、いと立ち離れにくき草のもとなり。

鈴蟲の聲のかぎりを盡しても長き夜あかずふるなみだかなえも乘りやらず。

「いとどしく蟲の音しげき淺茅生に露おきそふる雲のうへびと

かごとも聞えつべくなむ」と言はせ給ふ。

をかしき御贈物などあるべき折にもあらねば、ただかの御形見にとて、かゝる用もやと殘しおき給へりける、御裝束一領御髮上の調度めく物添へ給ふ。若き人々、悲しき事は更にもいはず、内裏邊を朝夕にならひて、いとさうざうしく、上の御有様など思ひ出で聞ゆれば、疾く參り給はむことをそゝのかし聞ゆれど、かく忌々しき身の添ひ奉らむも、いと人ぎき憂かるべし、又見奉らで暫しもあらむは、いとうしろめたう思ひ聞え給ひて、すが〳〵ともえ參らせ奉り給はぬなり。

【語釋】○月は入方の空清うすみ渡れるに――細流抄に「前に夕月夜のをかしき程に出したてさせ給ふと云ふにかけて見るべし。夜の更け行きたる景氣餘情たぐひなし。」とある。評釋にも「野分だちてといひ、野分にいとど荒れたる心地してといひ、さてここに風いと涼しくといへる、荒かりし風のやうやう吹き靜まりて月かげの涼しく澄みたるさまひびきあひて、えも言はれぬけしきなり。草むらとあるも、前に草も高くなりと言ひ、八重葎・蓬生などいへる脈なるが、ここに至りて蟲の聲をそへ出して、次の歌の種としたり。心をつけて見るべし」とある。○蟲の聲々もよほし顔なる――河海抄に一説として、蟲の聲々も夜惜し顔なると讀むべしとあげてるるが正しくない。花鳥餘情は「涙を催す也」といひ、弄花抄や細流抄は「あはれを催す也」とある。次の歌に涙とあるから、花鳥のやうに解するのがよろしいと思ふ。○鈴蟲の聲のかぎりを云々――評釋に「蟲の聲々とある

中より、鈴蟲一つを取り出でて枕言葉におきたり。そはやがてふるといはん料なり。」とあり、弄花抄に「聲をつくしてもといはんとて鈴蟲といへり」とある。「ふる」は鈴蟲の緣語であるは勿論、涙の緣語たる雨にとりなしたのである。さて鈴蟲は今の松蟲で、チンチロリンとなく。松蟲と鈴蟲との稱呼の入違つたことについては、藤井高尙の松の落葉に詳しく出てゐる。○えも乘りやらず――細流抄に「前に車ひき入るるよりと書きて、ここにえも乘りやらずと書けり、悉く皆車のことを車とは言はで餘情にてかけり」とある。見すてがたくて乘ることが出來ないのである。○いとどしく云々――紫明抄に「五月雨にぬれにし袖をいとどしく露おきそふる袖のわびしさ」といふ後撰集の歌を本歌として引く。但し河海に後拾遺と註記せる本のあるは書入の誤。評釋に「いとどしくは露おきそふるへとかかる語脈なり云々」とある。雲の上人は花鳥に「昇殿の人を男女ともに雲の上人といふべし」とあるが、ここは宣長の指摘したやうにただ禁中の人なるゆゑにいふのであつて、昇殿のことにはかかはらない。○かごとも聞えつべくなむ――かごとは不平・不足・小言。「もとから嘆きの露の深い淺茅生に、御使につけて涙を添へることであるから、かこちごとも言はれる」といふ意である。○いはせ給ふ――新釋に「既に車よせてのりなどする間に、人して返事をいひ出せしも也」とある。御おくり物――玉の小櫛に「すべておくり物といふは、客の歸るを送る時に、贈る物をいひて、送り物也。ただなべて贈る物にはあらず」とある。○みぐしあげの調度めくもの――河海抄に「昔は女御更衣以下常に髮をあげらるる本義也。よつて髮上げの調度どもを廣蓋に入れたる也。鋏・釵子等なり」とある。下文に「しるしのかんざしならましかば」とあるに應ずる。作者の用意を味はふべきである。○若き人々――若宮におつかへしてゐる禁中の女房連。○さうざうしく

――さびさびしの音便。宣長の說に「つれづれと言ふもさびしきことなるを、同じさびしきも、つれづれとさうざうしとは、意異也。つれづれとは、すべきわざのなくて、ひまにて淋しきことをいひ、さうざうしとはあるべき物、あるべき事のなくて、たらぬが淋しきをいへり。此けぢめを心得おくべし」とある。つれづれの說はいかがと思ふが、さうざうしの說は可。○うしろめたし――眞淵の新釋に「ウシロメイタシ（背目痛）にて、わがうしろの見られおぼつかなき意をたとへいふ語也」とある。うしろやすしの裏である。氣遣ひなこと。○すがすがとも――紫明抄に「速々也」とあり、河海抄に「連歟、いそく心也。或淸々」と兩說をあげ、細流抄に「はやばやと也。速なり」ときめてしまつたので、諸註ほとんど之に從つたが、眞淵が日本紀の例をひき「淸々（スガスガ）にて心淸う離れ奉りかねたるさまをこゝにはいふ。」といひ「或說に速也。はや〳〵也と有るはかなはず」と云つてゐるのが正しい。さわやかに滯りのないさまに言ふ語であつて、さつぱりと思ひきつての意に解すべきである。

通釋　月は入り方の空に淸く澄みわたつてゐる上に、風が大そう涼しく吹いてきて、草むらの蟲の聲々が、涙をそそりがほであるにつけても、ほんたうに振りすてにくい草のもとの庵である。命婦は

鈴蟲のこゑのかぎりをつくしても長き夜あかずふる涙かな

――鈴蟲が鈴をふるやうに、聲のかぎりをつくして泣いても、まだ秋の長夜を飽き足らず、雨の降るやうに流れる涙であることよ。

とよんで、えう車にも乘らない。母君は

いとどしく蟲の音しげき淺茅生に露おきそふる雲の上人
――蟲の音のしげくないてゐる淺茅生のやうなわが庵に、その上ひどく涙の露をおき添へる宮中よりのみ便であることよ。

小言も申し上げたい位でございます」と、人をして命婦に取次がしめられる。風流なお贈物などのあるべき折でもないので、ただ亡き人の御形見として、かういふ折の役に立つかも知れぬと、殘してお置きになつた御裝束一領と、御髮上のお道具らしいものとをそへて、お贈りになる。

若宮におつきしてここに來てゐる若い禁中の女房たちは、悲しいことは今更申すまでもなく、朝夕宮中あたりになれて、かうした生活がひどく淋しく、又帝の御樣子など折にふれてお思ひ出し申すので、早く皇子が御參内になるやうにと、それとなくおすすめ申すけれど、このやうな不吉な身が、若宮にお添ひ申上げてゐるのも、大そう外聞が悪いであらうし、又若宮を御見上げしないで、ほんの一寸の間でもゐようのは、大そう氣がかりなこととお思ひ申されて、さつぱりとも思ひきつて參内おさせ申さずにいらつしやるのであつた。

命婦は、まだ大殿籠らせ給はざりけるを、あはれに見奉る。御前の壺前栽の、いとおもしろき盛なるを、御覽ずるやうにて、忍びやかに、心にくき限の女房四五人侍はせ給ひて、御物語せさせ給ふなりけり。この頃、明暮御覽ずる、長恨歌の御繪、亭子院の畫かせ給ひて、伊勢貫之に詠ませ給へる、大和言葉をも、唐土の詩をも、ただその筋をぞ、枕言にせさせ給ふ。いとこまやかに有樣を問はせ給ふ。あはれなりつること忍びやかに奏す。御かへり御覽ずれば、

「いともかしこきは置所も侍らず。かゝる仰言につけても、かきくらす亂り心地になむ。
荒き風ふせぎし蔭の枯れしより小萩がうへぞしづごころなき」

などやうに亂りがはしきを、心をさめざりける程と、御覽じ恕すべし。いとかうしも見えじと、思し靜むれど、更にえ忍びあへさせ給はず、御覽じ始めし年月の事さへ搔き集め、よろづに思し續けられて、時の間も覺束なかりしを、かくても月日は經にけりと、あさましう思し召さる。「故大納言の遺言過たず、宮仕の本意深くものしたりし喜は、かひある樣にとこそ思ひわたりつれ。いふかひなしや」とうち宣はせて、いとあはれに思しやる。「かくてもおのづから若

【省略】 尋ね行く幻もがな云々の歌より、帝が亡き更衣を忘れ給はず御傷心の由を記したる部分、弘徽殿の女御のはしたなき御態度に對する世評を叙したる部分、雲の上も涙にくるる云々とよみて起きおはしまし、夜の御殿に入らせ給ふもまどろませ給ふこと離き由を叙したる部分、亡き更衣の事を悲しみ給ふ結果、道理をも失はせ給ふ御樣に天下の人々歎く由を記したる部分を省略する。

宮など生ひ出で給はば、さるべき序もありなむ。命長くとこそ思ひ念せめ」など宣はす。かの贈物御覽せさす。亡き人の住處尋ね出でたりけむ、しるしの釵ならましかば、と思ほすもいとかひなし。

語釋　○命婦は云々――評釋に「その歸りたる事をば省きて命婦がおもふ心より書出られたるなかなかにめでたし」とある。○御前の壺前栽――河海抄に「清涼殿東庭並西庭、朝餉並臺盤所前、被レ栽二前栽一、延喜元年左右衛門栽二草架一」とある。官職故實鈔抄に「つぼはつぼき心にや」とある。が、周圍を取圍んだ狹い區域について言ふ。前栽はお庭の植込みを稱す。○長恨歌の御繪――長恨歌は唐の詩人白樂天が玄宗皇帝と楊貴妃との事を歌つた詩で、白氏文集にをさめられてゐる。それを繪にしたもの。○亭子院の畫かせ給ひて――河海抄に「伊勢集云長恨歌の御ゑの屏風亭子院にかかせ給て、所々の名をよませ給ひけるに、御門の御手にて、もみちはの色にわかれずふるものは、ものおもふ秋の涙なりけり」とある。玉の小櫛に「此繪を亭子院の御みづから書給へるやうに聞ゆれどもさにはあらず、繪師に仰せて、書かせ給へる也。さて上に女房四五人さぶらはせ給ひて、御物語せさせ給ふといへるは、すなはち此長恨歌のすぢの事を御物語せさせ給ぶ也。ただそのすぢをぞ枕言にいへる、すなはち上の御物語せさせ玉ふよしをことわれる也。此所かやうに見ざれば、長恨歌の繪歌の事、ここにはよしなし。」○伊勢――伊勢の御。前伊勢守藤原繼蔭の女。宇多天皇の皇子を生み奉る。三十六歌仙の一人。○もろこしの歌――漢詩。湖月抄に「師說、詩の事也。土佐日記にはからうたといへり」とあり。○ただそのすぢをぞ――萬水一露に「碩　人の妻におくれたるすぢを求めて歌も詩も御覽ずるなるべし」とある。一說に「長恨歌の筋」とあるが、宗碩の說がよいと思ふ。○まくらごと――林逸抄に「あけくれのことぐさ也。枕草子など言ふに同じ。朝夕仰せらるゝと言ふ心ぞ」とて、河海以下の說に從つてゐる。評釋に「まくら言とは、俗に寢ばなしといはんが如き意なり。寢ころびて物語する事なり」とあるが、從ひ難い。口ぐせにいふ語、常にいひならせる語の意である。○置き所も侍らず――評釋に「かたじけなき仰事は蓬生の宿に置くべき所もなしとの意にて、ふかく謝し奉りたる詞也」とある。一說にあまりの恭さにて、身の置き所もなしの意に解す。今は後者に從ふ。○亂りがはしき――古來異說がある。細流抄に「兩義あり。第二三句御門のうへを云ふに似たり。仍ち憚るべきと云ふ心也。又の義此程のみだり心に、書き樣なども亂りがはしきと也。此義可然歟。草子地也。評して言ふ也」とある。玉の小櫛に「二義ともひがごと也。みだりがはしとは、歌のよろしからざるよし也。などやうにと歌よりつづきたるにて心得べし（中略）さてこの歌實にみだりがはしきにはあらず、例の紫式部が卑下の心ばへにてかくいひなせるものなり（下略）」とある。以上を要約すると、一、帝に對して憚りある不謹愼なる物の言ひ方。二、不作法なる書き樣。三、拙劣なる歌の三つの意に解せられてゐる。宜長の指摘したやうに（二）の意ではない。むしろ、（一）に近く、たしなみの足らぬ、激越した感情をむき出しのといふ意に解すべきではないかと思ふ。さてこそ、「御覽じ許すべし」といふ言葉が生きてくると思ふ。單に歌が拙劣であるといふ意ではない。○かくても――崐江入楚に「抄　まことに哀なるさま也。古今に身をうしと思ふにきえぬものなればかくてもへぬるよにこそありけれといふ歌の心なり」とある。○宮仕の本意ふかくものしたりしよろこびは――宮仕といふかねての素志を深く守つて徹せしめた

その返禮にはの意。○かくても云々――玉の小櫛に「かくてもは、更衣はなくなられてもなり。おのづからは、さるべきついでもといふへかかれり。若宮云々へはかゝらず」とある。○生ひ出で――源三知抄に「生立てとかけり。生れ出給ふこと也」とあるが、湖月抄に「成人し給はゞと也」とあるのがよろしい。○なき人のすみか――評釋に「上にみぐしあげの調度めくものと言へるを、ここにて顯はし出でたる巧み、さらにいとめでたし。長恨歌に、臨邛道士鴻都客、能以精誠致魂魄、爲感君王展轉思、逐教方士殷勤覓、（中略）唯將舊物表深情、鈿合金釵寄將去、釵留一股合一扇、釵擘黃金合分鈿（下略）」とある。○いとかひなし――湖月抄に「是は母よりのおくり物にて楊貴妃が直ちにまゐらせしごとく、更衣のおこせしにはあらねばなり」とある。

通釋　命婦は主上がまだ御寢になつていらつしやらなかつたのを、あはれにも悲しいことと見奉つた。御前の小庭の草花が、大層面白い盛りなのを、御らんになるやうな風になされて、奥床しい女房たちだけ、四五人をお側にお召しになつて、御物語をおさせになつてゐるのであつた。この頃、明け暮れ御らんになる長恨歌の御繪は宇多院がお書かせになり、和歌を伊勢や貫之にお詠ませになつたものであるが、その和歌や、他の文人達の作つた漢詩などをも、ただひたすら夫婦の死別に關係のある事ばかりを、口ぐせのやうにしてお出でになる。折から歸り參つた命婦に、大そう詳細にお里のやうすをお問ひになる。命婦は感概深かつた事をひそやかに奏上する。母君の御返事をごらんになると、「まことに勿體なくて、どうしてよいか身の置き所もございませぬ。このやうな仰せ言をいただきまするにつけましても、かきくらす程の亂れ心地でございます。

荒き風防ぎしかげの枯れしより小萩が上ぞしづ心なき

――荒い風を防いでをりましたかげ（更衣）が枯れてなくなりましてから、小萩（若君）の上につけて、私は安らかな時とてもございませぬ。」

と言つた風に、つつましさの足りない、不謹慎な消息ではあるが、感情を沈めることの出來なかつた場合であるからと、帝もきつとお見許し遊ばすことであらう。本當にこのやうに悲しみに沈んでゐるとは、他人に見られまいと、帝はぢつとみ心を沈めていらつしやるが、どうしても我慢をなされきることがお出來にならない。はじめて更衣をお見みそめになつた年月のことまでも取り集めて、樣々のことを思ひつづけられて、ほんの少しの間も、その姿を見ないでは氣がかりであつたのに、かうした有樣でよくもまあ月日が終つてきたことであるよと、あきれるほどに思召される。

「母北の方が、故大納言の遺言をまちがへず、宮仕といふかねての素志を、深く守つて徹してくれた返禮には、そのし甲斐があつたと思ふやうにしてやらうと、いつも念頭に置いて來たことである。でも今は詮ないことであるよ」と仰せになつて、母君のことを、大層あはれにお思ひやりになる。「このやうな不幸なことになつても、若宮が御成人になつたなら、自然と然るべきよい序もあるであらう。長生をするやうにと、何事も辛棒するがよい。」などと仰せになる。命婦はあの贈物を御覽に入れる。これがあの亡き楊貴妃のありかを探し出した時に、その證據として道士のもらつて來たといふ釵であつたならばと、お思ひになるのも、甚だ詮ないことである。

月日經て若宮參り給ひぬ。いとゞこの世のものならず、きよらにおよすけ給へれば、いとゞゆゝしうおぼしたり。明くる年の春、坊

定まり給ふにも、いとひき越さまほしう思せど、御後見すべき人もなく、また世のうけひくまじき事なれば、なか〳〵危く思し憚りて、色にも出させ給はずなりぬるを、さばかり思したれど、限こそありけれと、世の人も聞え、女御も御心おちゐ給ひぬ。

かの御祖母北の方、慰む方なく思ししづみて、おはすらむ所にだに尋ね行かむ、と願ひ給ひししるしにや、終に亡せ給ひぬれば、またこれを悲み思す事限なし、御子六つになり給ふ年なれば、この度は思し知りて戀ひ泣き給ふ。年ごろ馴れむつび聞え給へるを見奉り置くかなしびをなむかへす〴〵宣ひける。

今は内裏にのみ侍ひ給ふ。七つになり給へば、ふみはじめなどせさせ給ひて、世に知らず聰う賢くおはすれば、あまりに怖しきまで御覽ず。「今は誰も〳〵え憎み給はじ。母君なくてだにらうたうし給へ」とて、弘徽殿などにも渡らせ給ふ御供には、やがて御簾の内に入れ奉り給ふ。いみじき武士、あた敵なりとも、見てはうち笑まれぬべき様のし給へれば、えさし放ち給はず。女御子たち二所、この御腹におはしませど、准ひ給ふべきだにぞなかりける。御かたがたもかくれ給はず、今よりなまめかしう恥かしげにおはすれば、いとをがしううち解けぬ遊種に、誰も〳〵思ひ聞えたまへり。わざとの御學問はさるものにて、琴笛の音にも雲居を響かし、すべて言ひ續けば、事々しううたてぞなりぬべき人の御様なりける。

話釋　○月日へてわか宮まゐり給ひぬ――新釋に「令の定父母には十三月の喪にて服一年、暇五十日なること、今も同じ。もとより一條院の御時も此の定めなれば、この若宮五十日過ぎは參り給ふべきなるを、祖母のすがすがとまゐらせずして、猶月日をへたりしを、其年の冬の頃まゐり給へるなるべし。さて更衣の卒は夏五六月か。命婦御使にまかでたるは、野分だちたる秋の事にて、七月の末、八月頃と見えたるに、とく若宮を供奉して參り給へといふ勅ありしからは、此の時既に御暇五十日は過ぎたりし事いとあきらけし。さて此つづきに明る年の暮坊定まり給ふとあるを合せても、更衣卒の年の冬參り給へること知るべし。或説に五歳の年服過ぎて參られしといふは、この文の前後をよくも考へざりし也」とある。岷江入楚に「或抄御説源氏五歳の年、服過ぎて參内云々。私云三年の喪なれば、さやうにもあるべけれども、只月日へてと大やうにいひたる面白し」とあるが、新釋の説に從ふべきであらう。○いとどこの世のものならず――玉の小櫛に「久しく見給はで、月日へ

て見給ふ故に、いよいようつくしくなりまさり給へる也。すべていとどといふ詞は、然いふべきよし有ていふ詞也」とある。○いとゆゆしう――孟津抄に「うつくしき心なり」とあり、評釋に「ヒトシホタイセツニ」と傍註を加へてゐるが、林逸抄に「善惡につかふ詞也。ここにては褒美の心也。或義に世にこえて美しき人をば、鬼神のとりたる例あり。帝源氏を御覽ありて、餘りに清らなれば、さやうの事をも、ふつと思召されば、いまいましき御心のある也」と言つてゐるのが正しい。氣味が惡いほどに思召される意であらう。○坊さだまり給ふ――立太子の御事を定め給ふこと。前坊の事、榊の卷に六條御息所の詞に見えてゐる。○いとひきこさまほしう――湖月抄に「朱雀院に越えて源氏を坊にせまほしう思召しと也」とある。○なかなか危く――湖月抄に「源氏立坊の事色にも出し給はば、源氏の御ため中々危き事なるべしとて也」とあるが、玉の小櫛に「源氏の君を坊に立て給ふことを、あやふくおぼしめす也。注いさゝかたがへり。」○かぎりこそありけれ――この「限」も、前に出たやうに、際限といふ意ではなく、やはりきまりと解すべきである。弄花抄に「光君は寵愛にてましましかども、順義にまかせおはします事殊勝の義なり」とあるのが正しい。○よの人――よ人とある本古寫本に多い。河海抄に「御諱字也。世の人とよむべし、世の字をすてて人もきこえてとよむべし」とある。岷江入楚に「或抄是は後宇多院の御諱世仁なれば、是をさけん爲なり。後嵯峨院御諱邦仁なれば、儒書の終史のうち、邦人とあるを、くにたみとよむ故實也。唐にても諱さくる事無論也」とある。○おば北の方――紫明抄に「祖母おほははといふ。」とて、源重之集の歌を引用してゐる。この詞若紫の卷にもある。○なぐさむ方なく――岷江入楚に「更衣の事を母君のなぐさむ方なく歎くなり。或說源氏の春宮にも立ち給はぬゆゑ思ひのそひてなりと云々。

此義用ひがたし。ただ更衣の事を思ひなげきし也」とある。○むつになり給ふ――新釋に「右の一宮坊に立ち給ふ年より御祖母の卒までの間に年ありて、今年六歳になり給ふ也。然るを此所をあしく心得て、三年の喪の過ぎて參り給ふなどいふは、皇朝に三年の喪てふ事はなき事なり。其上前後の文をよくよまぬ故に侍り。」とある。○今は内裏にのみ――評釋に「源氏君の内ずみし給ふ事を先いひ出ておくなり。文のかはりめに心を着くべし」とある。○ふみ始め――御讀書始のこと。天皇・皇太子・親王・諸王子が始めて、博士を召して、御注の孝經を讀みそめ給ふこと。御注は唐の玄宗の注したものである。博士が先づ御注孝經序と五字をよみ、これを尙復せしめ奉る。その儀江次第に詳しい。皇子七歳にて御書始の事、河海抄に見えてゐる。評釋に「さてなどといへる中に其ほかの諸藝をもならひ始め給へる事をこめたり」とある。○おそろしきまで――岷江入楚に「何もあまりすぐれたる人は世に長からぬ人などあり。帝の御心也」とあるが、評釋に「才氣のすぐれたるに、膽をつぶし給ふさまなり。かやうのおそろしきは、今俗にも言ふ語なり。舊註に命の長からぬものなればとあるはひがごとなり」とあるのが正しい。○今は誰もたれもえにくみ給はじ。はは君なくてだにらうたうし給へ――評釋に「今は誰も誰もえ憎み給はじ」までを帝の皇子に對してのたまへる語とし、「母君なくてだに云々」を弘徽殿女御に對してのたまへる語としてゐる。しかし、これはかく二つに分けるのは穩當でなく、又特に弘徽殿のみに向つて仰せられる言葉と解すべきでもない。誰も誰もとあるにても知られる如く、誰ともなく女房たち全般に對して仰せられた言葉と解すべきである。「だに」については、湖月抄に「更衣生きての世にはさもなくとも、なき後だに源氏の君をいたはり給へと也」とあり、新釋に「母君は妬まれてうせたれば御子をだにらうたくし給へ

となり」とある。評釋に「だにの辭なくての下にありては更にさやうには聞えぬことなり。もしくは母君ならでだにとありしを、なくてと寫し誤れるか」と言つてゐるが、「なくてだに」のままで意は通ずる。「母君の生きてゐた時に憎んだのは止むを得ないとしても、せめて母君のなくなつた今日なりとも、かはいがつてやつてくれ」との意に解すべきである。さてこの部分は、河内本と青表紙本とはほとんど本文に異同はないが、古本系統の本には相當な異同がある。古本には「今は誰も誰も何かはにくみ聞え給はん。母君おはせねばかくたぐひなき御樣かたちを皆あはれがりらうたきものにぞ聞え給ふ」とあつて、帝の御言葉ではない。本文校訂上、この部分は問題の箇所として將來の研究をまつべきである。○みすの中に――評釋に「いといと幼き人と雖も、男子をばみだりに簾の中へ入れられざりし昔の風俗思ふべし」とある。○さまのし給へれば――この「の」は前に「朝餉の氣色ばかり觸れさせ給ひて」とある「の」と同じく、「に」の意をあらはす助詞。○女みこたち二所――岷江入楚に「源氏の姉宮たち也。朱雀院御一腹なり。朱雀院御母弘徽殿女一宮同女二宮御腹別人前齊宮御母弘徽殿」とある。○御かたがたも――湖月抄に三說をあげてゐる。第一說は、弘徽殿と女みこ達二所の意とし、第二說は御兄弟の女宮たち又自餘の女御達の意とし、第三說は他の女御更衣達と解す。新釋や玉の小櫛に指摘した通り、第三說をとるべきである。御兄弟の女宮たちのことではない。○はつかしげに――打ち向ふ人の方ではづかしく感ずるほどの意。○學問――支那風の學問。漢才である。才ともいふ。和魂に對す。○雲井をひびかし――評釋に「雲の居る天までもひびかしといへるによそへて、大宮人のほめのゝしる事を聞せたるなり」とある。

通釋　その後月日がたつてから、若宮が御參內になつた。本當に一しほ人間の世のものではないばかりに綺麗に御成人になつたので、大そう氣味が悪いほどに思召された。明る年の春、東宮が御決定になる時にも、第一皇子を引き越してこの若宮をと、熱心にお考へになるけれど、若宮には御後見をすべき人もなく、また世間でも承知しさうもない事であるから、却つて若宮のために危險であると御遠慮になつて、そのやうな事は、顏色にもお出しにならないでしまつたのを、「あれ程熱心にお考へになつてゐたけれど、やはりきまりといふものがあつた」と、世間の人も申し上げ、弘徽殿の女御もすつかり御安心になつた。

さてかの祖母北の方は、心をなぐさめる方もなく悲しみに沈んで「せめて娘の居られる所にでも尋ねて行きたい」と願はれたそのしるしであつたか、たうとうおなくなりになつたので、帝はまたこれを悲しまれることが限りもない位であつた。若宮は六つにおなりの年であるから、御母君の御逝去の折とは違つて、今度は物のわけを知つて、祖母君を戀ひ慕つてお泣きになる。祖母君は、臨終の時に、長年の間、若宮に親しくお馴染み申し上げたのに、その若宮をあとに見殘し置き奉る悲しさを、くりかへしくりかへし仰せになつた。

若宮は、今は宮中にばかりお出でになる。七歲にお成りであるから、御讀書始の式などもお擧げになつて、世に比類のない程、敏く賢くいらせられるので、帝はあまりの事に、恐ろしいとさへ御らんになる。帝は、女御・更衣たちに向はれて「今は誰も誰も、この可愛いものをお憎みになることは出來まい。母更衣の生きてゐた時はともかくも、せめてなくなつた今日なりとも、かはいがつてやつて下さい」と仰せになつて、弘徽殿などにも渡御のお供に遊ばされ、すぐそのまま御簾の中へお入れ申される。どんな猛々しい武士でも、また情けを知らぬ仇や敵であつても、若宮を見て

は、思はず微笑んでしまひさうな樣子でいらつしやるので、さすがの弘徽殿もうちやつてお置きになれない。內親王お二方が、この女御の御腹におありになるけれども、せめてこの若宮に比べられなさりさうなお方さへなかつた。女御・更衣達も、この若宮にはお隱れにならない。今からもう優美に、こちらが氣恥しく思はれる位でいらつしやるから、たいそう面白く、しかし氣のおけるおもちやだと、誰も誰もお思ひ申し上げられた。表立つて特になさる御學問は今更云ふまでもなく、はかない琴や笛などの音も、禁中をあげて評判となり、すべて一々言ひたてると、あまりに仰山で、いやになつてしまひさうな若宮の御さまであつた。

そのころ高麗人の參れるが中に、かしこき相人ありけるを聞し召して、宮の中に召さむ事は、宇多帝の御誡あれば、いみじう忍びて、この御子を鴻臚館に遣したり。御後見だちて仕う奉る右大辨の子のやうに思はせて率て奉る。相人驚きて、數度傾きあやしぶ。「國の親となりて、帝王の上なき位にのぼるべき相おはします人の、そなたにて見れば、亂れ憂ふる事やあらむ。おほやけのかためとなりて、天の下を輔くる方にて見れば、又その相違ふべし」といふ。辨もいと才かしこき博士にて、いひかはしたる事どもなむ、いと興ありける。文など作り交して、今日明日歸り去りなむとするに、かくあり難き人に對面したるよろこび、歸りては悲しかるべき心ばへを、おもしろく作りたるに、御子もいと哀なる句を作り給へるを、限なうめで奉りて、いみじき贈物どもを捧げ奉る。朝廷よりも多くの物賜はす。

おのづから事ひろごりて、漏させ給はねど、春宮の祖父大臣など、いかなる事にかと、おぼし疑ひてなむありける。帝畏き御心に、倭相をおほせて、思しよりにけるすちなれば、今までこの君を、親王にもなさせ給はざりけるを、相人は誠に賢かりけり、と思しあはせて、無品親王の外戚のよせなきにてはたゞよはさじ、我御世もいと定めなきを、たゞ人にておほやけの御後見をするなむ、行先もたのもしげなる事と思しさだめて、いよ〳〵道々の才をならはせ給ふ。際殊に賢くて、たゞ人にはいとあたらしけれど、親王となり給ひなば、世のうたがひ負ひ給ひぬべく物し給へば、宿曜のかしこき道の

人に、考へさせ給ふにも、同じさまに申せば、源氏になし奉るべく思しおきてたり。

【省略】以下「年月にそへて」といふ所から「かがやく日の宮と聞ゆ」といふ所まで、省略する。この省略の部分の梗概は、年月にそへて帝は亡き更衣を忘れ給ふことが出來ない。先帝の第四皇女にして更衣に生きうつしの姫宮がお出でになると聞召され、入内し給ふやうにおすすめになる。四の宮の母后は、東宮の女御が意地の悪い人であることを恐れて、不賛成であつたが、桐壺帝の切なる御言葉によつて、つひに御入内と決定し、藤壺に住まはれることになつた。源氏は、亡き母君に生寫しといふ藤壺を慕はれ、折につけて好意を藤壺によせられた。世の人々は藤壺を輝く日の宮と申し、源氏の君を光君と申して、並べ稱した。

【語釋】○高麗人――原中最秘抄に「古老傳延喜御時相者狗人參入、天皇御于簾中、聞御聲云、此人爲國王歟云々」と大鏡の勘物を引いてゐる。玉の小櫛に「延喜のころ參れるは、みな渤海國の使にて、高麗にはあらざれども、渤海も高麗の末なれば、皇國にては、もといひなれたるまゝに、こまといへりし也。寶龜八年に參れりし渤海の使の事をも、文德實錄一に高麗國遣使と記されたり云々」と見えてゐる。○宇多の帝の御誡めあれば――伊行の源氏釋に先づこの故事を指摘し、奥入に至つて、「外蕃之人必可召見者、在簾中見之、不可直射耳、」と寛平御遺戒の文を引いてゐる。河海抄に御遺誡の文面と、ここの本文とが必ずしも同意でない由を疑つてゐるが、花鳥餘情に「必の字の意は召されてはかなふまじき時のことなり。これにてうちまかせてはめさるまじきよし聞え侍るなり」と言つてゐる。從ふべきだ。○鴻臚館――河海抄に「職員令云玄蕃寮蕃客辭見讌饗送迎及在京夷狄監當館舍事謂鴻臚館也云々」とある。官職故實秘抄に「帝都いづ地にありとも蕃客朝聘の時入るゝ所の館舍なり。玄蕃寮是をつかさどる。今の平安城にては、七條朱雀の東西にありしと也云々」とある。○右大辨――林逸抄に「うつぼ物語にとしかげが父に右大辨にて式部大輔かけたる者もろこしより渡りたる人に、文など作り交はしたる事あり。此右大辨は無系圖、源氏を子の如くにしてなり。」とある。右大辨は太政官の判官である。太政官には三局があり、少納言一局、左辨官一局、右辨官一局、各局を分掌する。但し少納言は太政官内の事のみ掌つて、外の事にはあづからない。左右辨官は八省及諸國の事を分掌する。○國のおやとなりて云々またその相たがふべし――この一節には、古來有力な二說がある。第一は花鳥餘情の說で「くにのおやとなるとは、六條院の太上天皇の尊號をえ給へる事を云へり。みだれうれふるとは須磨の浦へうつされ給へる事也。公の御かためとは攝政關白の天子を補佐し奉る事也。源氏の君はつひに尊號を得給へりしかば、おほやけの御かためにはその相たがふといふ也」とあり、第二は細流抄の說で「此段花鳥の義いかが。言ははじめより國のおやとなりてあらば、あしかるべし。天下をたすくる方にてあらば、みだれうれふる方遠ひてよかるべしと也」とある。即ち前說は、「その相たがふ也」を、みだれうれふる相は變りて吉となるべしとの意に解し、後說は、もともと源氏は帝王たるの相であるから、攝關としてはその相がかなはないとの意に解するものである。弄花抄・紹巴抄・首書等は前者に、岷江入楚所引の山下水の說・林逸抄・花屋抄等は後者に從ふ。契沖は「今案、又の字に太上天皇の尊號を得給ふべき意こもれり。おほやけのかためと成りて、天下をたすけば、みだれうれふべからんずる相をたがへてよからんといふ心に見たる人は、又の字を失へり」といつて後者に從ひ、眞淵は「源氏のみこ天位にのぼるべき相おはする人ながら、しか定めて見れば亂れ憂やあらんと見ゆ。さらばとて臣下として天皇を輔佐する人になりては既に天皇の相そなはり給へるに違ふべしといひなしたるなり。故に臣とはなし給ひたれど、此の相をしらせて、終に太上天皇の尊號を得給へりけるを思ふべし」といひ、宣長は、更にこの說を詳細に說きて曰く「源氏の君はつひに天皇の御父にて、太上天皇の尊號を得給へれば、はじめより帝王の相おはせし也。然れどもまさしく帝位にはのぼり給はざれば、帝王の相はありながら、いささか闕たる所の有りしなるべし。これによりて今この相人その闕たる所を心得がた

くて、あやしみかたぶきつつ、思ひめぐらすに、もしくは帝王になり給ひては、亂れうれふる事などもやあらん。又帝王の相に少しかけたる所あるは、もしくは又攝政關白などとなり給ふべき相かとも思へども、帝王の相なれば、攝關にしてはその相かなはず、たがふべしといふ也。みだれうれふる事といへるは、帝王の相にて、闕たる所のあるを、疑ひてもしさることやあらんといへる也。然るをもとより亂れうれふべき相の有りしやうに注したるは誤也。又其相たがふべしを、輔佐の人臣にておはしまさば、みだれうれふる相はたがひて、吉たるべしといへるも誤也。さては宗祇・湖月抄などもいへるごとく、又といへる言にかなはず。これは花鳥の說ぞよろしかりける」と言つてゐる。湖月抄の師說に、「兩說ともに用ふべしと云々」とあるが、「又」の字の解釋によつて、後說を正しいものと見るべきである。○みだれうれふる事――天下の動亂と解する說もあるが、さうではなく源氏自身にとつて心配事、ごたごたの事件といふ程の意に解すべきである。○ざえ――さえの字の讀み方について「さえのさ文字淸むべき由、一條禪閤の御說と云々。然れどもさ文字古本濁て聲をさす也。可然哉。其故は神樂のさいのをのこをも、さ文字濁る也。濁りてよむべきなり。」とある。紹巴抄に「呉音なれば濁る也。才の字を催馬樂にてはざえと讀めり」とあり、湖月抄の師說にも「濁りてよむべし」とある。河內本には聲をさしてゐて濁つてゐるから、「ざえ」とよむべきである。學才・漢才・學問の意にて、支那風の學才について言ふ。○ふみ――詩・詩文。花の宴にもこの用例がある。○かへりては――古註に明解がない。湖月抄及び評釋の傍註に「別ををしむ心也」とあるのみである。「かへりてと譯するもの、（宮田氏の對譯・金子氏の新解等）歸りてと譯するもの（島津氏の講話・有朋堂文庫等）の二者がある。是は帚木の卷に「濁りにしめる程よりも、なま浮びにては、かへりて悪しき道にもただよひぬべくぞおぼゆる」とある「かへりて」と同じで、前者卽ち「ナカナカニ」「ナマナカニ」の意に解すべきである。○漏らさせ給はねど――この句、「おのづから事ひろごりて」にかかると思はれる。河內本はこの部分が「もらさせ給はねどおのづからことひろごりて、春宮のおほぢおとどなども聞き給ひて」とある。古本には二種あつて、河內本と全然同一の本文を有するものと、「おのづから事ひろごりてもらさせ給はねば春宮のおほぢおとどなど」なる本文を有するものとがある。河內本及び古本一本の本文に從へば、意は自ら明かであるが、古本別本の「ば」とあるに從へば、「事は自然評判になつたにかかはらず、帝は秘しておくびにもお出しにならないので」と解すべきである。本文校訂上重要な問題として、後賢の說をまつ。今は假りに前者に從つて通釋しておく。○やまとさう――紫明抄に「我國にて見なれたる相といふ心也」とあり、河海抄に「和國相也」とあり、花鳥餘情にもその意に解し、細流抄に「和國の相人もかやうに申す也」とあり、紹巴抄に「日本の相人」とあり、諸抄みなこれと同樣であるが、玉の小櫛に「帝の御心に此御子をもし親王にもなさば、人の疑ひなど出來て、かへりて御爲によろしからじと考へ給へることをやまとさうとはいへる也。（中略）心に考ふることを、心の占といへるたぐひ也。さてかの高麗の相人のみだれうれふる事やあらんと申せるが、御みづからおぼしめし考へたるところと、あへる故に、相人はかしこかりけりとおぼせる也。細流に和國の相人もかやうに申す也とあるはたがへり。これは相人に見せ給へるよしにはあらず、もし實の相人のことゝしては、かしこき御心にといへるも用なく、おぼしよりにけるといへるもかなはず、帝の御心にかむかへ給ふ事を、やまと相としもいへるは、こまの相人の事をいへる所なる故也。さて相といふか

ら、おほせてともいへる也」とある。これは玉の小櫛の說が正しい。やまと相は、やまとの相人の意ではなく、やまと風の觀相の意である。やまと歌とかやまと繪とかの例と同樣である。○相人はまことにかしこかりけり――前項の玉の小櫛の說を參照。○無品親王の外戚のよせなき――源註餘滴に「湖月抄にむほんしんわうのぐわるせきと假字つけたるはわろし。かやうに漢音もてよむことは、物語書には例なき事なり。朱雀をすざく、先帝をせんだいのやうによみてこはごはしからずよむがならひなり。こも、むぼう親王のげさくとよむべし云々」とある。花鳥餘情に「親王は一品より四品までは有品也。五品にあたるをば五品とはいはず、無品といふ也。童體の時、親王宣下あるは、必ず無品也。光源氏いまだ元服し給はず、これによりて無品の親王とはの給へり。又親王にたし給ふは、天位につけ給はんため也。しかるを御門やまとさうをおぼしおほせて、此君をみこにもなさせ給はぬ也。一の御子は右大臣の女御の御はらにてよせ重く、うたがひなきまうけの君と云へるに對して、源氏の君をば外さくのよせなきとはいへり。御母かたによせ重き人なければ、みこにもなし給はぬは、いとかしこき御おきてなるべし。」とある。諸抄みな之に從ふ。○わが御世もいと定めなきを――帝のわが御治世も定めがたく思しめすよしなり。さるは御悲しみがちにて御命もいかがとおぼせるなるべし。其ほどに若宮をゆくすゑたのもしきさまにせんとおもほすなり」とある。○いよいよ道々のざえ――ざえは學才。岷江入楚に「前にふみはじめの事、わざとの御學問などとあり。仍ていよいよと書けり。」とある。弄花抄・細流抄等に「天下のたすけなどにならせ給はば、才學なくてはとなり」とある。○きはことに――孟津抄に「際殊。一段とと云ふ心也」とある。これに對して契仲は拾遺に「今案毎際にて、きはごとにとこの字濁るべし。其故は上にいよい

よ道々の才をならはせ給ふといふより、續きたれば、其一才一能ごとに堪能なりといふ也」と云つて、「こと」を毎の意に解したが、宣長は玉の小櫛に「拾遺に毎際也。この字濁るべしといへるはひがごと也。さてはきはといふこと聞えず。なほ際殊也。二文字清むべし」と言つて舊註に從つてある。○世の疑ひ――岷江入楚に「天子の位などを望み給はんと人の思ふべきなり」とある。○宿曜――河海抄に「宿曜廿八宿九曜の行度をもちて人の運命を勘ふる故也」とある。弘法大師入唐の時、宿曜經六十卷を持ち歸つたといふ。○おなじさまに――相人と同じやうに。○源氏になし奉るべく――花鳥餘情に「嵯峨天皇弘仁五年に男女すべて三十人に源朝臣の姓をたまふ。これ源氏の始なり。醍醐の御子高明親王は元服以前源氏の姓をたまふ。六條院は其例也。」とある。

通釋　その頃高麗人が來朝したその中に、優れた人相見のゐたことを、帝がお聞きになつて、外人を宮中にお召しになる事は、宇多帝の御遺戒があるから、ひどく内密にして、この若宮を鴻臚館に遣はした。御後見といふ風で若宮にお仕へする右大辨の子のやうに見せかけて、お連れ申す。人相見はおどろいて、たびたび頭を傾けて不審がる。「國の親となつて、帝王といふ最上の位置にのぼる筈の人相のおありになる方であるが、その帝王といふ方面から判斷すると、何かうるさい心配事が起るかも知れない。又朝廷の柱石として、天下の政務を輔けるといふ方面から見ると、元來帝王の相故に、またその相にくひちがひが來る」と判じた。右大辨も非常に學才のすぐれた物識りで、あつて、高麗人と交換した談話などは、まことに興味あつた。詩など互に作りかはして、高麗人は今明日中に歸り去らうとする時に、世にたぐひまれな御子に對面をした喜び、又お別れはかへつて悲しいこととならうといふ意味を、面白く作つたので、御子も大そうあはれな詩句をお作りになつ

たのを、高麗人は限りもなく御稱讃申し上げて、大變すばらしいお贈物など捧呈する。朝廷からも、澤山の贈物を御下賜になる。

帝はこの事を御口外にならないけれど、自然評判が世間に廣まつて、春宮の祖父なる右大臣などは、「これは一體どうした事か」と、疑つておいでになつた。帝は賢明なる御心で、日本流の觀相をあそばされて、已にお氣づきになつてをられた事柄であるから、今までこの若宮を親王にもおなしにならなかつたのであるが、今となつて、相人は實にえらいものであつたよと、彼此思ひ合はされて、ひそかに、この若宮をば無品親王の、しかも外戚のしつかりとしたもののない心細い境遇のまにうちやつて置くことはすまい。御自分の御治世も、まことに不定なことであるから、臣下として朝廷の御輔佐として御李公をすることが、今は勿論、將來も安心のゆくことであると御決心になつて、一層各方面の學問をお習はせになる。若宮は群を抜いて賢明であられて、臣下としておくにはまことに惜しむべき事であるけれど、若し親王とおなりになれば、世間の疑ひを負ひさうな樣子でいらつしやるから、宿曜の道の達人に判斷をおさせになつて見ても、みな前と同じ樣に申すので、源氏にし奉るやうに、おとりきめになつた。

この君の御童姿いと變へま憂く思せど、十二にて、御元服し給ふ。居起ちおぼしいとなみて、限りある事に事を添へさせ給ふ。一年の春宮の御元服、南殿にてありし儀式の、よそほしかりし御ひゞきにおとさせ給はず。所々の饗など、內藏寮穀倉院など、公事に仕う奉れる。疎なる事もこそと、とりわき仰事ありて、淸らを盡して仕う奉れり。

おはしします殿の東の廂、東向に御倚子立てて、冠者の御座、引入の大臣の御座御前にあり。申の時にぞ源氏參り給ふ。みづら結ひ給へる面つき、顏のにほひ、樣かへ給はむ事措しげなり。大藏卿藏人仕う奉る。いと淸らなる御髮をそぐ程、心苦しげなるを、上は、御息所の見ましかばと、思し出づるに堪へ難きを、心强く念じかへさせ給ふ。かうぶりし給ひて、御休所にまかで給ひて、御衣奉りかへて、下りて拜し奉り給ふさまに、皆人涙おとし給ふ。帝はた況てえ忍びあへ給はず、思し紛るゝ折もありつるを、昔の事とりかへし、悲しくおぼさる。いとかうきびはなる程は、あげおとりやと疑はしく思されつるを、あさましう美しげさ添ひ給へり。

【省略】「ひきいれのおとどのみこ腹に云

語釋　○かへまうく――岷江入楚に「わらはにてうつくしきものも、あげおとうとて、元服し

々」から、最後までを省略する。今省略の部分の梗概を左にかかげる。

源氏元服の式に加冠の役を仕へ奉つた左大臣の北の方は、桐壺帝の皇妹であられ、その御腹に姫君があつた。東宮妃として御所望があつたが、おうけせず、源氏君を婿として迎へることになつた。それとなく源氏にほのめかして見るが、まだ物のはづかしい時で、源氏は何とも答へることが出来ない。帝は左大臣を御前にお召しになり、加冠の役に對しての樣々の御祝儀を賜つたついで、有難い御製をいたゞき、左大臣も御禮の御返歌を申上げて退出した。

その晩、左大臣の里邸に於て、源氏の君の結婚の式が盛大にあげられた。左大臣の姫君は今年十六、源氏の君は十二。かねてから皇室との御姻戚關係で、聲望重い家柄であつたが、今源氏を迎へて、花々しさは更に加はつた。東宮の御祖父であられる右大臣の權勢も壓倒される程であるので、右大臣は祕藏の四の君の婿として、左大臣の正室の御腹なる藏人少將(後に頭中將)を婿に迎へられた。

源氏の君は、とかく内裏住みで、ゆつくりと左大臣家に行かれることはない。左大臣家の姫君は、

てかはる事もあるなり。末に其心あり。御門の思召す御心也」とある。○十二にて御元服——河海抄に「人生十二を一周といふ。此歳冠禮する和漢の例也。禮記曰天子之子十二而冠」とある。餘滴に「新釋に云元服の式はそれぞれ定れる中に、猶ことをそへ給ふ也。さて西宮抄に親王元服一世源氏元服などの式はすこし異なれども、この度はことをそへさせ給ふとあれば、親王元服のさまにあたれること多ければ、親王の條を引く」とて、西宮抄の記事を引いてゐる。○ゐたち思しいとなみて——河内本には、「帝よろづにゐたちておぼしいたつき」とある。紫明抄・河海抄・私祕抄に引く所のものは河内本の本文である。林逸抄に「たちゐを逆に云ひたるぞ」とある。○限あること——きまりのある事。定例のあること。○南殿にて——紫辰殿。主上南面に御座あり、萬機をとり行はせられる正殿にて、此辰の居所紫微宮によせて紫辰殿といひ、南殿とも申す。天子・春宮の御元服は南殿で、皇子は清涼殿であげられる。○よそほしかりし——河海抄に「粧」の字をあてる。美々しき事。○御ひびき——評釋に「何事にまれ事のある時に、世の人の甚しくいひさわぐ事を、ひびきといふ。世の響といふ意なり」とある。○所々の饗——官職故實祕抄に「親王・大臣・大中納言・參議・散二三位以下に饗を給ふ所々いへり。内藏寮・穀倉院儲之」とある。紫明抄・河海抄・私祕抄に引く抄に引いた北山抄の記事をあげてゐる。○内藏寮——岷江入楚に「私云内藏寮諸國の綾絹絹などを納めおかれて、御服の裁縫以下をつかさどる官也」とある。○穀倉院——拾芥抄に「穀倉院・二條南朱雀西・在大學西・納畿内諸國銅錢・無主位職田、及沒官田・大宰稻等・諸庄物・勤年中饗・有公卿及四位・五位・別當・預・藏人等」とある。無主役官の田稅諸庄の物銅錢の類を納めおき、年中の饗にあてられる所である。○おほやけごとに仕うまつれる——湖月抄に「東宮の御元服には大體

に仕りて念入らざりし也。今源氏の元服には念入れよとの仰事ありしとなり」とあつて、東宮の御元服に念入らざりしやうに註してゐるが、これは意味が少し異る。玉の小櫛に「東宮の御元服の時は、ただおほやけざまの定まりのままにつかうまつりし也。さてはなほおろそかなることもぞあらむと也。すべておほやけざまの事は、ただ定まれるあとのままに、たがへじとまもるのみにて、ことに心を入るることなく、こまかなるかたはなきものなれば也。云々」とあるのが正しい。○おはします殿——「殿」の字のよみ方について三說がある。河内本の古寫本には「でん」又は「でむ」とよませてゐる。紫明抄もまた同樣である。青表紙系統の諸本には「との」とよませたものがある。一葉抄には「殿をおとどとよむ」と註してある。湖月抄には、「でんとよむべし」と傍註を加へてゐる。玉の小櫛には、「てんとよむべしといへるはいかが。ただとのとよむべし。一本にはすなはち假字にてとのと書けるをや」とある。古本系統の本にも「でん」とある本があるから、ここは河内本の方に從つて、「てん」とよんでおく。さておはします殿とは、岷江入楚に「清涼殿なり。中殿とも云ふ。常に天子のおはします故に、おはします殿とかけり。殿をばてんと讀むべし。云々」とある。花鳥餘情に、西宮抄を引いて、一世源氏元服の事を詳述してゐる。○御倚子を立て——和祕抄に「御倚子とは主上の腰をかけ給ふものの也」とある。○冠者——和祕抄に「くわんざとは元服する人を云ふ」とある。一葉抄に「くわんじやとよむ」とあるが、ここでは「くわんざ」とよんでおく。○引入のおとど——湖月抄に「其日冠をめさせそむる人なり。もとどりを引入る故なり。」とある。ゑぼし親のことである。加冠の大臣は、太政大臣が之にあたり、太政大臣のない時には、特にその人を任ずる。ここは左大臣が勤めたのである。○申の時——今の午後四時。○みづら——河海抄に

表面上大切なお方とは思はれるけれど、心の中ではたゞ藏**壺**の事ばかりお慕ひして、時々花紅葉につけて心のほどをお傳へ申してゐられた。宮中では故母御息所の住まはれた桐壺卽ち淑景舍を、そのまゝこの君のお部屋とし、昔更衣につかへた女房たちを、そのまゝこの君におつけなされ、お里の二條院を改造せしめて、源氏の君の邸宅とされた。源氏はかうした御殿に、藤壺のやうな理想的な婦人と共に暮すことが出來たらと、そればかり考へてゐられる。

光君といふ名は、高麗人が、この君をおほめしてつけたお名前であるといふことである。

以上で大體、桐壺の卷の講義を終る。桐壺の卷は、語釋も可なり詳しく、ことに本文校訂に關する部分や、解釋の異說に關する部分も、あまり學術的に流れすぎない範圍に於て、出來るだけふれる方針に從つた。なほこの方針は次の帚木の卷にも及ぼすことにする。空蟬以下の各卷は限られたページでは、たうていこの方針で終始することは出來ないのであるから、語釋を簡單にし、主力を通釋に注ぐことにした。異說のあるものも、あまりふれないこととと

「髮臥（カミヅウラ）」の字をあててゐるが、契沖は「今案この二字出づる所を知らず」と言ひ、和名抄をひいてゐる。餘滴に「眞淵云、東帶はあげみづらにし、直衣にはさげみづらにす。源氏今日はあげみづらも也。結ひやうは雅亮裝束抄にくはし」とある。○大藏卿藏人仕うまつる――この部分は本文校訂上にも注意を要する所である。原中最祕抄には弘安源氏論議を引いてゐる。論議に「左（侍從三位雅有）問云源氏元服の所に大藏卿藏人理髮つかふまつることおぼつかなし。右（康能朝臣）答云大藏卿のこと、藏人頭は理髮をつとむる事なれば、大藏卿の藏人とよむべきか。藏人頭にて大藏卿をかねたる人定めて例侍らんか。かれに准じて心得侍るべきにや。左申さらば藏人頭の大藏卿とぞかくべかりける。大藏卿の藏人わづらはし。此物語あまた本見合はせ侍るに、なべては大藏卿藏人仕ると有り。おほかたに大藏卿藏人仕るといふについて義あるべきにや。右申藏人の大藏卿と書くべきこと、此物語のならひ人の名字を書く事不同なり。本々家々に傳はれり。大藏卿の藏人見及ぶ所也。「の」文字なくして義侍らば、くはしく申さるべし。左申藏人はすべて理髮の名にて侍らん。古き記錄に見およぶこゝちす。然らば大藏卿といふ人藏人をつかふまつりけると見えたり。右然らば理髮藏人のこと、何れの記に侍るにや。左さること有りとばかり見及び侍れども、いまだ考へ覺悟し侍らずとて、猶くはしき事も不申云々。此番またふかきゆゑをかくして、其の理あらはならざれば、勝負さだめ難し。但其の記をひかずといへども、此義すでにあらはるる上は、猶右强しや。大藏卿藏人の事つまびらかならぬ事、右の論をもて知るべし。傳宮の書きたがへなども有りけることにや」とある。弘安源氏論義に見える說は、大藏卿の藏人と「の」の字を附して讀むべきであらうとする說である。これに對し原中最祕抄には「大藏卿ハ理髮也。藏人ハ役奏ナリ」と兩人說をもあげてゐる。河海抄には「雄略天皇之世初有大藏官之號卽以秦酒公爲大藏官頭云々。一說云大藏卿は理髮藏人は役違兩人名歟。又云理髮役は藏人頭也。而故障之時大藏卿勤之歟。又云藏人頭兼大藏卿歟。藏人の大藏卿とも、大藏卿の藏人ともいふ歟。代々理髮藏人頭例也。又云大藏卿藏人所ともに元服の所役をつとむる歟。但親王元服に大藏省祿を儲くる事無先規歟。然而是は准東宮御元服儀歟。詞にもかぎりある事に事をそへ、春宮の御元服南殿にてありしにおとさせ給はずとあり。」と頗る多端なる諸說をあげてゐる。これに對して花鳥餘情は「諸說ありと雖も、下の詞にいときよらなる御くしをそぐ程とあれば、理髮の人と聞えたり。しからば大藏卿の藏人は藏人頭の大藏卿と心得べきなり」と弘安源氏論議の說に還元してから多くの諸註はみな之に從つた。玉の小櫛には「これは大藏卿なる人の理髮の役をつかうまつるといへるなれば、理髮にあたる詞あるべきに、なきは聞えがたし。さればこれはみくし上げとありけんを、くら人とは寫し誤れる歟。理髮を御くし上といふべき物也。もし又花鳥の說の如く、大藏卿にて藏人頭をかねたるよしならば、くら人の下に、理髮をいへる詞のありしが落ちたるか、いづれにまれ、其の詞なくては何事を仕奉るとも聞えず」と云つてゐる。小櫛の說もさることながら、前後の文の關係上、理髮の役を仕うまつつた事は明白である。やはりここは、大藏卿の藏人頭と解すべきである。しからば現存諸本中に、「大藏卿の藏人」と「の」の字のあるものがあるかといふに、周桂自筆本、池田光政手澤本の如き、明かに「の」の字をもつてゐるものがあるから、今は花鳥の說に從つておく。○御やすみ所に――花鳥餘情に「御やすみ所は冠者の休所なり。康保二年八月御記云下侍東第一間旋立屛風、其中敷土師二枚菌一枚、爲親王換衣處云々。今案一世源氏元服にも下侍をもて休所とす。西宮抄に見えたり。又御ぞたてまつりかふとは、元服の後

し、一般に行はれてゐる說をとることにした。

裝束わらはの時にかはるべき也。童體の時は赤色の闕腋の袍を着す。殿上の童にも赤色なり。元服の後は源氏の君は無位人也。衣服令云無位黃袍也。西宮抄にも黃衣と見えたり。元服の後は縫腋の黃袍をたてまつるべし云々」とある。御やすみ所は淸涼殿の南にある下侍のことで、一世の源氏がここで更衣をなすことは、西宮抄に見えてゐる。○御衣――餘滴に「御ぞ。これをおんぞとよむ人あり。印本にもおんぞとかけるも見ゆ。されどこれはみぞとよむべく思はる。」とて、和名抄・古事記延喜式・拾遺集・枕草子等の用例を引いてゐる。○おりて拜し奉り給ふ――畝江入楚に「私親王は仙花門より入りて東庭において拜舞、太子は笏・御衣等をたまはりて堂上にて拜あり」とある。細流抄に「春宮の御元服は南殿堂上にて拜あり。是は堂下にてある故に、皆涙おとすといふ義あり。されどもただ源氏の容儀進退を感ずる心可然歟」とある。○きびは――紫明抄に「稚　きびは　いとけなき也」とある。河海抄に「稚　日本紀」とある所から、拾遺に「今案日本紀に稚の字なし。神代紀に『わかし』とはよみたれど、『きびは』と點じたる事なし。」とあり、餘滴に、この詞の用例を、宇津保・宇治拾遺・若菜の卷等に求めて列記してゐる。

通釋　この若君の御童體を、帝は大そう變へることを辛く思召されるけれど、十二で御元服になる。帝は御自らお手を下され、立つたり座つたりしてお世話をなされて、元服式の定まつたきまり以外に、色々な事をつけ加へられた。先年春宮の御元服の折、紫宸殿であげられた儀式が、美々しく盛んであつた評判にもおとらせにならない。所々で賜はる饗膳など、內藏寮や穀倉院等から、ただ表向きの公事として調達した仕事では、あるひは疎略なこともあるかも知れないと、特に仰せ言が下つて、立派なことのかぎりをつくして奉仕した。

常の御座所たる淸涼殿の東廂の間に、東向に御倚子をたてて玉座とし、冠者の御座及び加冠の大臣の御座がその前に設けてある。申の刻に、源氏の君が參上なされる。髮をみづらにおゆひになつてゐる顏つきの艶やかさ、その童姿をおかへにならうのは、まことに惜しさうである。大藏卿の藏人頭が、理髮の役を奉仕する。大さうきれいな御髮の先をきる時、如何にも氣の毒さうにしてためらつてゐるのを、帝はこれを故御息所が見たならばと、亡き人をお思ひ出しになるにつけて、たまらなく悲しいのを、心强くぢつと我慢をあそばされる。加冠をなされて、御休息所の下侍に御退下になり、赤色の闕腋の袍をぬぎ、縫腋の黃袍にお召しかへになつて、堂下におりて、拜舞をなさる御樣に、並み居る人々はみな感涙をお落しになる。帝はまた殊に我慢なさりきれない。今までは他事にまぎれてお忘れになる折もあつたものを、再び昔の事をとりかへして悲しく思召される。ほんたうに、このやうに幼い時は、髮をあげては見おとりがしはすまいかと、疑はしく思つてお出でになつたが、かへつてあきれる程、おかはいらしさがおそひになつた。

帚木

光源氏、名のみことど〳〵しう、言ひ消たれ給ふ咎おほかなるに、いとどかゝるすきごととどもを、末の世にも聞き傳へて、輕びたる名をや流さむと、忍び給ひけるかくろへごとをさへ語り傳へけむ、人のも

の言ひさがなさよ。さるは、いといたく世を憚り、まめだち給ひけるほどに、なよびかにをかしき事はなくて、交野の少將には笑はれ給ひけむかし。

まだ中將などにものし給ひし時は、内裏にのみ侍ひようし給ひて、大殿にはたえ〴〵まかんで給ふを、しのぶの亂れやと、疑ひ聞ゆる事もありしかど、さしもあだめき目馴れたる、うちつけのすき〴〵しさなどは、好ましからぬ御本性にて、稀には、あながちに引き違へ、心盡なる事を、御心に思し止むる癖なむ生憎にて、然るまじき御振舞もうちまじりける。

語釋　○ことごとしう――仰山に。大袈裟に。○いひけたれ――いひ落される。名に似ぬつまらない男とけなされる。○とが――缺點。過失。ここでは必ずしも罪過といふ意ではない。○いとど――下文の「流さむ」にかかる。○忍び給ひける――そつと祕密にしてをられた。○すきごと――河海抄以下の諸抄に數奇の字をあててゐるのは正しくないことを、契沖が指摘した。花鳥餘情は源氏の名をすきごとといふ、源氏の君を高麗人に相せしめ給ひしことをいふのであるといつてゐるが如何。玉の小櫛に好色のことに解したのに從ふべきである。しかしすきごとは今我々の使つてゐる好色といふ言葉とは、少しく内容を異にしてゐる。憑むべき、排斥すべき好色ではなく、むしろ風雅として是認された意味における好色である。「通」とか、「粹」とかに似たもので、多分に精神的な要素をもつてゐる。女たらしといふやうな意味ではない。○人の――作者自身をさす。世間の人といふ意ではない。紹巴抄に「紫式部とが多しといひたる也」とあるのが正しい。○さるは――評釋に「さるはといふ辭、ここなるはいささか異にて、されど、さはいへなどいふ意に近く聞ゆ」とある。○なよびかに――孟津抄に「なよひかに」と「ひ」の字すみてよむべしと云つてゐるが、眞淵はそれに反對した。千鳥抄や紹巴抄には「び」と點をさしてゐる。しなやかに。なよらかに。やはらかにの意である。○交野の少將――古物語の名。この物語は今の世に傳はらないが、その名は枕草子や落窪物語等に見えてゐる。交野の少將といふ風流人を主人公として、その豐かな感情生活を述べたものと思はれる。○笑はれ給ひけむかし――漁色の仕方がまだ不徹底であると嘲笑され給ひしことであらうと解するのはよくない。漁色といふ意ではなくて、風流といふ意である。まだ風雅な道に徹してをられないと、交野の少將の目には見えたことであらうの意である。○まだ中將などに――玉の小櫛に「上の發端のすべての語をうけて、其のはじめつ方よりの事どもを、これより語りはじむる也。まだといふも、その始めに立ちかへりていふ故也。などといふもはじめつかたをかろく云へる詞也。給ひしのし文字は、すべて昔ありし事を語るよしなれば也。然るに此の過去のし文字を疑ひたる註はいかが」と、細流抄に「し」を疑つてゐるのに反對した。まだ中將などにと、過去を叙する形になつてゐる所から、この卷は、他の數卷が成立した後に於て書かれたもののやうにも考へられてゐる。さて中將とは、左右近衛府の次官。○さぶらひようし給ひて――さ

ぶらひをよくし給ひての意。さぶらひは名詞。評釋に「このさぶらひは醫言也。伺候、とのゐなどと云はんが如し。俗言に云はば、禁中の御番をよくし給ひてといふ意也。」とある。○おほいどの――細流抄に「葵の上の御方也。綱壺の卷にも内ずみのみこのましうおぼえ給ふとあり。五六日さぶらひ給ひて、おほひとのには二三日などたえだえにまかで給ふとあり。」とあり、評釋に「この御說の如く、桐壺の卷の脈をうけてつながれたる所なり」とある。○しのぶのみだれや――伊行の釋に「むさし野のわか紫のすり衣しのぶの亂れ限り知られず」の歌をあげてゐる。奥入に「春日野の」となつてゐて、以下の諸註みな之に從ふ。伊勢物語卷頭に見える歌である。○さしもあだめき――評釋に「さしもはこのましからぬへ係る語脉なり。此段のてにをはいと紛らはしきを、ひとわたりいはば、宗祇注にかやうに人の疑ひ思ひしかども、光君の御心にはなびきやすき人に、心とめ給ふことなき御本性なるにより、さもなかりけりといふ義也といへるよろしからん。されどもさもなかりけりといふにあたる詞なければ、うちつけにはさは聞え難し。さればしばらく御本性にてといふ下に、さはなかりしかどもまたといふことを加へて聞くべし。この所大かた脫文あるべくおぼゆ。」とある。この所古本系統の諸本には、「さしもあらざりけり。おほかためなれたる……」とも「さしもあらざりけり。うちみだれめなれたる……」ともあつて、文意が明瞭であると同時に、宗祇や宣長の說の正しいことが立證された。○御本性――湖月抄に「生れつきたるさまをいふなり」とある。○稀れには――評釋に「まれにはひきたがへあながちに心づくしなることをとつづく語脈なるを、うちかへしてかくいふは、例の文法なり。引きたがへとは、うちつけのすきずきしさなどは好ましからぬ御本性に引きたがへといふ意也」となる。○癖なんあやにくにて――評釋に「なんはあやにくへのみ係る辭の如くなれど、さては下の「ける」といふにかなはざれば、なほ打まじりけるへかかる辭と見るべし云々」とある。○さるまじき御ふるまひも打ちまじりける――玉の小櫛に「これまでの文中將などにて物し給ひしころのさまをひろくいへる也。此の卷の時のことにはかぎらず。」とあるが、實は帚木・空蟬・夕顏の三卷、即ち源氏十七歳の時の事について云つたのである。夕顏の卷の卷末に「かやうのくだくだしき事は云々」とある一文と首尾相應ずるものである。

通釋　光源氏など名ばかり大袈裟で、その實、人から言ひおとされなさる過失が多くあるのに、かうしたすきごとを後世にも聞き傳へて、輕率といふ評判を、一層流しはすまいかと、かくして居られた内證事までを語り傳へた作者の口の惡るさよ。とはいへ、源氏は大そうひどく世間をはばかり、眞面目をよそほつてをられたので、しなやかに風流な所はなくて、さぞ交野の少將には笑はれなさつたことであらう。

まだ近衞の中將などでいらした時分は、内裏にばかり忠實に伺候をなされて、左大臣邸には絶え間がちにお出向きになるのを、忍ぶの亂れではなからうかと、お疑ひ申し上げることもあつたけれど、源氏はそのやうな浮氣なありふれた露骨な色事などは、それほどお好きでもない御性分で、たまにはうつて變つて、やたらに氣のもめる戀を心に思ひつめるといふ癖が、あいにくにもおありになつて、さうあつてはならないやうな御行動も、時々はまじるのであつた。

ながあめはれまなきころ、うちの御物忌さしつゞきて、いとゞ長居侍ひ

給ふを、大殿には おぼつかなく恨めしと思したれど、よろづの御よそひ何くれと、めづらしきさまに調じ出で給ひつゝ、御子息の君だち、唯この御宿直所の宮仕を勤め給ふ。宮腹の中將は、中に親しく馴れ聞え給ひて、遊戯をも、人よりは心やすく、なれ〳〵しく振舞ひたり。右大臣のいたはりかしづき給ふ住處は、この君もいとものうくして、すきがましきあだ人なり。里にても、我がかたのしつらひまばゆくして、君の出入し給ふに、うちつれ聞え給ひつゝ、夜晝、學問をもあそびをも諸共にして、をさ〳〵立ち後れず、何處にてもまつはれ聞え給ふほどに、自らかしこまりもおかず、心の中に思ふことをも隱しあへずなむ、睦れ聞え給ひける。

【省略】 以下「つれづれと降りくらしてしめやかなる宵の雨に云々」から、「いと聞きにくき事多かり」までが省略する。今省略の部分の梗概を次にかゝげる。

物靜かな五月雨の夕べ頭中將源氏の君の部屋にある御厨子棚の中から、女のよこした色々の手紙を出して見てゐる中、話はいつとなく女の才藝や地位についてのことにうつつて行つた。上流・中流・下層の三階級の處人の中、中流の階級に屬するものが一番本當の妻を示すものであると頭中將がのべる。これに對して源氏は、「その三階級とは何であるか。どういふ標準でその三階級を區別するか。もともと高貴の家に生れ零落した者と、もと平民でありながら

語釋 ○ながら雨――細流抄に「花（花鳥餘情）には六月とあり。只五月のことなるべし。」とある。弄花抄の一本に「花鳥に無之如何別本歟」と記入があるが、卷頭に「ころは六月と見えたり」とある。○内裏の御物忌――評釋に「何事にまれつつしみ給ふべき事ある時に、人の出入をとどめて齋戒し給ふを物忌といふ。ここはさることのさしつづく故に、源氏君の里に出給はずして、禁中に長くゐる給ふ也」とある。河海抄に儀軌の說を引用してあるに對し、契沖は本朝陰陽家の僞作として斥けた。物忌の事は禁祕抄に詳しい。玉の小櫛に「上に内にのみさぶらひようし給ひてとあるを、此ほどは御物いみのさしつづきて、いよいよ内に長居し給ふ也。すべていとどといふ詞は、みなこの意をもて見るべし」とある。○おぼつかなく――玉の小櫛に「すべておぼつかなく又心もとなくなどいふ言は、待遠なる意に多くいへり。ここも源氏君の久しく來給はぬを、まち遠におぼせる也。近きころ雨夜物語たみ詞といふ物に、源氏の御心を、おぼつかなく思ひ給ふやうに註せるは俗意也」とある。○御よそひ――裝飾。裝束をはじめとして色々の調度までをさす。○御とのゐ所――源氏の宿直所は桐壺である。官職故實祕抄に「令集解には宿直と晝夜にわけて註せられたり。文字の心はさもあるべけれど、晝夜をかぎらず、とのゐといふべきか」とある。○宮づかへ――奉公。禁中に限らない。○つとめ給ふ――玉の小櫛に「すべてつとむとは精出してするといふ意也。俗にいふとはいささかたがひ有」とある。○宮腹の中將――左大臣の北の方は、桐壺帝の皇妹三宮である。この宮の腹に、頭中將と、葵とがある。この中將は、桐壺の卷に藏人の少將とありし人。今右大臣家の四の君の婿。○すみか――和祕抄に「人の妻をいふ」とある。玉の小櫛に「男の女の許へ通ふをすむといひて、此のすみかはかよひ住む所といふこと也。」とあり、餘滴に萬葉・伊勢等から用例を拾つてゐる。○此君も――湖月抄に「もの字心をつくべし。源氏の葵上に心とまらぬごとく、頭中將も四の君をおもひ給はぬ也」とある。○さとにても――頭中將の實家。左大臣邸。○わが方のしつらひ――評釋に「我かたとはおほい殿にて頭中將の住み給ふ所をいふ。しつらひは家内のかざりなど也。まばゆくしては、きらきらしく目もかがやくばかりなるをいふ」とある。○學問を

ら、後に公卿などにまで成り上つたものとは、どうして差別をたてるべきであらうか」と質問する。そこへ左馬頭と藤式部丞とが、宮中の御物忌にこもるつもりで参内した。この連中は、みな相當な通人たちで、中將はよろこび迎へ、この三階級について判定し議論をする。次にあげるのは、中將の言葉をうけて、左馬頭ののべた議論である——

も遊びをも——評釋に「學問は漢文章を學び給ふこと、あそびは管絃を習ひ給ふ事也」とある。○をさをさ——契沖は、「大かたといふに似たり」といひ、宣長は「俗言にあまりといふ言、これによくあたれり。（中略）註に治定の心といひ、或はもはらの意などいへるは、さらにかなはず。又花鳥に漸又頗などいふが如しとあるもかなはず」といつてゐる。○まつはれ——評釋に「絲の物にまつはるるによせて、人のむつまじく立ちはなれぬをいへる語也」とある。○かしこまり——禮儀。畏。○心の中に思ふことをも隱しあへず——弄花抄に「品定めの物語あるべき故にかくかけり」とある。

通釋　五月雨の晴れ間のない頃、宮中の御物忌がうちつづいて、源氏はとり分け長く御伺候になつてお出でになるのを、左大臣家では、待遠に恨めしいと思つてをられるけれど、御裝束その他何やかやと、めづらしい有樣に御新調になつて、御子息の若君たちは、只ひたすらこの君の御部屋の御用を精出してなされる。

宮腹の中將は、兄弟の中でも特に親しくお馴染み申されて、遊びや戯れをも、他の人々よりは心易く、なれなれしく振舞はれた。右大臣が婿として大事にかしづかれる四の君の所へは、源氏が葵の上に冷淡であると同樣に、この中將の君もひどく臆劫がつて、とかく好色がましい浮氣者である。中將は實家でも、自分の御部屋の裝飾を、きらびやかにして、源氏の君がこの邸にお出入りなさる時に、御一緒にお伴申し上げ、夜晝學問をも管絃のあそびをも諸共にして、あまり源氏にひけを取らず、何處へでも、おつきまとひ申されるので、自然禮儀もおかず、心の中に思ふことも、かくし通されず、お詰み申し上げられた。

「なりのぼれども、もとより然るべき筋ならねば、世の人の思へる事も、さはいへどなほ異なり。又もとはやむごとなき筋なれど、世の經るたつき少く、時世うつろひて、おぼえ衰へぬれば、心は心として事足らず、わろびたる事ども出で來るわざなめれば、とり〴〵にことわりて、中の品にぞ置くべき。受領と言ひて、人の國の事にかかづらひいとなみて、品定まりたる中にも、又きざみ〳〵ありて、中の品のけしうはあらぬ、擇りいでつべき比ほひなり。なま〳〵の上達部よりも、非參議の三四位どもの、世のおぼえ口惜しからず、もとの根ざし賤しからぬが、安らかに身をもてなしふるまひたる、いとかはらかなりや。家の内に足らぬ事など、はた無かめるまゝに、省かず、まばゆきまでもてかしづける女などの、貶しめ難くおひ出づるも數多あるべし。宮仕に出で立ちて、思ひかけぬ幸とり出づる例ども多かりかし」などいへば、「すべて、賑はゝしきによるべ

きなり」とて笑ひたまふを、「他人の言はむやうに、心得ず仰せらるゝ」とて中將にくむ。

「もとの品、時世のおぼえうちあひ、やむごとなきあたりの、内々のもてなしけはひ後れたらむは、更にもいはず、何をしてかく生ひ出でけむと、いふかひなく覺ゆべし。うちあひて勝れたらむもことわり、これこそはさるべき事、とおぼえて、珍らかなる事と、心も驚くまじ。なにがしが及ぶべき程ならねば、上が上は打措き侍りぬ。さて、世にありと人に知られず、淋しくあばれたらむ葎の門に、思の外に、らうたげならむ人の閉ぢられたらむこそ、限なく珍らしくは覺えめ。いかではた斯りけむと、思ふより違へる事なむ、怪しく心とまるわざなべき。父の年老い、物むつかしげにふとりすぎ、兄の顔にくげに、思ひやり異なる事なき閨の内に、いといたく思ひあがり、はかなくし出でたる事わざも、故なからず見えたらむ、かたかどにても、いかゞ思の外にをかしからざらむ。勝れて疵なき方の選びにこそ及ばざらめ、さるかたにて捨て難き物をば」とて、式部を見やれば、我が妹どものよろしき聞えあるをおもひて宣ふにや、と

【省略】以下「いでや上の品と思ふにだに云々」から「さまざまの人の御うへどもを語りあはせつつ」まで、數行を省略する。短いから、今全文の通釋を左にかかげておく。

〔通釋〕いやもう、上の階級と思ふ女の中にさへ、よい女は中々むつかしげなこの世の中なのだからと源氏は思はれるであらう。白い御下着などのなよらかでや心得らむ、物も言はず。

語釋　○なりのぼれども――花鳥餘情に「上の源氏の詞に二の品を分てる中に、もとより品高き人の位短きと品いやしき人のつかさ進めると、そのけじめ如何あるべきと疑ひをあげ給へるを、中將の定め侍らんとし給へる所に、馬頭と藤式部丞と御物忌にこもらんとて參りたるを中將この人にゆづりて、定めさせ侍るに、馬頭物よくいふ人なりければ、やがてうけ取りて申し侍り。これより十八間答あり。これは第一段馬頭が詞也」とあり、細流・弄花等に、惟光がむすめ藤内侍のすけなどにあたる由を記してゐる。○さはいへど――玉の小櫛に「俗言にて何といふてもといふ意也」とある。○又もとはやむごとなきすぢなれど――細流抄に「是は種姓よき人の衰へ行くを云ふ也。末摘などにあたる也云々」と云つてゐて、諸抄これに從つてゐるが、評釋に必ずしも卷々にあらはれる女に比して考へる必要なきことをのべてゐる。やむごとなしは、弄花抄にすみてよむべきやう注意してあるが、必ずしもさうきめてしまふ必要はないであらう。○心は心として――湖月抄に「わが心は猶むかしよかりし時の心ながら、家まづしければ、するわざも事たらはぬ也」とある。○とりどりに――それぞれにの意。湖月抄に「さまざまにいひことわりて」の意に解したのはよろしく

るのに、直衣だけをしどけなくお引きかけになつて、紐などもほどけたままで、横にふしていらつしやる燈下の御姿は一入お立派で、女にしてもお見上げ申したいほどである。この君の御爲めには、上の上の階級の女を選び出しても、やはりまだ足るまいとお見えなされる。さまざまの婦人のことについてお話しあひになつて――これから、次の段にうつるのである。

ない。花鳥餘情に「儒道には遇瘉不及といひて中庸の道を至極とす。佛教には又非空非有を中道と云ふ。中は二教のたとふる所なるによりてことわりて中の品をとる也」と儒佛二教の教に關聯せしめたが、さまで考へなくてもよいであらう。玉の小櫛に「こゝはなりのぼれども云々と、もとはやん事なき云々とを、それぞれにことわりて也」とあるに從ふべきである。○受領といひて云々――花鳥餘情に「諸國の守をいふ。國衙庄園の事をとり行ふ者也」とある。評釋に「人の國の事とは、京ならぬ他國の事にあづかるを云ふ。かかづらひはかかりあひといはんがごとし。受領をいやしめたる書きざま也」とある。山下水等に、「人の」と句をきり、「國」ときり離すやうに說いてゐるのはよろしくない。人の國とは日本の外の國の意ではない。○品定まりたる中にも――岷江入楚に「受領といふものは、同じ品なるべけれども、又その中にも大國小國の守などにて少しのかはりめも有るべし」とある。○きざみきざみ――段々。次第次第。湖月抄に「師說」として、惟光の女や明石入道の女を指す由をのべてゐるが、必ずしも準據ある譯ではない。○けしうはあらぬ――河海抄に「下手しくはあらぬなり」とあり、細流に「氣の字、清むなり」とある。しかし、眞淵は、「惟しうはあらぬとほめたる也。」といひ、宣長が「けは異にて、あやしからぬ也。（中略）必ずしも貴賤の事にはかぎらず、物のさしもあしからぬを、けしうはあらずといふなり。こゝも然なり」と云つてゐるのが正しい。○ころほひ――時分柄。「ほど」の意にとり、受領の分際をさすと見る說はよろしくない。當時の世間の樣子をいふのである。○なまなまの上達部――花鳥餘情に「物のなまなかなる心也。はじめて公卿などになりたる家をいふ也」とあり、細流以下の諸註は多くこれに從つてゐるが、「新參」の意と解すべきではなく、眞淵が「なまとは物の熟せぬを云ふ。ここ

は先風家柄高からぬ人は、參議の公卿とならず。されど時を得て三位の上達部には到れども奢せかろく勢なし。」といひ、宣長が「俗言になまじけの公卿といふことなり。公卿といふばかりにて世のおぼえも何も公卿のやうにもあらぬをいふ。」といへるが如く、板につかぬ、しつくりとしないの意に解すべきである。○非參議の三四位ども――この部分は本文校訂上問題になつてゐる。青表紙系統の諸本、古本系統の數本に、「非參議の四位ども」と「三」の字がない。しかし河内本には紫明抄の本文が明示してあるやうに「三」の字があり、池田光政舊藏本の如き、古本系統の本にも、「三」の字の存するものがあるから、ある方に從ふべきである。玉の小櫛に「いまだ參議に任ぜずして公卿にあらざる三位四位の人どもを云へり。常には位を以て三位以上を公卿とすることもあれど、ここは官に就きて參議以上を公卿として、それに對へて云へる也。なまなまの上達部よりも非參議のといへる語の勢ひをもて知るべし。青表紙本には三の字なしとて、それによれる本は、ひがごと也。必ず廣くゆるやかに、三四位とあるべき語也。四位とかぎりて言ふべき所にはあらず」とあるに從ふべきである。非參議は參議に任ぜぬ前の人をも、又前官即ち散位をも云ふ。ここは前者である。○もとのねざし――根本の種姓と河海に註してある。○やすらかに――玉の小櫛に「公卿にあらざれば、よろづ心やすき也」とある。○かはらか――さはやか。さつぱり。餘滴に「らかとはあららか、うららか、老らか、あきらかと言へるに同じ。さて轉じては、物の淸らかになれることにも用ゐたるなるべし。俗にさつぱりとしたりといへるにかなへり云々」とある。○すべて賑はしきに――細流に、「源の語なり。所詮は富めるによるべきと也」とあり、玉の小櫛に「すべてとは上の受領の事をも合せていへり」とある。にぎはしきとは、家の賑はしく富みたるをいふ。○こ

と人のいはんやうに――四説ある。河海抄に「こと人とは色このみならぬ人のいはんやうに」の意に解し、一葉・細流以下の諸註は皆これに從つてゐる。しかるに餘滴には「末摘花の巻にこと人の云はんやうに咎なあらはされそと有り。ここは中の品の女の上などは、源の知らせ給ふべきにあらねば、口入れ給ふべきにあらずと思ひてしか云へるにや」といひ、玉の小櫛には、「今馬頭のいへるは、更ににぎはゝしきをよしといふにはあらざる物を、其意を得ずして仰らると中將の源氏君にいふ也。源氏君はよくこゝろを得給ふべき事なるに、心もえぬこと人のいはんやうにと也。色ごのみならぬ人のいはんやうにといふ注はひがごと也」とあり、評釋に「この處少しまぎらはし。もしくは源氏君はにぎはゝしく富み榮え給ひながら、さもあらぬこと人のいはんやうにといふ意にもあらんか。なほ考ふべし」とある。右四説いづれも紛はしい。源氏の君が馬頭の説に對して「それでは裕富といふことによつてすべてがきまるものですね」と云つて笑つたのに對して、頭中將が「他の人ならともかくも、あなた程物の道理の分つてゐる人が、そんな風に誤解して、仰せになるのは怪しからん」といふ程の意ではないかと思ふ。「心得ず」は「心得（こゝろえ）」の打消で、のみこめず、その眞意をさとり得ず、理會し得ずの意である。竹取物語に「宮づかへ仕うまつらずなりぬるも、（中略）心得ずおぼしめしつらめど」とあるのに同じい。源氏には何もかもちやんと分つてゐる筈であるのに分らないやうな風に裝つてゐるのが怪しからんといふ意であらうと思ふ。心得ずを、源氏のことでなく、頭中將のことと見て、心得がたくと解し、「仰せらるゝは心得がたし」の意と見ることも出來るかも知れない。さうすれば、「他人のいひさうなことを、あなたが仰せになるとは合點がゆかない。のみこめない。」といふ意になるであらう。○もとの品、時世のおぼえうちあひ――花鳥餘情に「第三段。むまのかみが詞也。もとの品高き人の時世のおぼえならぶかたなき人をいふ。鬼にかなさい棒といふが如きなり」とある。評釋に「此段は上が上の品をいひて、それをば打おき次に下が下の中にも思ひの外にめづらしき事あるを云へり、反對の文法なり。玉の小櫛にこれをも中の品のうちなりといはれたるは、いささかたがへり。」とある。○もてなしけはひ――廣道の評釋に「もてなしはその女のもてなしざまなり。けはひはけしきの外へ見ゆるをいふ。おくれたらんは口惜しからんなり。さらにもいはずは論も及ばぬ意也」とある。○さらにもいはず――一葉抄に「中々いふに及ばぬ也」とあり、玉の小櫛に「此詞は次のうちあひてすぐれたらむも云々心もおどろくまじとある下へかけて心得べし。さやうの品の人は、何事もうちあひて、すぐれたらんも、もとより然るべきことなれば、めづらしからぬを、ましておくれたらんは、さらにも云はず、いふかひなくおほゆべしとなり」とある。○うちあひてすぐれたらん――湖月抄に「又もとの品時代の覺うちあひて、其上に手もよく心もおくれ給はず、よろづすぐれたらんも、尤もと思ふほどの上萬の事也」とあるに對し、小櫛は「此うちあひは、其女の身の程に相かなひて、何事もすぐれたるをいふ。上のうちあひとは、さす所異なり。さてこれもとの品時世のおぼえ云々の中の女のこと也。別に一種にはあらず。」といつてゐる。○これこそはさるべき事と――湖月抄に「よからぬ人の萬づすぐれたらんこそめづらしからめ、是は勿論の事と心も驚くまじきと也」とある。○なにがし――玉の小櫛に「すべてみづからの事を、人にむかひて、かくなにがしといへるは、其時實になにがしといひし由にはあらず。古は名をいへる事なるに、これは作物語にて、惟光・良清などをおきて外はすべて人々の名をば作らずして、名をいふべき所を、なにがしと書ける也云々」とあり、湖月抄

に「左馬頭自身をさしていふ也」とある。○上が上――評釋に「上が上の事は我等が及ぶべき限りならねばさしおきていはじとなり。ここにて上が上の論は省きたり」とある。玉の小櫛に、はじめより終りまで、すべて皆中の品の女の事をいふ由を論じてゐるが、さうではあるまい。但し小櫛に「上の件、なりのぼれども云々の條より、もとの品とき世のおぼえ云々までの條々は女の身の品々をむねといひ、これより下の條々は其女の心おきてふるまひの品々をいひて、これより上と、これより下とは、品定の堅（カテ）と緯（ヌキ）との如し。大かたこれ等の事ども、心をつけてこまかに辨へ味ふべし。なほざりに見んは、作り主のさばかり心を入れたる本意なきわざなりかし」とあるは、味はふべき言葉である。○さて世にありと云々――花鳥餘情に「これは下の品の人を云ふ也」とある。玉の小櫛にこれ等もみな中の品の中として、花鳥の說に反對してゐるが、今は前者に從つておく。○あばれたる云々――評釋に「あばれたらんは、荒れたる事なり。むぐらの門とは、むぐらの生しげりたる門といふ意にて、荒れたるさま也」とある。○とぢられたらむ――玉の小櫛に「葎の門といふからとぢられといふ也」とある。○思ふよりたがへる――評釋に「思ふにたがへる也。」とある。山下水に伊勢物語なる「おもほえず故郷にいとはしたなくて」とある例を引いてゐる。○父の年老い――評釋に「これも珍しきに心とまる事ながら又一種也。上なるはおちぶれたる家の事、これは何事もわろびれて見ゆる家の事なり」とある。岷江入楚に「箋」として引いてある山下水の說卽ち、式部が自らの上を述懷するのであるといふ說の正しからざることは、已に宣長の說破した所である。○思ひやりことなる事なき――湖月抄に「外よりの思ひやりはゆかしげなき事也」とある。○ことわざ――才藝をいふのであると評釋に見える。琴・和歌・習字等の藝能。○かたかど――評釋に「片才」と當ててゐる。細流に「かやうの中にも取所あるべき義なり」とあるはかなはない。小櫛に「たとひわづかに一つ二つのかどあらんにてもといふ也」とあるが正しい。○すぐれてきずなき――「源氏頭中將などのえらびにこそ及ばざらめと也」と湖月抄の傍註にある。岷江入楚の中に「或抄御說には父の年老せうとの顏にくげなるがきずなり」とあるが、前者がよろしい。○さるかたにて――中の品にとつてはといふ意。すぐれてきずなき云々といふよりつづいてゐるのをもつてさとるべきよし、小櫛に說がある。○すてがたきものをば――玉の小櫛に「ばもじは、やを誤れるなるべし。ばにては聞えず。たみ詞に、をばの下になほえり出づべきもの也といふ詞を加へて心得させたれども其意にはあらず。ひがごと也。」とある。今現存諸本に就て調査するに、古本系統の古寫本に「や」となつてゐるものがある。「や」に從ふべきである。○心うらん――藤式部が心得たるかと也と湖月抄の傍註にある。○物もいはず――評釋に「上文もとの品時世のおぼえ打ちあひといふよりここまではもしくは頭中將の詞にや。ここにのたまふにやといへる事、更に馬頭が云ひたる事とは聞えざれば也。されども又なにがしが及ぶべき程ならねば云々といへるは、中將とも聞えず。しばらく舊說に隨ひて、馬頭の語とす。猶考ふべし。」とある。「のたまふ」は式部丞の意中を云ふ卽ち馬頭に對して、社交上ありがちな輕き敬意を表したものであつて、式部が草子地として、作中の人物に敬意を表したものと見るべきものではない。よつて、舊說の如く、馬頭の語と見て差支のないものである。

通釋　左馬頭が云ふには――「どんなに成り上つても、もともと然るべき家筋でないものは、世間の人の思はくも、何といつても矢張ちがひます。又もとは高貴の家筋であるけれど、生活上の賴

所が少く、時勢が移り變つて、世間の聲望がおとろへてしまふと、心だけはもとのままに持してゐても、どうも不如意で、不體裁の事も出て來るわけでございませうから、それぞれに判定して、中流の階級に入れるべきでございませう。受領と云つて、地方の政務につとめかかりあつて、階級が已にきまつてゐる中にも、また段々の差別があつて、中流中の見苦しくないものが、選び出されるこの頃の時勢でございます。なまなかの公卿よりも、非參議の三位四位どもで、世間の名望も蔓くはなく、もとの種姓もいやしくない人達が、氣樂に身を處し生活してゐるのは、とてもさつぱりとして氣持のよいものでございますよ。家庭に、不如意なことなど、別にないのでございませうから、必要な事は儉約せず、輝く位まで大切に育ててゐる娘などが、けなすことの出來にくいほど、立派に成長する者も、澤山あることでございませう。奉公に出まして、思ひもよらない仕合を引き出す例なども澤山ございますからね」などといふので、源氏は「では、結局女の品といふものは、裕福といふことできまるわけなのですね」と云つてお笑ひになるのを、「何です。普通の人でも云ふやうに、とぼけた風に仰います」と中將はにくらしげにいふ。

馬頭は、「もとの種姓と、その時勢の名望と、二つながらうち揃つて、高貴な階級でありながら、表に立たない内々の娘の態度や樣子の劣つてゐますのは、今更申すまでもなく、何としてこのやうに劣つて生長したのであらうと、言ひ甲斐もなく思はれるでございませう、種姓に相應して、娘が勝れてゐるのも當然で、これこそはさうあるべき事と思はれて、別に珍らしい事と心もおどろきますまい。私ごときものの、とても及ぶ程度のことではございませんから、上の上といふ階級のことは御遠慮いたしました。

さて又世にさうしたものがゐるとさへも知られず、淋しく荒れてゐる葎深い家の中に、思ひがけもなく可愛らしげな女が、ひつそりと生活してゐるやうなのは、限りなく珍らしい事には思はれるでございませう。本當にどうしてかうなのであらうと、思ひがけもないといふ點に不思議に心のとまるものでございます。

又父が手をとり、むさ苦しさうに肥りすぎ、兄の顏は憎々しげで、想像して見ても格別なこともない家庭の奥に、大そうひどく氣位を高くし、ほんの假初にし出でた才藝も、趣のあるやうに見えるといふことは、たとへその才藝が、ほんの瑣細なものであるにしましても、どうして意外なほどに面白みがございますまい。すぐれて缺點のないといふ方面の選擇には及ばないでございませうが、それは又さういふ種類の女として、すて難いものでございますよ」といつて、藤式部の方を見やると、式部は、自分の妹たちが、相當な評判のあることを心において云はれるのではないかとでも心得るのであらう、物も云はない。

「大方の世につけて見るには咎なきも、わが物とうち頼むべきを
選ばむに、多かる中にもえなむ思ひ定むまじかりける。男の公に
仕う奉り、はかゞしき世のかためとなるべきも、誠のうつはもの
となるべきを取出さむには、難かるべしかし。されど、賢しとても、

一人二人世の中をまつりこちしるべきならねば、上は下に助けられ、下は上に靡きて、事廣きにゆづらふらむ。狹き家のうちの主人とすべき人一人を思ひめぐらすに、足らはで惡しかるべき大事どもなむかたゞ〳〵多かる。とあればかゝり、あふさきるさにて、斜に然てもありぬべき人の少きを、すき〳〵しき心のすさびにて、人の有樣を數多見合せむの好ならねど、偏に思ひ定むべきよるべとすばかりに、同じくは我が力いりをし、直しひきつくらふべき所なく、心の叶ふ樣もやと、選りそめつる人の、定り難きなるべし。必ずしも我が思ふにかなはねど、見そめつる契ばかりを捨て難く思ひとまる人は、物まめやかなりと見え、さてたもたるゝ女の爲に、心にく く推し量らるゝなり。されど何か、世の有樣を見給へ集むるまゝに、心に及ばず、いとゆかしき事もなしや。君だちの上なき御選びには、まして如何ばかりの人かはたぐひ給はむ。所狹く思ひ給へ

ぬだに。

容貌きたなげなく若やかなる程の、おのがじしは塵もつかじと身をもてなし、文を書けど、おほどかにことえりをし、墨つきほのかに心もとなく思はせつゝ、又さやかにも見てしがなと、すべなく待たせ、わづかなる聲聞くばかり言ひよれど、息の下にひき入れ、言ずくなるなるが、いとよくもて隱すなりけり。なよびかに女しと見れば、あまり情にひきこめられて、とりなせばあだめく。これを初の難とすべし。

事が中に、なのめなるまじき、人の後見の方は、物のあはれ知りすぐし、はかなきついでの情あり、をかしきに進める方、なくてもよかるべしと見えたるに、又まめ〳〵しき筋を立てて、耳はさみがちに、びさうなき家刀自の、偏にうちとけたる後見ばかりをして、朝夕の出入につけても、公私の人のたゞずまひ、善き惡しき事の、目にも耳に

もとまる有樣を、疎き人に、わざとうちまねばむやは、近くて見む人の、聞きわき思ひ知るべからむに、語りも合せばやと、うちも笑まれ、涙もさしぐみ、もしはあやなきおほやけはらだたしく、心ひとつに思ひあまる事などおほかるを何にかは聞かせむと思へば、うち背かれて、人知れぬ思ひいで笑もせられ、哀ともうちひとりごたるゝに、何事ぞなどあわつかにさしあふぎ居たらむは、いかゞは口惜しからぬ。唯一向に兒めきて柔ならむ人を、とかくひきつくろひてはなどか見ざらむ。心もとなくとも、直し所ある心地すべし。實にさし向ひて見む程は、さてもらうたき方に罪免し見るべきを、立ち離れては、然るべき事をも言ひやり、折節にし出でむわざの、あだごとにも、まめごとにも、我が心と思ひ得る事なく、深きいたりなからむは、いとくち措しく、たのもしげなき咎や、なほ苦しからむ。常に少しそば〳〵しく、心づきなき人の、折節につけて、出榮するやうもありかし」など、隈なき物言ひも、定めかねていたくうち歎く。

語釋　○大方の世につけて――評釋の傍註に「大體世上ノコトトシテ一トホリニ見テハトイフ意也」とあるが、「世」は世間といふ意味ではない。男女の仲らひについて云ふ。普通の通り一遍の仲といふ意に解すべきである。「わが物」に對する語である。○男の子の云々――細流抄に「此段肝要なり。此人こそは世のかためともなるべきとて取出すべき人はかたき事なり」とある。○よのかため――湖月抄の傍註に「攝政關白を云へり」とあるが、評釋に「よのかためとは、政事をとりて滯なき所謂柱石の人をいふ。まことのうつはものとは、眞の大器といふことなり。攝政關白也とかぎりていへる註はわろし」といつてゐるのに從ふべきである。○されどかしこしとても――湖月抄の傍註に「たとひその人と定むべき器量にてもと也」とあるが、さうではない。玉の小櫛が指摘したやうに、ただかしこき人にてもといふ意である。評釋に「いかばり賢き人なりとも、ただ一二人にて天下の事の執行はるべきならねば、さまざまのつかさ人ありて、上は下に助けられ、下は上になびき從ひて、互にゆづりあひて、政をするならんと也。らんの辭あぢはひあり」とある。○上は下にたすけられ――湖月抄の師說に「此段のたとへの心は、攝政關白も諸司にたすけらるる如く、女も一人に萬事具足する人はあるまじければ、少不足ありとも、男の力をそへて押しなほし堪忍すべしとの心也」と云つてゐるが、これは宣長が已に注意をうながしたやうに、誤つてゐる。花鳥に見えるやうに天下は廣いと雖も、諸人力をあはせてをさめると、かへつて立派に行くものであるが、せまい家の中の事は、あるじ一人のはからひであるから、中々うまく行かないといふ意であ

る。○せばき家のあるじ――細流抄に「このあるじは、後見すべき女あるじの事也」とある。せばき家とは、小櫛に云へるが如く、天下の政道の廣いのに對して云ふのである。廣い家に對していふ意ではない。○とあればかかり、あふさきるさに――伊行の源氏釋や奥入や紫明抄や河海抄等に、古今集俳諧歌「そへはととてとすればかかりかくすればあないひ知らずあふさきるさに」といふ歌を引いてゐる。評釋に「とすればを、とあればとかへて引かれたるは、自他の差によれるなるべし。（中略）雅語譯解に左に餘れば右に足らぬと云ふ心也といへり。一つよき事あれば又一つわろき事も有りといふたとへまでなり」とある。○なのめにて――細流抄に「十分ならぬ詞也」とある。評釋に「なのめは斜の字の意にてゆがみたる也。俗にゆがみなりといへるよくあたれり。さてもありぬべきはそのままにて堪忍してさしおかるゝほどの人也」とある。○すくなきを――玉の小櫛に、この「を」文字は、下の同じくは云々といふ所へかかる語であると注意してゐる。○すきずきしき心のすさび――評釋に「すきずきしきすさびにまかせて、さまざまの女の樣を見比べんなどの物好みにはあらねど、ひとへに本妻にもと定むべき人をと、かれこれ撰み初めたるが、竟に定まらぬなるべしといふ意也。同じくは云々は直さずして、さながら心にかなふ人もあるべきかと思ふよしを、其中にはさみてことわりたる也」とある。○わが力いりをし――玉の小櫛に「男のたすけてなほす事のいちざる也。いりは俗言にも錢がいるかねがいるなどいふいり也」とあり、評釋の傍註に「ホネヲリ」とある。○心にかなふやうもやと――玉の小櫛に「思ひさだむべきよるべとすばかりに、心にかなふとつづく語なり。よるべとすべきほどに心にかなふ也」とある。○見そめつる契ばかりを――評釋に「ふと逢そめたるも、われにたぐふべき前世の宿緣なるべしとやうに思ひて離別せず堪忍するよし也」とある。○何か世の有樣を――河海抄に「なにがしと云ふ心也」とあるに對し、細流抄に「但しされどと讀みきりて、何かと詞にいへることと見えたる歟」と異說を立てた。湖月抄の師說に「斜にさても有りぬべき程ならば、十分ならずとも思ひ止らんとは思へども、何かそれまでもゆきたゝん、ただ心にかなはぬ事ばかり也」とあり、だみ詞に「何やかやと世の中を見しる時は云々」と注してゐるが、これ等に對して宣長は反對說をのべて「されどとは、心にくくおしはからるといへるにあたりて云へり。なにかは何かは也。心にくくおしはからるとはいへども、さやうのたぐひも、何かはゆかしからんの意也」と新說を立てた。ここは、「どうして、どうして中々さうもない」といふ程の意である。眞淵が「何かの下をしばらくきるべし」と云つたのは正しい。○心に及ばず――湖月抄に「是をと思ひ及ぶ事もあらず、ゆかしと思ふ事なしと也」とあるのに對して、玉の小櫛は「及びなきやうに思はるるをいふ」と言つて、反對した。かく「及びもつかないやうな」といふ意に解する說と、「想像もつかないやうな」といふ意に解する說との二說がある。自分は後者に從つておきたい。○ゆかしき――奥床しきの意に解する說もあるが、不審なもの、好奇心をそそるものの意に解しておきたい。○君だち――評釋に「君たちは源氏の君、頭中將をさしていへり。上なき御えらびは、此君たちは當世の貴人なれば、此上もなき御撰びといふ意也。ましてとは、我らだに如此なれば、ましていかばかりの人か、よく御心にかなふ人とはなり給はんといへる也。たぐひとは配偶する意也」とある。　○所せく思ひ給へぬだに――この部分は、本文校訂上注意を要する部分である。靑表紙本系統の古寫本には、この一句がない。河内本系統の諸本にはこの句がある。古本系統の諸本にはこれがない。岷江入楚に「私云或抄御說此詞をあそばされず、

牧にかきつかはさるる、御自筆の本にも此詞なしと云々。愚本以彼家本校合。然るに此詞の所本になし。河内本と註す。然而彼雨夜の抄出祇註にこの詞有。同じく予聞書には青表紙に此詞なしと注せり。家本にも此詞はあり。之をけたず。只本になしとばかり注付てあれば、近代加へてよまるるか」とある。評釋に「此の條きはめて誤脱ありとおぼえて事の意委しくわきまへがたし。（中略）案ふに本はしかありけんを一度おとして後にまた書入るゝ時に、二行ならびたる右の行へ書入れたるを左の行へ入れたるぞとおもひ誤りて、後に又寫す人のこの所へ入れたるなるべし」と論じてゐる。眞淵も「語を前後にいひて文をなせる一體也。此詞或本になきはわろし」と云つてゐるが、古本系統の諸本にこの句がない所から見ると、註の文句が混入したのではないかと思はれる。從つて自分はこの一句を削る方がよいと思ふが、かりに今はあるものとして解釋しておかう。花鳥餘情に「所せくは廣き心也。思ふたまへぬはせばき心也。むまのかみが世間せばき身にだにかやうに思ふと也」とあり、細流抄に「花鳥（中略）いささか相逼せるにや。所せくとはせばき心なり。上藤は萬に身を輕々しくし給はぬによりて其身はせばき心なり。馬頭などいやしき身は所せきことなく、見ありき侍るだに、思ふに叶ふ女はなきとなり。所せく思ふたまへるだにと云ふにて句をきり、心を上へかけて見るなり。下へはつづかぬ詞なり。」とあるに從つておく。玉の小櫛、評釋みな細流の說に同じ。○かたちきたなげなく――評釋に「なほ馬頭の詞也。上の條はつひのたのみ所とすばかりの女の世に有がたきよしをいひ、こゝよりは女の上につけて、さまざまのくせある事をいへり。よくよく分ちて心得べし」とある。○ちりもつかじと――評釋に「つかじはつけじを寫し誤れるなるべし」といつてゐるが、かかる本文を有する本は見あたらない。「つかじ」にても意は通ずる。○

おほどか――大やう。○ことえり――細流に「詞をえらびつくろふ也」とある。○墨つき――新釋に「手つき口つきなどいふつきに同じ。書きたる墨色筆づかひをかねていふ也」とある。○わづかなる髓きくばかり――評釋に「わづかなる髓は小さき髓なり。それを聞くほどにいひよるとは、いひよりてつひに物ごしなどにて逢ひたる樣也。息の下にひき入れとは、息よりも細きやうなる髓することにて、ひき入れ髓などもいへり。言ずくなは物いふ事の少き也」とある。○いとよくもてかくすなりけり――湖月抄の傍註に「我が身のあだあだしさをあらはさぬと也」とあるが、玉の小櫛に「さやうの女は身のおくれ足らはぬ所をよくかくして、男に見あらはされぬ也」とあるのがよろしい。單にあだあだしき所と限定するのはあたらない。○あまり――引きこめらるるに係る副詞。玉の小櫛に「物やはらかに女らしき女ぞと見れば、さやうの女は必ず心よわくして、あまりなさけに引こめらるる物なる故に、おのづからとりなす時は、あだなるにとりなさるるさまなる物ぞといふ也」とある。○とりなせばあだめく――細流抄に「取りよりて心見れば、あだあだしく見ゆる人あり」と見えてゐるが、玉の小櫛にその當らざる由を論駁した。もてあつかふ意。そのままに身を處置すればの意。○これをはじめの難とすべし――細流以下の諸註に「第一の難」と解してゐるが眞淵・宣長等が、「最初の難」と解するのが正しい。○ことが中に――河海・花鳥・細流以下の諸註に、「殊なるが中に」の意に解す。眞淵は、「悉々（コトゴト）の中にといふならん。右の如き難の有る中に又一つ二つをいふ也」と解す。評釋に「ことが中にとは、多くある事どもの中にといふ意也。諸註わろし。なのめなるまじきは、ゆがみなりにすておき難き意なり」とあるのが最も穩當である。玉の小櫛に「此所昔より讀誤れるから、意も違へり。これはなのめなるまじきと讀みて、人のうしろみ

のと續けて讀むべし。人のうしろみとは夫のうしろみするをいふ。夫をうしろみする方の事は、女のよろづの事の中に、殊になのめにてはえあるまじき第一のわざなるを云へり。」とあるのが正しい。こと多くある中にの意である。「なのめなるまじき後見」の意と解すべきである。○物のあはれ知りすぐし――評釋に「物のあはれを知るはいとよき事なれども、あまりに知り過したるは、又あたなる方にもちかきもの也。すぐしといふに心をつくべし。はかなきついでのなさけとは、湖月に花紅葉月雪等の折ふしに歌よみなどする心也といへるが如し。ありの下にてもじをそへて次の詞へかけて心得べし。○をかしきに進めるかた――玉の小櫛に「風流のかたは夫のうしろみの方にはなくてもよかるべきが如くなれどもと也。物のあはれ知りすぐしとは物のあはれ知れるよしのふるまひするをいふ」とあるのに從ふべきである。○まめまめしきすぢを立てて――評釋に「まめまめしきすぢとは夫の後見してよろづ夫のためにまめやかにいとなむすぢの事なり。たててといへる心をつくべし」とある。風流な方はなくてもよろしいやうに見えるが、又さうでもないといふ意で、その理由を以下に書きつづけるのである。○耳はさみがちに――餘滴に宇津保物語・横笛の卷・紫式部集等の中にあらはれてゐる「みみはさみ」といへる語をあげ、「みみはさみといふ物は別にあるものなるべしと、久しく思ひ居たるに、圓光大師の剃髪の所を畫がきたるを見るに、耳に袋の如き形のものをはさみてあり。これ古へに言へるみみはさみなるべし。昔の女は髪をたれてありければ、顔に髪のかからざる爲めに、かかる物を思ひたりと見ゆ」とある。しかし、耳はさみといふ袋樣のものがあつたのではなく、宣長が「古の女は、みな髪をたれたるに、額髪とて左右に耳より前へもたるることなるを、かたちつくろはぬ女は、耳より前へたりたる髪をうるさくむつかしく思ひて、耳のうしろへかいこしてはさむを云ふ。」と云つたのに從ふべきである。立ち働きにうるさいから、髪を耳にはさんだものと見るべきである。○美相なき――河海抄に「無美相」「無貧相」の兩說をあげてゐる。細流抄に「びさうは貧相なり。なきにてはあるまじき也。貧相なるなり。きは添字也。」とあり、諸抄多くこれに從つたが、契沖は、「無美相主人母」といふなるべしと今案を出し、遊仙窟・古今六帖・日本紀・和名抄・萬葉集等の用例を引用して考證した。餘滴は契沖の說に贊成して、更に曰く「また考ふるに、美相なきといへる詞、此外に例もなし。もし「き」文字は「る」文字を誤りたるにて、びさうなるといふ詞にや。さらば古くより例ある詞にて、ここにもにつかはしくおぼゆ。びさうは非常の音語にて云々」とて、手習の卷・乙女の卷・清少納言の中の例をあげてゐるが、運歩色葉に「美相ビサウ」とあつて、ここは、「貧相」でも「非常」でもない。うつくしき形の意である所の「美相」と解すべきである。家刀自は、家戸主、家童子とも、家負とも、字をあてられる。但し童子の意ではない。評釋に「家刀自は家内の事とる女あるじをいふ也」とあるに從ふべきである。この語について、契沖・眞淵・雅望等の考證がある。○朝夕の出入につけても――夫が朝夕わが家に出入するをいふ。○ちかくて見ん人――わが妻。○うちもゑまれなみだもさしぐみ――眞淵や宣長は、語合ひ甲斐ない妻のことを苦笑もし、涙ぐまれもするといふ意に解してゐるが、むしろ湖月抄の傍註に「よき事には笑ひ、惡き事にはなくさま也」とあり、評釋に「目にも耳にもとまるよきあしき事につけても、うちも笑まれ、涙もさしぐむ也。小櫛にかたりてかひなき妻のこちなきを思ひて、ひとり笑ひもせられ、又いふかひなき事を思ひて、涙もさしぐむ也といはれたるは、いたくたがへり。そは此次に人知れぬ思ひ出わらひもせられ、あはれともうちひとりごち

たるとあるがその事なり。しかるを却りてそこの注には思ひあまる事どもの中に嘆息すべき事を思ひては歎息する也といはれたるは、語脈いたくたがへり」と言つてゐるのが正しい。○あやなき――わけもなく。○おほやけ腹立たしく――玉の小櫛に「おのが身にはあづからぬ人の上の事を、かたはらより見聞きて、腹立たしく思ふこと也。このおほやけは、俗のいやしき言に身にあづからぬ人の上の事に妬するを法界りんきといふ法界の意にあたれり」とある。花鳥餘情や孟津抄に、公がたの事について腹を立てる意に解し、餘滴には、「今の田舎人のやけになりて腹立つなどいふに同じ。」と解してゐるが、いづれも宣長の説に及ばないと思ふ。ここは、よそ事に對してむかつぱらを立てることである。○心一つに思ひ餘る事など――わが心一つでは決定し難く思ひあまる事の意。小櫛に「是はおほやけ腹立たしくとは別事也。つづけて心得べからず。」とある。○人知れぬ思ひ出笑ひ――三説がある。先づ湖月抄に所引の宗祇註に、「口をしく思ふ相手などを何條それがなど思ひて空わらひする事あるなり」とある。玉の小櫛に「有りし事を心の中に思ひ出して笑ふを云ふ。ここは心一つに思ひあまる事の中に、笑ふべきことを思ひ出しては、笑ひもする也云々」とあり、評釋に「其女のいふかひなきを人しれず思ひつづけて、ただひとり笑ひも歎きもせらるる也。あはれは歎息の聲なり」とある。以上三説の中、評釋の説が穩當であらうと思はれる。○あはつかに――河海抄に「淡々しき也」とある。玉の小櫛に「俗に云ふしみやかならぬ也」とある。にべもなげに。氣もなげにの意の副詞である。これに對して評釋は「あわつかには騒がしく靜かならぬ意也。あわは、あわつ、あわただしなどのあわと同じ。舊説はひがごと也。假字もわと書くべし」とあるが、今は舊説に從ふ。○さしあふぎゐたらんは――細流抄には「扇などをさしかざしてゐたる也」とあるが、玉の小櫛に「うち仰のき居るにて、あはつかなる樣を云ふ也」とあるに從ふ。○いかがは口をしからぬ――玉の小櫛に「くちをしき由を強くいへる詞也。」とある。○こめきて――河海抄に諸説をあげてゐる。「くはしき也」とも「ふるめかしき心也」とも、「おさなくかたほなる體也」とも。花鳥餘情は「あまたの説あれど、おさながましき心ここにはかなひ侍る也」といひ細流抄は「おほどかなる心也」と云ひ、弄花抄・紹巴抄等は「おほやうなる心也」と言つてゐる。新釋に「よにも人のむすめ子めきて、物はかなきをいふ」とあり、評釋の傍註に「オボコメキ」とあるのが當つてゐる。○ひきつくろひては――湖月抄の傍註に「男の女を異見などする也」とあるが、玉の小櫛に「足らはぬ事をば、男のたすけてとりつくろふ也」と云ふに從ふ。○なほし所ある心地すべし――心の柔和な人は云ふがままに從ふからである。○げにさしむかひて――評釋に「げには見んほどはの下へおろして心得べし。げにさても云々といふ意にて、なほし所ある心地すべしとあるを諸ひたる也。さてもは罪ゆるしの次なる見るべきへかかる意にて、さても見るべきをと云也」とある。○たち離れては――玉の小櫛に「別所に離れてゐるほど也」とある。○我心と思ひ得ることなく――夫の助をからず、自分の心で心得てすることがなくの意。○ふかきいたり――湖月抄の傍註に「心のゆきいたる所なき也。」とあり、玉の小櫛に「俗に功者のなきといふ意也」とある。○たのもしげなきとがや――「とが」を咎と解して、濁るをよしとする説と、「とかや」と助詞と見る説と二樣ある。契冲は「とがは難の心也。詞といふ説は然るべからず。」と云つたのが正しい。○なほ苦しからむ――湖月抄に「なほ」を、もつと、一層の意に解してゐるが、宣長は「此物語などに、猶をさる意に云へることなし。ここはかのびさうなき云々にくらべて言へるにはあらず、なほとい

へるは、こめきやはらかなるはよけれども、それもなほにて、やはりまだの意也。」と言つてゐる。従ふべきである。○そばそばしく――細流抄に「平生はそのかたちなどのよくもなきによりて、打ちも向はぬ云々」とあり、宗祇註・弄花抄・山下水・紹巴抄等みな同様である。玉の小櫛に「だみ詞に、よそよそしく親しからぬ也といへるよろし」と云つてゐるのが正しい。ここは女の方からそばそばしくするのではなくて、男の方からよそよそしくするのである。○いでばえ――小櫛に「事にふれて榮々しきわざのある也」とある。出來榮。○隈なき――湖月抄に「くもりなき心也」とあるのは少々合はない。眞淵が「物のかくれたる所を隈といふ。さるかくれがくれまで至れるものいひ也」と云ひ、宣長が「世の中の女のさまざまのやうを、殘る所なくよく知りていふ馬頭なれども也」と云つたのに従ふべきである。○さだめかねて――湖月抄に「らうたき人も立ち離れば男のために至りなき事もあり、又かくそばそばしき人も出ばえする事あれば、いづれをよしとも悪しとも定め難きと定めかねたる也」とあるが、宣長は、この上の二種のみあげていへるはかなはずとして「上の件にいへるさまざまの女をすべていづれをよしとも定めかぬる也」と云つたが、従ふべきである。

通釋　ただ普通の戀仲として見るのでは缺點がなくても、自分の妻として頼ることの出來る女を選ばうとしますのに、この世に澤山ゐる女の中にも、これぞと決定しかねるものでございました。男子が朝廷に仕へ奉つて、しつかりとした天下の柱石となるべき者でも、眞の人材となるべき者を選拔しようとすると、中々困難なことでございませう。しかし、いくら賢明であるからといつて、一人二人の少人數で天下の政務をとり、世を治めることの出來ることではございませんから、上の人は下の者に助けられ、下の者は上の人に服従して、事務の範圍が廣いので、互に融通がつきませう。狹い家庭内の主婦とすべき人一人の上について考へて見ますと、具はらないでは悪るからうやうな大切な事が、何かにつけて澤山ございます。さうかと思へばかうだし、一方がよければ一方がわるく、ゆがみなりにでも、まあそのままで我慢の出來さうな人が少いのでございますが、私などは、別段色めいた氣ぎぐれ心で、女の樣子を澤山較べ合せて見ようなどといふ物好ではございませんけれども、どうせ同じこと妻とするのなら、一途に生涯を託すべき妻と決定することの出來るほど、自分が力を入れて教育し、矯正すべき缺點がなくて、すぐそのまま氣に入るやうな女でもありはせぬかと、選びはじめ、女が中々決定しにくいのでございませう。必ずしも自分の理想にはかなはなくても、逢ひそめた緣だけを捨て難く思つて辛棒する人は、如何にも實着な男であると見え、又そのやうにして長く連れ添うてゐる女にとつても、何かそれだけの取柄があらうと、奥床しく推量されるものでございます。けれども、どうして中々さうもございませんよ。世間の實相といふものを、あれこれと見集めて考へて見るにつけまして、想像もつかないやうな、又大そう好奇心をひくやうな事も存外ないものでございますよ。あなた方のやうな無上最高の御選擇に對しましては、ましてどれ程の御婦人がお似合になりませう。より好みをあまり申しません私ごとき下賤の者でさへも、かうなのでございますから。

容貌が醜くくなく、若やかな時代の、めいめい塵一つもつけまいと身だしなみをし、手紙を書くにしても、大やうに言葉の選擇をし、墨つきもぼんやりと書いて、男の氣をもませ、又もう一度はつきりした手紙を見たいものだと、男の心を堪へられない程ぢらせ、かすかな聲を聞く位の所まで近

く言ひ寄るけれど、息よりも細い引き入れ聲で、しかも言葉數が少いのが、大そうよく缺點を隱すのでございました。かうした女を、物柔かで、女らしいと見ますと、あまり情けに引きこまれすぎて、そのままに調子をあはせますと、浮氣めいてきます。これが最初の缺點としてあげるべきものでございます。

主婦としての仕事の澤山ございます中に、等閑ではすまされない特に大切な夫の世話といふ方面では、あまり趣味を解しすぎて、一寸した折につけての情趣があり、風雅に熱心であるといふ點は、なくてもよからうと見えますのに、また一方では、實直といふ方面一點張りで、とかく額髮を耳にはさみ勝ちで、器量もよくない世話女房が、一途に世帶じみた世話ばかりをして、朝夕わが家を出入りするにつけても、公私に亙つて人の擧動や、善い事、惡い事の目にも耳にもとまる有樣を、疎疎しい人などに、わざわざどうして話しませうか。身に近く暮してゐる妻の、話をきいて理解し判斷をして與れさうなのに、相談もしようと、世の中のことにつけて、ほほゑまれ、涙もにじみ出、もしくは又よそ事ながら、わけもなくむかつぱらが立つて、心一つに思案にあまる事などが多くございますのを、あんな張合のない妻などに何で聞かさうものかと思ふと、自然顏がうちそむかれて、人知れず苦笑もされ、「ああ」とも歎息の獨言がもれまする時に、「何ですの」などと、氣もなげに夫の顏を仰ぎ見てゐるなど、どうして物足りなくございませんでせう。

一途に子供らしくおぼこめいて、おとなしさうな人を、どうしてとやかく缺點を矯め直して見ずにおかれませう。初めはもどかしくとも、直し甲斐のある心地がするでございませう。かういふ女は、差し向ひでゐる時は、ほんたうにかはいいといふ點で、そのままで缺點も見のがされませうが、遠くに離れてゐる場合には、然るべき用向をも云ひやり、又その時折に始末すべき事柄の、一寸したはかないことにせよ。實用上のことにせよ、自分の心から氣づいてすることはなく、物事に深い造詣のなからうのは、大そう物足りなく、頼りにならぬといふ缺點は、いくら大やうなのがよいと云つても、これでも矢張困つた事でございませう。ふだんは、少々よそよそしくして、氣にくはない女が、場合によつては、存外に榮々しい事をし出かすこともあるものでございますからね」など、殘る所なくすべてを知りつくしてゐる論客も、決定しかねて、ひどく嘆息する。

「今はたゞ品にもよらじ。容貌をば更にもいはじ。いとくち惜しく、ねぢけがましきおぼえだになくば、たゞ偏に物まめやかに、靜なる心の趣ならむよるべをぞ、終のたのみ所には思ひ置くべかりける。あまりのゆゑよし心ばせ、うち添へたらむをば、よろこびに思ひ、少し後れたる方あらむをも、あながちに求め加へじ。後やすくのどけき所だに強くば、うはべの情は、おのづからもてつけつべきわざをや。

艶に物恥して、恨み言ふべき事をも、見知らぬ樣に忍びて、上はつれ

なくみさをづくり、心一つに思ひ餘る時は、いはむ方なくすごき言の葉、哀なる歌を詠み置き、忍ばざるべきかたみを留めて、深き山里、世ばなれたる海面などに、這ひ隱れぬかし。童に侍りし時、女房などの物語讀みしを聞きて、いと哀に悲しく、心深き事かなと、涙をさへなむ落し侍りし。今思ふには、いと輕々しく殊更びたる事なり。

志深からむ男をおきて、見る目の前につらきことありとも、人の心を見知らぬやうに、逃げかくれて人を惑はし、心をも見むとする程に、長き世の物思ひになる、いとあぢきなき事なり。『心深しや』などほめたてられて、あはれ進みぬれば、やがて尼になりぬかし。思ひ立つほどは、いと心すめるやうにて、世にかへり見すべくも思へらず。『いであな悲し。かくはた思しなりにけるよ』などやうに、あひ知れる人來とぶらひ、ひたすらに憂しとも思ひはなれぬをとこ聞きつけて、涙おとせば、使ふ人、古御達など、『君の御心はあはれなりけるものを、あたら御身を』などいふに、みづから額髪をかきさぐりて、あへなく心細ければ、うちひそみぬかし。しのぶれど、涙こぼれぬれば、折々ごとにえ念じ得ず。くやしき事も多かめるに、佛もなかなか心ぎたなしと見給ひつべし。濁りにしめる程よりも、なま浮びにては、かへりて惡しき道にも漂ひぬべくぞ覺ゆる。絶えぬ宿世淺からで、尼にもなさで尋ねとりたらむも、やがて、相添ひて、その思ひ出、恨めしきふしあらざらむや。あしくもよくも相添ひて、とあらむ折もかからむきざみをも、見過したらむ中こそ、契深くあはれならめ。我も人も、後めたく心おかれじやは。

【語釋】○今はただ品にもよらじ――花鳥餘情に「人はただ心むけを本とすべし。品も形もいらぬといふ心也。三界唯心萬法唯識の心也。源氏一部の肝心ここにあり。」とある。玉の小櫛は「花鳥には、いかにぞや」とある。中世的學風と、近世的學風との對立的相違を示すものとして興味がある。三界唯心云々の心也とはいたくたがへる事也。ともすればかやうのよしなしごとを引出でらるるから、ここにあげておく。○ねぢけがましき――湖月抄の傍註に「佞人也。口ききがましき人を云也」とあるが、これは河海抄・花鳥餘情以來の說である。この說に對して宣長は「人の心にもあ

【省略】以下「又なのめにうつろふ方あらむ人を云々」から、「中將はこのことわり聞きはてむと、心に入れてあへしらひゐ給へり」まで省略。今この部分の梗概

概を左に示す。

左馬頭の話がまだつづく――一寸浮氣をする男をうらんで、仲たがひをする女は馬鹿げた事である。さうした緣だとあきらめるべきだ。女はおとなしく、男の浮氣に對しても、あまり嫉妬をせず、ただほのめかす程度の忠告を與へるのがよい。あまり放任しておくのもいけない。――と馬頭が論じたあとを、頭中將が――それと反對に男が熱愛してゐる女が浮氣をするのは大變なことである。まあ何にしても、男の浮氣に對して、女たるものが氣長に我慢をする程結構なことはない。――と自分の

れ、形にもあれ、しわざにもあれ、有るべきままに直からずして、わろくまがれる意也。」と註し、評釋の傍註に「ネヂクレ」となすのが正しい。○靜かなる心のおもむき――小櫛に「かろがろしく動かぬ心をいへり」とある。○よるべ――よりどころ。湖月抄の傍註に本妻のこととしてゐるが正しくない。宣長の說のやうに、通ひ住む女を云ふ。○つひのたのみ所――一生のかかり所。本妻。○ゆゑよし――異說がある。河海抄に「故つきよしばみたる心也」とある。弄花抄には、「故とは種姓などにや。由とはよせ有る事歟。同じ事ながら少し變るべき歟。心ばせはそのほかなるべし」とある。しかるに契沖は萬葉集九、見蒐原處女墓歌の中なる「故緣（ユエヨシ）」を例として引き、「あまりの故とも、あまりのよしともひては、文章も惡くことわりも聞えねば、さてかくは云へるなるべし」と云つてゐる。宣長は「何わざにもあれ、ひと才（カド）とるべきふしあるを、ゆゑ有りとも、よし有りともいふ也」と云つてゐる。ここは才藝の一かどすぐれたるをいふのであらう。○よろこびに思ひ――湖月抄の師說に「も早や堪忍すべし。少しの難あらんは、しひて云はじとの心なるべし」とあるが、これは契沖が俗にいふひろひ物の意であるといひ、だみ詞にまうけ物といふほどの詞であるとしてゐるのが正しい。○おくれたる方あらん――評釋に「おくれたるは足らはぬ也。しか足らはぬ方ありとも、强ひてもとめ加へじと也」とある。○うしろやすくのどけき所――新釋に「上のまめやかに靜かなるてふに同じ心なるが、中に是は少し上よりも事弱きかた也。且うしろやすくは背目痛と對ふ詞にて、いつはり後ろぐらからぬをいふ。のどけきは物ねたみ强くせず、萬にはあしからぬなど也」とある。○うはべの情は云々――評釋に「この段新釋に云はれたるが如く、品定の初に女の――これはしもと難つくまじきはかたくもあるかなと云ひ出でたるを結びたるにて、世にあらゆる女の

妹の奏の上の貞淑を誇らしげに思ふが、源氏が居眠りをしてゐるので、物足りなく思ふ。馬頭は、判定の博士になつて、辯じ立て、中將は熱心になつて合槌をうつ。次の一段は、馬頭の詞であつて、古來有名な部分である。

難を論じて、つひに此まめやかに後ろやすきにとどめたる、いとめでたし。」とある。○えんに――孟津抄に「艶うつくしくやさしき也」とある。心にあることの、それとなく表面にもれ出でるさま。あらはにそれと示さず、自然に內なるものの片はしの出づるを云ふ。おもはせぶりなるさまについていふ。○恨みいふべき事をも――細流抄に「匿怨友其人」なる論語の一節を引いてゐるが、餘滴に「かかる所に論語など引出でていふべきにあらず。物はぢの本性より、いふべき事を云はぬにて、論語などにいへるとは、おもむき違へり」と云ひ、宣長が「うらみは用言にてよむべし。細流に論語の文を引かれたる更にあたらぬ事也」と云つたのは正しい。○見知らぬさまに――小櫛に「恨むべき事とも知らぬさまにてある也」とある。○つれなく操づくり――花鳥餘情に「今案みさをつくるとは、知らず顏なる心也」とあり、新釋に「松柏などの常に靑きより人の心のかはらぬにたとへいふ。」とある。小櫛に「みさをにもてつけてともいへり。くづれぬやうに心をつけてもてつくる也」とある。○しのばるべきかたみ――男が後から見て戀ひしのぶべき形見と評釋に傍註を施す。○女房などの物語よみしを――餘滴に「これは大和物語に平仲が武藏の寺の女をよばひて、さてあひて後いかざりければ、女うらみわびて、こもりゐて、使ふ人にも見せで、尼になりにけるを、平仲聞きてゆきけれど、ぬりごめにかくれて、いらへをだにせねば、事のありよふをつかふ人々にいひてなきけるよし、かの物語にあり云々。蜻蛉日記にもさること見えたり。ここに物語よみしと有るは、これなどにやあらん」と云ひ、契沖もこの說を持してゐる。新釋には、「伊勢物語の男の家を出でたる女心かろしといひやせんと、よみて出でしに、又ありしよりけに、いひ交はせしが、終には中ぞらに浮きたる雲の如くて、離れはてたると、又有常の女の尼となりて別れしなどをかね

て、それに事をそへて書きたりと見ゆ」とある。中外抄にも、關白忠實幼少の時、宇治大納言物語を女房の讀んだのを聞いたと書いてゐる。物語は女房のもて遊びものであつたと見える。○ことさらびたる――花鳥餘情に「ことさらに作り出てたる心也」とある。○心をも見んとするほどに――どうするかと男の心をためして見ようとするほどに。○長世の物思ひになる――玉の小櫛に「さやうの事によりてつひに離別することあるを云へり」とある。○心深しや――新釋に「愛着を離れて著提心に趣き給ふべき也などほむるにつけて、情のすすみて尼になりぬべしと也」とある。○あはれすゝみぬれば――はじめ心ひとつに思ひあまつてゐたすぢが、いよいよ進むのである。○やがて――そのまま。評釋の傍註に「スグ」とあるは、俗言である。○いであな――おやまあといふ程の意。○ふるごたち――紫明抄に「後達也。女の惣名也。後漢書之周禮曰、王者立后、鄭玄註、禮記曰、后之言後言在夫之後、故以女謂後達」とあり、女は夫に先だたない意とし、河海抄にもこの說をあげてゐる。しかし、契沖が指摘したやうに、後漢書には言在夫之後也とのみあつて、故以女謂後達の六字はない。本朝文粹の注に「俗謂貴女爲御、蓋取貴人女御之義也」とあるやうに、古は貴女をほめて「御」といつた。女御の「御」がこれである。後に貴家に仕へる女房の中に、少し地位の高い老女などを、「御達」といふやうになつた。よつて今は「後達」の說は取らない。○ひたひ髮をかいざくり――花鳥餘情に「雪の尼はたれ尼といひて、額髮を喝食などのやうにはさむ也」とあり、小櫛に「あたら髮をそぎすてたる事よと、後悔するさま也」とある。○うちひそみぬかし――河海抄に「舌出ヒソミ遊仙窟」とあげてゐるが、契沖の考證した如く、この二字は遊仙窟にない。眞淵が「是は泣く時の口つきを云ふ」と云つたやうに、べそをかくことである。○にごりにしめる――伊行の源氏釋に古今集遍照の「はちす葉の濁りにしまぬ心もて何かは露を玉とあざむく」なる引歌をあげ奥入・紫明抄・河海抄以下の諸註がみな之に從つてゐる。細流抄に「引歌詞ばかりをとる也。心はちがふ也」とあるやうに、意は全く異る。必ずしも引歌と見なくてよいものである。○悪しき道――悪道。又は悪趣。地獄道・餓鬼道・畜生道を三悪趣又は三悪道といひ、修羅道を加へて四悪道といふ。○やがて――評釋に云ふが如く、「うらめしき」へかかる意である。○その思ひ出うらめしきふしもあらざらんや――この部分は本文校訂上にも注意すべき部分である。契沖は「今案、注に此廿七字異本になしといへり。なきは落ちたる也」とて、その理由を說明し、宜長は「又一本にその思ひ出といふより、あしくもよくもといふまで廿七文字のなきは、あひそひてといふ詞の二つあるによりて、その中間の語を見落しておちたる也。此語どもも、なくては聞えず」とある。今現存諸本を調査するに、兩方の本文とも鎌倉期の古寫本に見えてゐる。最も信頼すべき寄表紙系統の古寫本に、この兩方の本文が見えるから、おそらくは一方が落したのであらう。河内本には「尋ねとられてもその思ひ出でうらめしきふしあらざらんやあしくもよくも」とある。「やがて」は次の「うらめしきふし」にかかるものであること、評釋に指摘した通りである。○われも人もうしろめたく心おかれじやは――宗祇の註に「さきの如くあひそひてありとも、さやうならん女は、うしろめたくて心おかれぬ事はあるまじの心也」とある。但しここは、女とのみかぎらず、女にしても男にしてもの意である。心おかれじやはとは、氣がおかれまいものかの意で、反語をなす。

通釋　今はもう種姓によることとしますまい。容貌などは勿論云ひますまい。ひどくつまらなく、ひねくれがましい評判さへなかつたなら、ただひたすらに、靜かな心の趣のあるやうな女をこそ、

結局の頼り所とすべきでございました。その以上の才藝や心意氣など餘分にもつてゐるやうな女は、拾ひ物に思ひ、少し位は不得手な方面があらうとも、無理にさがし出して補ひ加へることはすまい。氣がかりな所がなく、落ちつきのある點さへ確かであつたならば、表面の情味のやうなものは、自然取りつけることが出來るものでございますからね。

内氣にしなをつくつてはにかみ、口に出して恨むべきことをも、見知らぬ風に我慢をし、うはべは何げなく平氣を裝つてゐますが、自分の心一つに思ひあまる時には、いひやうもない程のはげしい文句や、情のこもつた歌を詠んでおき、後に男から懸ひしのばれるやうな形見をあとに殘して、深い山里や、世間離れのした海のほとりなどに、そつとかくれてしまふのでございますよ。私がまだ子供でございました時、女房などが物語を讀んでゐるのを聞きまして、大そうあはれに悲しく、さても思慮深いことであるよと、涙をさへ落しました。今思ひますと、さういふ女は大そう輕率で、わざとらしい事でございます。たとひ目前にさしあたつての無情な仕打があるとしても、男の眞意をも理解しないやうに、もともと情愛の深い筈の男をあとに置き去りにして、逃げかくれして、男を當惑させ、その心をためして見ようとする中に、緣がきれて終生の物思ひになるといふ事は、實につまらないことでございます。「ほんとにお考へ深いことです」など、他人からほめ立てられて、自然感傷が昂じてくると、そのまま尼になつてしまひますからね。發心の當座は大そう心も澄んだやうで、二度と憂世の事をふりかへつて見ようとも思つてをりません。所が「おやまあ、悲しいこと。どうしてまたこんなに決心しておしまひになつたのでせう」などといふ風に、昔なじみの人が來て見舞ひ、又女がひたすらいやだと思捨てたのでもないもとの男が、女が尼になつた話をきいて涙を落しますと、召使や老女房たちが、「旦那さまの御心はやつぱりお優しくいらつしやいましたのに、あつたら惜しい御身を、まあ」などと話しますと、女は後悔して、自ら短い額髪をさぐつて見て、張合なく心細いので、ぺそをかくのでございますよ。がまんしても、一度涙がこぼれてしまひますと、何かの折につけて我慢がしきれません。殘念な事も多からうと思はれますが、それでは佛もかへつて未練な奴と御らんになつてしまふことでございませう。この世の濁りに染まつてゐる間よりも、なまなかの悟りでは、かへつて地獄にも漂つてしまひさうに思はれます。萬一切れぬ宿緣が淺くなくて、尼にしなさない中に探し出して、取りもどしたやうな場合でも、そのことの思ひ出に、やはり恨めしい點がございますまいか、必ずございませう。惡いにせよ、よいにせよ、とにかく連れ添うて、あんな折も、こんな場合も、とにかく見許し合つた夫婦仲こそ、堅深くあはれでございませう。そんな騒動をし出かしますと、男の方でも、女の方でも、どちらも不安心で、氣がおけないでございませうか。

「萬の事によそへておぼせ。木の道の工匠の、萬の物を、心に任せて作り出すも、臨時の翫弄物の、その物と、跡も定まらぬは、そばつきざればみたるも、實に斯うもしつべかりけりと、時につけつゝ、樣をかへて、今めかしきに目うつりて、をかしきもあり。大事にして、誠

に麗しき、人の調度のかざりとする、定まれるやうあるものを、難なくし出づる事なむ、なほ誠の物の上手は、さまことに見えわかれ侍る。又繪所に上手多かれど、墨がきに選ばれて、次々に更に劣り優る差別ふとしも見えわかれず。かゝれど、人の見及ばぬ蓬莱の山、荒海のいかれる魚のすがた、唐國の烈しき獸のかたち、目に見えぬ鬼の顔などの、おどろおどろしく作りたる物は、心に任せて、ひとは人の目を驚かして、實には似ざらめど、さてありぬべし、尋常の山のたゝずまひ水のながれ、目に近き人の家居有樣、實にと見え、なつかしくやはらびたる形などを、靜にかきませて、すくよかならぬ山の景色、木深く、世離れてたゝみなし、氣近き籬の内をば、その心しらひおきてなどをなむ、上手はいと勢殊に、わろものは及ばぬ所多かめる。手を書きたるにも、深き事はなくて、此處彼處點長にはしり書き、そこはかとなく氣色ばめるは、うち見るに、かど〳〵しくけしきだちたれど、なほ誠のすぢを細やかに書き得たるは、うはべの筆消えて見ゆれど、今ひとたび取り竝べて見れば、なほ實になむよりける。

はかなき事だにかくこそ侍れ。まして人の心の、時にあたりて氣色ばめらむ見る目のなさけをば、え賴むまじく思ひ給へ侍り。その初の事、すき〳〵しくとも申し侍らむ」とて、近く居寄れば、君も目覺し給ふ。中將いみじく信じて、頰杖をつきて對ひ居給へり。

法の師の、世のことわり說き聞かせむ所の心地するも、且はをかしけれど、かゝるついでは、おの〳〵睦言もえ忍びとゞめずなむありける。

【省略】以下「はやういまだ下萬に侍りし時」から、「ばてはては怪しきことどもになりて明し給ひつ」まで卽ち雨夜品定の後半と、辛うじて今日は日のけしきもなほれり」から卷末まで卽ち中川の宿の部分を省略する。雨夜の品定でも、この部分には婦人の話が非常に多く出て來るし、中川の宿の所は、内容が内容であるから、試驗問題としては、決して適當な部分ではない。先づ出ることはないであらうと思はれるから省略したのである。今この二つの部分について、簡單ながら、梗概を左にかかげる。

【語釋】○萬の事によそへて――花鳥餘情に「第八段。又馬頭が詞也。雨夜の物語はじめは女の品心むけのよし惡しを物にも喩へず、ありのままに書きたり。此段よりは、又木の道、繪所、手かき、

（一）雨夜の品定のつづき――左馬頭が自分の若い時代に經驗した戀愛について語るのである。別に本妻にしようとまで思熱心になれない女と親しくなつた。女の方では心のまつすぐな正直者であつたが、ただ一つ嫉妬が缺點であつた。ある時、一寸した口論から、女は逆上して男の指にかみついた。それが原因となつて二人の間は絶えてしまひ、つひに女はこの事を氣にやんで死んでしまつた。又その頃通つた女は、才藝があり、しつかりした女であつたけれど、他に男があつたらしく、ある日さる嚴上人と宮中から退出して、その女の家の前を通るとき、嚴上人は、ふとその家にはいつて行つて笛をふくと、女はよくなる和琴を合奏し、男と歌の贈答などするので、いやになつて、もうそれからは通はぬことにしてしまつた。――と馬頭が體驗談をする。次に頭中將が「なにがしはしれ者の物語をせむ」とて、一人の女と親しくなり、子までなしたが、本妻の四の君の方からひどいことを言つてやつたので、女はおそれて、にげかくれてしまつた。その女は、非常におとなしい、子供らしい、なよ〳〵とした可憐な女であつたが、たし

この三つの藝にたとへて人の誠あり。いつはりある事をのぶ。此下の段には、其のはじめの事、すきずきしくとも聞えんとて、各々昔ありし事どもを互に語り出す。かくの如く三段に書き分けたる言葉のつづき、偏へに法華經の三周說法の姿をかたどれり」とて、佛敎の三周について說き、更に「此三周のすがた今の物語の作樣に相似たる也。世俗文字の業狂言綺語の誤をあらためて、讚佛乘の因、轉法輪の緣とせる心也。下の詞に中將いみじう興じて、法の師の世のことわり說き聞かせん所の心地すといへる、此ことわりを思ひて書けるなるべし」とある佛敎附會說は取るに足らない。細流抄に「萬の道を中將に知らせん爲也。政道にも又かくの如き道までも知らでは叶ふまじき由也」とあるが、これも物語の眞意を外れた意見である。但し中世の思想の一面を反映したものとして注意すべきものである。○臨時のもてあそびもの――湖月抄に「其の時々に臨みたるはやり道具の昔より定まりたる法式もなき物也」とある。○そのものとあとも定まらぬは――たしかに如何なるものとその形の定まりのない器物はの意。新釋に「法則もなく戯れたる作りざまの一旦をかしと見ゆるを云ふ」とある。○そばつき――傍の形。つきは顏つき、手つきなどのつき也。○ざればみたるも――河海抄には「左禮」細流には「左道」の字をあててゐる。契沖は「洒麗」の音といふ。宣長は「俗言にしやれたるといふこと也。註ども皆たがへり。又河海に此たとへを人にとらば、人にたはぶれ事を好む人也と見え、宗祇抄に宮仕人にたとへいふ也といへるも、皆ひがごと也。これはうはべの風流めき、なさけだちて、實なき女のたとへ也」とあるのがよろしい。○大事として――是から定まつた格式のある道具のうへをいふのである。難なくしいつるにかかる。○うるはしき人の調度のかざり――河海に「うるはしき」に「美麗」の字をあててゐるが、「端正」の意である。宣長は「うるはしきは調度へかかりて、人へはかからず、人のうるはしき調度といふこと也。だみ詞に、うるはしき人と見て、善き人と云へるはたがへり」といひ、廣道は、「うるはしき人にて、貴人をさしたるにやあらん」と云つてゐる。自分は「物」にかかる詞で、「人の調度の飾とする、定まれる樣ある、誠にうるはしき物」とつづくべきものと考へる。故實ある貴人、又は美麗なる人といふ說は正しくない。○ゑどころ――官職故實祕抄に「繪所は畫所は畫師の集る所也。西宮記には、式乾門の內、東腋御書所の南とあり。又拾芥抄には建春門の內の東腋御書所の北とありと見えたり。時代によりてその所變れるにや。古へは畫工司ありて、後には內匠寮にあはせ給へり。後世內匠寮もただ名のみにして實なければ、別に繪所をたて給ふにや」とある。○すみがき――玉の小櫛に「彩色をする事に對へて、ただ繪をかくことをいへる名目也。古へは繪をかきて彩色をばべちに他人にせさする事ありし故に、二つに分て、墨がき、つくり繪といへり。つくりゑとは彩色するをいふ也。墨繪・彩色繪といふことにはあらず云々」とある。湖月抄の傍註に「粉色はまぎるる事ある也。墨繪に至りて大事也」とあるは正しくない。○えらばれて――えらばれて書くにの意。○蓬萊の山――河海抄に後漢書の張衡傳を引いてゐるが、餘滿に列子を引用してゐる。三才圖會に山海經を引いて、「蓬萊山海中之神山云々」とある。○鬼のかほ――河海抄には韓子をひく。○實には似ざらめど――まことには似るまじけれどの意。○さてありぬべし――湖月抄の傍註に「眞實を見ざるものは、さもあるべきと思ふ也」とあるが、さういふ意味ではなく、「それで事はすむ」「それで事足りる」の意である。○すくよかならぬ――河海に「健スクヨカ」とあり、だみ詞に「すげなからぬ山」とあるのは正しくない。嶮岨ならぬ山の意。小櫛に「嶮岨なる山は繪にかくに、

いことをしたと話す。

次に式部丞が、體驗談をする。まだ文章生であつた時分、ある博士の娘に通つたが、其女は才學のある賢婦人であつた。ある時、重い風邪にかかつてゐる時に呼れて行つた所、藥用の蒜のにほひがぷんぷんしてゐたのには、さすがにおどろいて逃げ出したといふたわいもない話であつた。式部丞はその話をしておいて退出する。

さて、左馬頭は、この品定の總括とも云ふべき、一論を最後にする。すべて男でも女でも、未熟な者は、一ほし知つてゐる事を、殘りなく他人に見せようとする癖がある。女が深い學問をしようとするのは愛敬のない事である。女はとかく氣取つたり、趣味ありの顏をしない方が無難である。人は心に知つてゐる事でも、表面は知らぬ顏を裝つて、言ひ度いことをも、全部云はずにおくべきものであつたと話す。議論はどちらに落ちつくとも分らず、妙なことになつて、一夜を明かされた。（この最後の左馬頭の結論の一段は、紙面の都合上省略したが、試驗問題として出さうな所と思はれるから、他の註釋書によつて、詳しくしらべておかれることを希望する。）

けしき有りて、書きやすきを、なだらかなる山は、書きにくき故也」とある。○世離れてたたみなし――花鳥餘情に雅兼卿記を引いて考證し「今案墨の濃淡をもて遠近の山をあらはす也」とあり、評釋に「山は幾重にも疊むが如く書く物なる故に、たたみなしと云へる也」とある。○けぢかき云々――前栽をいふ。○心しらひ――用意といふ程の意。餘滴に「そのおもむきの有樣に心を用ひおきて也。天武紀に心しらひと云ふに、有意と書きたり」とある。「しらひ」は、「あへしらひ」などと同じ語で、俗に「心もち」といふ意で、體言であると廣道は說いてゐる。○おきてなどをなん――玉の小櫛に「此をもじ、下に受けたる言なく穩かならず。いきほひことに書くをと、かくをといふ言を加へて心得べし」とある。○わろものは――下手なもの。この所もまた人の目を驚かすことを、あだなる女にたとへ、よの常の山とか、け近いまがきの内などを實なる女にたとへに言つたのである。○てをかきたるにも――これから書の事によそへていふのである。○ここかしこの點ながに――ここかしこの點を長くなどしてしやれて書くのである。○はしり書き――書きは淸んでよむべきである。○そこはかとなく――どこといふことなく。○けしきばめるは――氣取りめかしたのは。○かど――才氣。○まことのすぢを――湖月抄の傍註に「ただしき筆法をいふ也」とある。○うはべの筆きえて――評釋に「うはべの筆とは筆勢のことなるべし。法の如くこまやかに書きたるは筆勢なきやうなるを、消えてといへる也」とある。○今一度とりならべて――もう一度よくよく比較して見ればの意。○なほじちになんよりける――やはり實着なものに心がよるものである。上にのべた三つのたとへをすべて總括するのである。宜長も指摘したやうに、實なる方のたとへを、本妻たるべき女のたとへといひ、源氏の君や頭中將が世をまつりごち給ふ故に教訓の意味にて馬頭が語るといふのは、いづれもあやまつてゐる。○見る目のなさけ――目の先きのなさけ。○君もめさまし給ふ――評釋に「此所當夜の人々のさまをあらはしたる第六の段也。源氏君のねぶりてさめ給ひ、中將の信じてあへしらひ給ふさまなど、其人の姿をまさしく見るが如くにて、いといとめでたし」と評してゐる。○のりの師の云々――湖月抄の傍註に「紫式部詞。草子地也」とあるが、眞淵は「是を記者の語といへる說はいかにぞや。先づみづからかく云ひて、有りつる物語する也。かの三周の說法などに比せんとする心より、文の樣よく見えぬなるべし」と云つたが、雅望が早く指摘したやうに、これは眞淵の失考であつて、舊註の說の方が正しい。又花鳥餘情に三周說法の事が見えてゐるが、これも物語の眞意ではない。紹巴抄に「源氏は世を政し給ふべき故、世上の善惡を知らせ奉るべきためなるべし」と云つてゐるのも正しくない。ここは評釋に「法師の世間の道理を說く所の心地するもをかしけれど、戯れたる也」とある通りである。

通釋　馬頭は又論じて曰く――色々な事にひきくらべてお考へ下さい。大工や指物師がさまざまの物を、勝手にこしらへる場合にも、臨時の暫弄品で、そのものと形式も一定してゐないものは、外見がしやれてゐても、なる程かうも作るべきであつたと、その時々の流行に隨つて、風變りで、今めかしい點に目うつりがして、面白いものもございます。然るに、きちんとした、人の調度品の裝飾とする。一定の樣式のきまつてゐる物を、難點もなくし出かすことは、やはり何と云つても、本當の名人は、格別に違つて見えるものでございます。又禁中の繪所には名人が澤山ゐますが、曇がきに選ばれて書きます時も、次々に優劣の差別といふものは、一見した所では區別出來ません。さうではあるが、誰もまだ見たことのない蓬萊の山とか、荒海の中の怒つた魚の姿とか、唐國の猛獸

の形とか、目に見えない鬼の顔とかのやうな、大袈裟な作り物は、一段人の目をおどろかして、本物には似てをりますまいけれど、それはそれで事がすみませう。所が普通の山の恰好とか、水の流れとか、目に近い人家の有様は、なる程とうなづけ、なつかしく穏やかな様子などを、静かに書きませ、嶮岨でない山の景色を、木立しげく、如何にも浮世離れのしたやうに重畳たる趣をあらはし、又手近にある籬の中のやうすを書くのに、その用意や、法則などを、名人は大そう格別な筆勢をあらはし、下手なものは及ばぬ點が多いやうでございます。又字を書きました際にも、深い素養はなくて、こちらあちら點を長くのばして走り書きをし、どこともなしに氣取つてゐますのは、一寸見た目には才氣があつて、氣がきいてゐますが、やはり本格な筆法をこまかく心得てゐるのは、表面の才氣はないやうに見えますものの、もう一度二つをならびて見ますと、やはり着實な方に心がひかれるものでございます。

一寸したつまらない事でさへかうでございます。まして人の心の、時に應じて氣取つた風をする目先の情趣をば、とても頼りとすることは出來まいと思ふのでございます。私の以前に經驗しましたことは、何だか好色がましくはございますが、申し上げませう――といつて、近く座をすすめると、源氏の君も目をおさましになつた。中將はひどく心をうちこんで、頻杖をついて對つてをられた。まるでお坊さんが、この世の道理を説教してきかせる道場のやうな感じがするのも、一方から云へば面白いけれど、かういふ序でには、めいめいの内證話をも、とてもかくしおほせることの出來ないものであつた。

（二）中川の宿――やうやくの事で雨も止んだ。源氏は葵の上を久々に訪れたが、例によつて、きちんとしてゐるのには不滿であつた。暗くなる時分に、この方角が中神の方塞になつてゐると聞いて、その方違のために、中川のほとりなる紀伊守の家に行く。その家は、やり水のほとりに螢などが亂れ飛んで、非常に風情がよかつた。そこには紀伊守の父伊豫介の後妻の空蟬が來てゐた。皆が寝靜まつてから、そつと空蟬の部屋にしのんで行き一夜の契を結んだ。空蟬には小君といふ弟があつたが、源氏はその後、空蟬のことが忘れられず、小君を使にして、手紙をおくる。しかし、空蟬は、二度と源氏に從はうとはしなかつた。（この部分は決して試驗問題にはなり得ないと思ふが、一通りぜひ讀んでおかなければならない所だと思ふ）帚木の卷はここまでで終り、空蟬につゞく。源氏の君十七歳の夏のことで、事件はやはり連續してゐる。

源氏物語前篇　終

源氏物語講義〔後篇〕

池田龜鑑

源氏物語講義　後篇　目次

夕顔……一二六
若紫……一八三
末摘花……二四九
玉鬘……二六三
幻……二四七

―〔目次終〕―

源氏物語講義　後篇

池田龜鑑

空蟬の巻の全部を省略する。今その梗概を下にかかげる。空蟬の巻は、事件としては直ちに帚木の巻に接續する。源氏の君十七歳の夏の出來事である。

空蟬に對する源氏の感情は、益々熱するばかりである。つひに自制することが出來ないで、空蟬の弟小君を語らひ、ある夕方、三度び中川の宿を訪れた。その時、源氏が、格子のはざまから内をうかがふと、空蟬が伊豫介の先妻の娘の軒端荻と碁をうつてゐる。その夜、小君としめし合はせた源氏の君は、中川の宿にとまつて、隣室にねてゐる空蟬の許にしのんで行く。空蟬は暗の中をしのびよる人のけはひに目をさまし、小袿をぬぎすべらかして逃れる。源氏の君は、後にひとり寢てゐた軒端荻と思ひもよらぬ一夜の契を結び、翌朝かへる時に、記念として空蟬の後にのこして行つた小袿をもつて行く。そして、空蟬の身をかへてける木のもとになほ人がらのなつかしきかなといふ一首を空蟬におくる。卷名はこの歌の詞に出づ。

夕顔

六條わたりの御忍ありきの頃、内裏よりまかで給ふ中宿に、大貳の乳母のいたく煩ひて尼になりにける、とぶらはむとて、五條わたりなる家尋ねておはしたり。

御車入るべき門は鎖したりければ、人して惟光召させて、待たせ給ひけるほど、むつかしげなる大路のさまを見渡し給へるに、この家の傍に、檜垣といふものの新しうして、上は、半蔀四五間ばかりあげ渡して、簾などもいと白う涼しげなるに、をかしき額つきの透影、あまた見えてのぞく。立ちさまよふらむ下つかた思ひやるに、あながちに、長高き心地ぞする。如何なる者の集へるならむと、様かはりて思さる。

御車もいたうやつし給へり、前驅もおはせ給はず、誰とか知らむとうち解け給ひて、少しさしのぞき給へれば、門は蔀のやうなるを押しあげたる、見いれの程なく物はかなき住居を、あはれに、いづこかさしてと思ほしなせば、玉の臺も同じことなり。

きりかげだつ物に、いと青やかなる葛の、心地よげに蔓ひかゝれるに、白き花ぞおのれひとり笑の眉開けたる。「遠方人に物申す」と、ひとりごち給ふを、御隨身つい居て、「かの白く咲けるをなむ夕顔と申し侍る。花の名は人めきて、斯うあやしき垣根になむ咲き侍りける」と申す。實にいと小家がちに、むづかしげなるわたりの、此面彼面あやしう打ちよろぼひてむね〳〵しからぬ軒のつまごとに、蔓ひ纏はれたるを、「くちをしの花の契や。一房折りて參れ」と宣へば、この押し開けたる門に入りて折る。流石にざれたる遣戸口に、黄なる生絹の單袴、長く著なしたる童のをかしげなる、出で來てうち招く。白き扇の、いたうこがしたるを、「これに置きて參らせよ。枝もなさけなげなめる花を」とて、取らせたれば、門あけて惟

紙面の都合上、夕顔以下は、語釋を簡單にして、主力を通釋に注ぐことにする。語釋の部分は他の有力な參考書によつて自分で一通り調べておかれることをおすすめする。なほ自分の考へでは、語の解釋よりも、文の意味卽ち通釋の方が、源氏物語の場合では、一層重要であると思ふから、特に御注意しておきたい。

光の朝臣の出で來たるして奉らす。「鍵を置き惑はし侍りて、いと不便なるわざなりや。物のあやめ見給へ分くべき人も侍らぬ邊なれど亂がはしき大路に立ちおはしまして」と畏り申す。引き入れて下り給ふ。

語釋　○六條わたりの御忍ありきの頃——六條のあたりに住んでいらつしやる前坊の御息所のところに、源氏の君がおしのびで通つてをられた頃。前坊とは桐壺帝の御弟で、前皇太子。六條の御息所と何時から親しくなつたかは明かにせず、突如として二人の關係をのべ、御息所の地位、性格等を、次第に明確にあらはして來る所に、作者の藝術家としての力量を認めなければならない。○內裏よりまかで給ふ中宿——內裏は一條と二條との間にある。內裏より退出して六條に至る中間なる五條に、大貳の乳母の家があるのである。中宿は、途中の休みどころ。○大貳の乳母——源氏の最も親しくした乳母。その乳母には子供が四人あつた。叡山の阿闍梨、源氏の腹心の家臣たる五位惟光、少將の命婦、三河守の妻がこれである。但し阿闍梨は異腹かも知れない。○御車いるべき門——源氏の御車を引き入れるべき正門。○むつかしげなる——むさくるしげなる。いぶせき。うつたうしげなる。○大路——往來。道路。○檜垣——檜の板を網代に組んで作れる垣。○半蔀——一板の戸の上手を蔀として、外に引き上げるやうにし、下手を板で固定せしめたもの。蔀とは格子の裏に板をはつたもの。○四五間——一けん（けんはまとも）は、柱と柱との中間を數へる語。○をかしき額つき——美しいかほつき。○すきかげ——すだれ越しにすかして見える影。○たちさまよふらむ下つかた——立ち騷いでゐるらしい下半身。○あながちに長高き心地ぞする——半蔀の上から見えるが故に、むやみに丈が高いやうな氣がする。○前驅——先拂ひ。三位以上の貴人の外出には必ず前驅の人が警蹕する例になつてゐる。○さしのぞき——車のすだれから源氏がさしのぞくのである。○見いれの程なく——外から見入れた奧の深くないこと。見通しが奧深くないこと。○あはれに——おもほしなせばにかかる。○いづこかさして——古今集十八雜下「世の中はいづれかさして我がならむ行きとまるをぞ宿と定むる」○玉の臺——古今六帖卷六、葎「何せむに玉のうてなも八重むぐらはえらん宿に二人こそねめ」。○きりかけだつもの——きりかけ塀めきたるもの。切懸塀は柱にきりかけをして、横に板を重ねかけてうちつけたもの。かりそめに築地のかはりなどにするもの。○おのれひとり笑ま——自分だけ面白げに。家のあはれげであるのもかまはず、花だけが得意げにの意。○をち方人に——河海抄に「うちわたすをち方人に物申すわれそのそこに白く咲けるは何の花ぞも、古今旋頭歌、この本歌は梅花也。されども白く咲けるはと言ふにつきて、花は夕顔の花に思ひよそへられたる也」とあり、細流に「續古今小侍從が歌に、さきにけりをち方人にことひて名を知りそめし夕がほの花、この心をとり用ゐたる也」とある。○御隨身——左右近衞府の官人が、弓箭太刀を帶び、上皇・攝關・大中少將・衞府及び兵衞の督佐に隨つて警衞するものを言ふ。○人めきて——「顏」といふ字によつて言つたのである。夕顏といふ名のことではない。○うちよろぼひ——萬水一露に「碩、小家のゆがみたるさま也」とある。○むねむねしからぬ——河海抄に「宗々」花鳥餘情に「棟々」孟津抄に「物の棟梁ならぬ心也」山下水に「本式なる殿などに

てなきといふ心也」とある。玉の小櫛に「棟の字にかかりて言へるみなかなはず（中略）これ等の字によりて解くべき詞にあらず」と言つてゐる。ここでは、しつかりともせぬの意である。○口惜しの――残念な、氣の毒な。○されたる――河海抄は「ゆがみたる戸口」の意として「左道」なる文字をあて、細流は同義に解して「左禮」の字をあてる。紫明抄には「たはぶれたる詞也」弄花抄には「古りたる心然るべきか」といつてゐる。眞淵は「洒麗の音也」といひ、雅望は「あざれを略して云へる也」といつてゐる。ここは、玉の小櫛の言へるが如く、しやれた、氣のきいたの意である。○單袴――裏のなき袴。○童――女の童。少女。○こがしたるを――たきものをたきしめたるをの意。○なさけなげなめる――河内本には「なさけなかめる」とある。一葉抄に「やさしからぬをいふ」とあり、紹巴抄に「枝もふつつかなる花と也」とある。玉の小櫛に「夕顔の枝はつるにておほどれはびこりたるものなれば手よりただには奉りにくかるべきほどに、此扇にすゑ奉れといふ也」とある。○いで來るして奉らす――細流抄に「此の御隨身花を直ちに參らすべき事をいかがと思ふ所へ、惟光門をあけて參りたるして奉る也」とある。○あやめ――「あや」は物の色のあざやかに分るを云ふ。「め」はその分れたる際をいふ事と思はれる。あやめも分かぬとは、そのあやめの分れがたく亂れたるさまを言ふと「評釋」は解いてゐる。見さかひ、區別の意である。○らうがはしき――周桂註に「亂りがはしき也」とある。

通釋　源氏の君が、六條のあたりにおしのびで通つてをられた頃、内裏から退出されて、そこまでお出でになる途中に、大貳の乳母が、ひどく重病をわづらつて、その平癒のために尼になつてゐる、それを見舞はうとて、五條のあたりにある家を尋ねてお出でになつた。

御車を引き入れるべき門は閉めてあつたから、人をして惟光をよびにやらせて、お待ちになつてゐる間、むさぐるしげな往來の樣子を、見渡してお出でになる時に、この家の側に、檜垣といふものを新しく作つて、その上は半蔀を四五間ばかりずらりと上げて、すだれなども大層白く涼しげである。そこに美しいかほつきの女の簾越の人影が澤山こちらをのぞいてゐるのが見える。物見をしようと、立ちさわいでゐるらしい下半身を想像すると、やたらに丈の高いやうな氣がするが、一體何者が集つてゐるのであらうと異樣にお思ひになる。

御車も大そうやつしてお出でになる。前驅もおつけになつてゐない、自分を誰と知るものがあらうぞと、お氣をお許しになつて、すこし車からのぞいてごらんになると、門は蔀風に出來てゐるのを押しあけてあるのだが、見通しも深くなく、ものはかない住居のやうすを「いづこをさして」と、あはれに悟つておしまひになると、金殿玉樓も、結局これと同じことである。

切懸塀めいたものに、大そう青やかな蔓が、さも愉快さうにはひかかつてゐるのに、白い花が自分だけひとり得意に咲きほこつてゐる。「遠方人に物申す」とひとり言を仰せになるのを、御隨身はひざまづいて、「あの白くさいてゐるのを、あれを夕顔とは申しまする。花の名は、何だか人間のやうで、こんなみすぼらしい垣根にばかり咲くのでございます」と申す。いかにも大そう小家がちで、むさぐるしげな界隈で、こちらあちら、變にひよろひよろしてしつかりともしない軒端ごとにはひまつはつてゐるのを「氣の毒な花の運命よ。一ふさ折つてお出で」と仰せになると、このおし開けてある門に御隨身ははいつて、折る。きたない家ながら、でもさすがにしやれた遣戸口に、黄色な生絹の單袴を長やかに着こんだ女の童の美しげなのが出てきて招く。白い扇の大そうたき物

をたきしめたのを出して、「これにのせて差上げなさいませ。枝も風情のなげな花でございますもの」といつて與へたので、御隨身は丁度門をあけて惟光の朝臣の出てきたのに渡して、惟光から君にさし上げさせた。惟光は「鍵をおき忘れまして、何とも不都合千萬なことでございました。何の見さかひのつくべき人も居ない界隈でございますけれど、こんなごたごたした往來にお立たせいたしまして……」と恐縮して申上げる。車を引き入れてお下りになる。

惟光が兄の阿闍梨、婿の參河守、女など渡り集ひたる程にて、斯くおはしましたるよろこびを、またなき事に畏まる。尼君も起き上りて、「惜しげなき身なれど、捨て難く思ひ給へつることは、たゞが御前に侍ひ御覽せらるゝ事の變り侍りなむことを、口惜しう思ひ給へたゆたひしかど、忌む事のしるしに蘇りてなむ、かく渡りおはしますを見給へ侍りぬれば、今なむ阿彌陀佛の御光も、心清く待たれ侍るべき」など聞えて、弱げに泣く。

「日頃おこたり難く物せらるゝを、安からず歎き渡りつるに、かく世を離るゝさまに物し給へば、いと哀にくち惜しうなむ。命長くて、なほ位高くなども見なし給へ。さてこそ九品の上にも、障りなく生れ給はめ。この世に少し憾のこるは、わろきわざとなむ聞くなど、涙ぐみて宣ふ。かたほなるをだに、乳母などやうの思ふべき人は、あさましうまほに見なすものを、ましていと面だたしう、なづさひ仕う奉りけむ身もいたはしく、辱くおもほゆべかめれば、すゞろに涙がちなり。子どもはいと見苦しと思ひて、背きぬる世の去り難きやうに、自らひそみ御覽せられ給ふと、つきじろひ目くはす。

君はいと哀とおぼして、「いはけなかりける程に、思ふべき人々のうち捨てものし給ひにける名殘、はぐくむ人數多ある樣なりしかど、親しく思ひ睦ぶる筋は、また無くなむ思ほえし。人となりて後は、限りあれば、朝夕にしもえ見奉らず、心のまゝに訪ひ參うづる事はなけれど、なほ久しう對面せぬ時は、心細く覺ゆるを、さらぬ別はなくもがなとなむ」など、細やかに語らひ給ひて、押し拭ひ給へる御袖の匂も、いと所狹きまで薫り滿ちたるに、げに思へば、世にお

しなべたらぬ人の御宿世ぞかしと、尼君をもどかしと見つる子どもも、皆うちしほたれけり。修法など、また〳〵始むべき事などおきて宣はせて、出で給ふとて、惟光に紙燭召して、ありつる扇御覽ずれば、もて馴したる移香、いと染み深うなつかしうて、をかしうすさび書きたり。

心あてにそれかとぞ見る白露のひかりそへたる夕顔の花

そこはかとなく書き紛らはしたるも、あてはかに故づきたれば、いと思のほかにをかしうおぼえ給ふ。

語釋　○阿闍梨――梵語の阿闍梨耶の略。軌範師と譯す。師たる僧。○またなきこと――河海抄には「またなき事也。一說云いまだなき也」とあり、評釋には「再びなき也」と云つてゐるが、今は又となきこと、この上なきことの意に解しておく。○よろこび――御禮。○すてがたく――舊說はこの世をそむき出家し難くの意に解し、廣道は死にがたくの意とす。○御覽ぜらるる――源氏に御覽ぜらるる。「らる」は受身の助動詞。○たゆたひ――細流に「さまをかへたる身にては、源氏の御あたりなどに、ひたひたと參り侍ふべきことはばかりあるべきと思ひたゆたひしと也」とあり、評釋に「御らんぜらるることのかはらむことを、口惜しく思ひて、死にがたくありしといふ意を、たゆたひといへる也」とある。たゆたふは、自動四段の動詞で、ためらふ、躊躇す、心の動いて定まらぬ意。○いむことのしるし――佛戒の功德。○心淸く――さつぱりとした心にて。さはやかな心にて。○おとろへがたく――病勢が衰へがたくの意。○世をはなるるさま――尼になつて世をのがれ離れたるが如きの意。○位高くなども見なし給へ――細流に「我昇進などをきはめ給ふべき行末をも見給へと也」とある。○九品の上――極樂往上の階級に上・中・下の三品があり、各品それぞれ、上・中・下の三生に分れる。九品の上といふは、上品上生のこと。○うらみ――執着。玉の小櫛に「かやうのうらみは俗にざんねんなるといふ意也」とある。○かたほ――河海抄に「おさなくかたなりなる心か」とあり、細流に「かたほは頑也。頑愚の心、おろかなる心也。ほの字すみてよむべし」とある。しかるに、玉の小櫛はこれ等を斥けて、「注みなひがごとなり。まほと反對したる詞にて、まほは物のろくなること、かたほはろくにもあらぬこと也。さて言の本は、船の眞帆、片帆より出でたるかとも思へど、さにはあらじ。ほの意は別にあるべし」と言つてゐる。○思ふべき人――ひいきに思ふ人。○いとおもただしう――源氏の如き立派なるお方を育てたれば、大層面目ありての意。○さりがたきやうに――あきらめがたきやうに。○ひそみ――眞淵は萬葉の原歌を引きて、六帖に「ひそむとも」と訓みあやまれる由を指摘し、かかる語が平安朝中期以前に行はれたることを證明し、泣く時の口づきをいふと解した。これに對して鈴木朗は、眉にも口にもかぎらず、顏中にわたるべき由を論じてゐる。湖月抄師說に「尼の後悔して源に笑止と思はれ給ともどかしく思ふと也」と解す。○つきじろひ――言葉に出しては言はず、肩や膝などをついて目くばせすること。○なごり――物事のすぎ去つた後その氣の殘る事。○かぎりあれば――源注餘滴に「此詞

は所せき御身など言へると同じくて、やむごとなき人の御身の自由ならで、心やすく出させ給ふこともまかせ給はぬをいふ也」とある。分限。おきて。

○さらぬ別れ――伊勢物語に「老いぬればさらぬ別れのありといへばいよいよ見まくほしき君かな。世の中にさらぬ別れのなくもがな千代もといのる人の子のため」とある。え去りがたき別。死別。

○げにおもへば世に――青表紙本には「げによにおもへば」とあり、又「世に」の二字のない本も多い。河内本には、「げに思へば世に」とある。評釋に「世にといふ字なき本は落ちたる也。さて本はげに思へば世におしなべたらぬ人のと有りしを、亂れてうつしひがめたるか。例の轉倒の語としても猶少し穩かならず」とある。○人のみすくせ――玉の小櫛に「かくまで世にすぐれ給へる源氏の君の御乳母となれることは、なみ〳〵ならぬ宿業ぞといふ也。注に源氏と乳母との緣の淺からぬといへるはかなはず」とある。○またまた――前にも命じたが、更にまたの意。○紙燭――脂燭とも。松の木を長さ一尺五寸餘、徑三分餘に丸く削り、先きの方を炭火で燻り黑くこがし、其上に油を引き、廣さ五分位の紙屋紙にて手もとをまいたものである。

○ひかりそへたる夕顏の花――河海抄に夕顏の美を美人にたとふる事祕說あり」とあり、花鳥餘情に「夕顏は女の我身にたとへてよめり。露の光は源氏によそへたるべし。河海に夕顏を美人にたとふることをのせ侍り。ここには相當せざるなるべし」といひ、細流抄に「源氏にて在しますと推量したるによりて花の光もそひたると也」とあり、湖月抄に「或說云、この歌夕顏の上の官女ども、かの源氏の車を頭中將と見て讀みてやりしといへり。歌の作者は官女にてあるべし。頭中將と見たる說あやまりにや」とあるが、いづれもよくない。夕顏の花の光をそへたのであつて、露の光では

ない。

通釋　丁度惟光の兄の阿闍梨や、婿の三河守や、娘などが集つてきてゐる時で、かうしてお出で下さつた喜びを、この上もないこととして、恐縮しお禮を申す。尼君も起き上つて「惜しさうもない身でございますが、この世をそむきにくく存じてをりましたわけは、ただかうしてお前に出まして、お目通りかなひますことが、出來なくなりませうことを、殘念に存じまして、躊躇いたしてをりましたけれど、思ひきつて佛戒を受けましたその功德によりまして、蘇生をいたしまして、それでかうしてお成り下さいましたのを見ました上は、今こそ今生に思ひのこすこともなく、さつぱりと、み佛の御來迎をおまち申されませう」と申上げて、よわげに泣く。

源氏も「平素御病氣がどうもはかばかしくなくていらつしやるのを、不安になげいてまゐりましたのに、かうして尼になつて世をのがれ離れたやうな姿でいらつしやるので、まことにあはれにも殘念にも思はれます。長生をして、これからもつと位高く立身するのを見て下さい。さうでこそ、極樂淨土の上品上生には、さはりもなく往生なさるでせう。この世に、少しでも執着の殘るといふことは、往生のさはりだと聞いてをります」など、涙ぐんで仰せになる。

ろくでもない主人でさへ、乳母などのやうなひいきに見る人は、よく目であきれる程完全に見なすものであるものを、まして源氏ほどのお立派なお方をお育てしたのだから、大層面目があつて、なれ親しんでお仕へ申し上げてきた上は、我が身ながら大切にも有がたくも思はれる樣子であるから、そぞろに涙がちである。子供は大そう見苦しいと思つて、己にそむきすてた世が、あきらめがたいやうに、我れと我が身を君から笑止と見られなさる事だ」と、互につつきあひ目くばせをする。

源氏の君は大そうあはれと思はれて、「小さかつた時に、可愛がつて下さる筥の人々が、なくなつておしまひになつたその後を、育てて下さる人は大勢あつたやうですが、親しくなれ睦んだ人としては、あなたより外にはないと思はれました。成人した後は、きまりといふものがありますから、朝夕お目にかかるわけには行きません。心のままに御見舞に向ふことはないけれど、やはり久しくお目にかからない時には、心ぼそく思はれますが、「さらぬ別はなくもがな」と思ふことです」と、ねんごろに仰せになつて、押しぬぐはれる御袖のにほひも、そのあたり狹いまでに匂ひみちたのに、「なるほど思へば世になみたいていでない尼君の御運である」と尼君をじれつたいとおもつてゐた子供は、みな涙をおとしたのであつた。

病氣平癒の御祈禱など、又々はじめるべきことなど、御命令になつて、さておかへりにならうとして、惟光に灯を御命じになつて、さつきの扇をごらんになると、持ちならした移り香がたいそう深くしんでなつかしい感じがして、その扇に面白くなぐさみ書がしてあつた。

心あてにそれかとぞ見る白露の光そへたる夕顔の花

――おしあてに定めて源氏の君ではないかと見る、あの白露によつて一しほ花の光をそへた夕顔の花のやうに美しい人を。

何處ともなげに、かき紛らはした筆蹟も、上品に趣が深いので、まことに豫想外におもしろくお思ひになる。

惟光に、「この西なる家には何人の住むぞ。問ひ聞きたりや」と宣へば例のうるさき御心とは思へども、さはえ申さで、「この五六日こゝに侍れど病者の事を思ひ給へあつかひ侍る程に、隣の事はえ聞き侍らず」など、はしたなげに聞ゆれば、「憎しとこそ思ひたれな。されど、この扇の尋ねまほしき故ありて見ゆるを、なほこのあたりの心知れらん者を召して問へ」と宣へば、入りて、この宿守なる男を呼びて問ひ聞く。「揚名介なりける人の家になむ侍りける。男は田舍にまかりて、女なむ若く事好みて、兄弟など宮仕人にて來通ふ、と申す、くはしき事は、下人のえ知り侍らぬにやあらむ」と聞ゆ。

さらばその宮仕人ななり、したり顔に物なれて言ひつるかなとめざましかるべき際にやあらむと思せど、さして聞えかゝれる心の、憎からず過しがたきぞ例のこのかたには重からぬ御心なめりかし。御疊紙に、いたうあらぬさまに書きかへ給ひて、

寄りてこそそれかとも見めたそがれにほの〴〵見つるはな

の夕顔

ありつる御隨身して遣す。

語釋　○ばうざ――病者、病人。○はしたなげに――河内本には、「はしたなやかに」とある。湖月抄に引いた一本の本文と一致する。無愛憎にの意。○こころ――事情。○このやどもり――この家の留守番の男。○揚名介――伊行釋に「諸國介也、源の人のなる官也」とあり、奥入に「此事源氏第一難義也、非可勘知事、抑往古除目に揚名介あるべし」とあり、契沖は「ただ名のみあげて、まことの介の如く國務を掌る事もなく、權官の如く祿を得る事もなき故なるべし。」と拾遺に言つてゐる。廣道は評釋に於て「ゐなかにまかりてとあれば、任國へ下りたるやうにも聞ゆれど、猶さにはあらず、異事にて田舍へはゆきしなるべし。又案ずるに、なりけるとあるは、過去の辭なれば、さきに揚名介なりし人のまことの介になりて國へ下りたるにてもあらんか」といつてゐる。○事好みて――舊註には好色の意に解す。評釋に「事好むはざれたる事を好む意にや。さて案ずるに、上にこの宿守なる男をよびてとあるを、舊說に揚名介が家の宿守と見られたれど、もしくは惟光が家の宿守にはあらじかとぞ思ふ。さるは入りてこのといふも、隣の家の人をいふやうに聞えぬ上に、ここに事好みてとあるも己が主のことをいふ語とは聞えねば也。猶考ふべし」とあるが如何。事好むは、好色の意ではなく、風流の意である。○みやつかへ人――細流「ここへ來通ふに宮仕する者どもも有也」とある。奉公人。世話人の意。○したりがほに――我れはがほに、でかし顔に。○いへるかなと――評釋に「と」の字衍なるべしとの說がある。「と」はない方がよからう。河内本・古本系統の諸本にはない。○めざましかるべき――岷江入楚に「聞書云、なれ過ぎたるめざましき也。是はかやうの宮仕人などの好色なる物といひかはし給ひては如何なる輕々しき事かあらむと源のおぼす也」とあるのは正しくない。周桂註に「此の女すさまじき程なる際の人にてぞあるらんと推量り給也」とあり、首書に「或抄目にもつかぬほどの品なるものならんと云々」とあるのが正しい。めざましは枕草子にもあるやうに、興ざめる、心外なの意。不調和にて愉快ならざる事にいふ。○きこえかかれる――申上げかかれる。歌をよみかけたるをいふ。○すぐしがたきぞ――そのままにすててておきにくいのは。○このかた――好色の方面。○御たたうがみ――河海抄に「疊紙に歌を書くこと、可勘」とあり、花鳥餘情に「たたう紙に歌書事後撰十九卷の詞にあり」とて證歌を引いてゐる。○いたうあらぬさまに――いたく源氏の手跡とは變りたるさまに。○よりてこそ――古本系統の諸本「をりてこそ」とある。河海抄に「よりてこそ、此五文字をりてこそとかける本あり。さてこそ花を折るにも、又車より下るる心にも通ひたれといふ義もあるか」とある。細流はこれについて、「不用之」といつてゐるが、宣長は「それも惡しからず」と肯定してゐる。○はなの夕顔――古寫本一本に夕がほの花とある。

通釋　源氏の君は、惟光に向つて、「この西隣の家には、どんな人が住んでゐるか、聞いて見た事があるか」と仰せになるので、例の面倒な浮氣心とは思つたけれど、さうは申すことも出來ないので、「この五六日、ここにをりますけれど、病人の看病をいたしてをりますので、隣のことはまだえうけきません」とそつけなく申上げるので、源氏は「にくらしいと思つてゐるのだね。でも、このあふぎの尋ねて見ねばならない仔細があるやうに思はれるから、やはりこの邊りの事情を知つてゐるやうな者を召して問へ」と仰せになると、惟光は西隣の家にはいつて行つて、そこの留守番の男をよび出して、尋ねる。やがて惟光は「あの家は揚名介であつた者の家でございました。『男は田舍

にまゐり、妻は年わかく風流を好みまして、その姉妹などが世話人として、時々來通ひます』と申します。くはしい事は、下人のえう知らないのでございませうか」と申し上げる。

源氏は、「ではその世話人なのだ。出かしがほに、物なれて言つたものだな。どうせ興ざめるやうな分際のものであらう」とお思ひになるけれど、源氏の君と目ざして歌をよみかけて來た心が、憎からずそのまま捨ておかれにくいのが、例によつてこの方面には愼重でない御心であるらしいよ。

源氏は、御懷紙に、大そう御筆蹟とは變つたやうな風におかきかへになつて、

よりてこそそれかとも見めたそがれにほのぼの見つる夕がほの花

——近よつてこそ、たしかにそれとも見極めがつかう。黄昏ごろに、ほのかに見た夕顏の花を、どうして私と分る筈があらう。

さつきの御隨身に命じておつかはしになる。

まだ見ぬ御さまなりけれど、いと著く思ひあてられ給へる御側目を見すぐさで、さし驚かしけるを、御答もなく程經ければ、なまはしたなきに、かくわざとめかしければ、あまへて、いかに聞えむなどいひしろふべかめれど、めざましと思ひて隨身は參りぬ。御前の松明ほのかにて、いと忍びて出で給ふ。半蔀はおろしてけり。隙々より見ゆる火の光、螢よりげにほのかにあはれなり。御志の所には、木立前栽など、なべての所に似ず、いとのどかに心憎く住みなし給へり。うちとけぬ御有樣などの、氣色異なるに、ありつる垣根おもほし出でらるべくもあらずかし。翌朝少し寢過し給ひて、日さし出づる程にいでたまふ。朝けの御姿は、げに人のめで聞えむも理なる御樣なりけり。今日もこの蔀の前わたりし給ふ。來し方も過ぎ給ひけむわたりなれど、たゞはかなき一ふしに御心とゞまりていかなる人の住處ならむとは往來に御目とまり給ひけり。

語釋　○いとしるく思ひあてられ給へる——大そう著しくはつきりと圖星をおさされになつたとの意。らるは受身の助動詞。○そばめ——かたはら目。○さして——名ざして。○なまはしたなきに——何とはなしに工合惡く。○あまえて——圖にのつて。○いひしろふべかめれど——「いひしろふ」は他動四段の動詞。互にいひ合ふ、言ひ爭ふ意。「めれど」は河内本及び古本系統の諸本には「めり」とある。評釋に「この所まぎらはし。（中略）めれどの「ど」は「は」の誤か。もしくは「など」の下に「こそ」の係辭ありて、「めれ」と結びたるを、「と」とうけたるを寫し落せるか。いづれにしてもこのままにてはいかが」といひ、更に「案に御いらへ給はで程へたるがはし

たなきに、又かくわざとがましく御歌を遣はし給はば、女どものあまえあなづりて、如何に聞えんなど、隨身に相談するやうに言ひ騒がんかと隨身は心外に思ひながら行きたりといふ意にやあらん」といひ、「舊說に御返事にあまえて、又歌を參らせんと言ひしろふなりと言ひ、又參りぬとあるをいそぎ歸る也と言へるなどは、共にひがごと也」と言つてゐる。されど、河内本に「べかめり」となつてゐるので、意は自ら通ずる。ここはよろしく本文を改むべきである。○めざまし――心外なこと。細流に「うるさく思ひてかへりまゐりぬる也」とある。○いとしのびて――六條御息所に通はれる路であるからである。○けに――河海抄に「けには勝也」とある。一層。河内本にはこの二字なし。○御心さしの所――源註拾遺に「今案、六條御息所はいつごろ、如何に戀ひそめ給へる由、右に見えず。かやうにうち交へたる文章なり。御心さしの所といふにて、淺からず思ひたまへることと見えたり。」とあり、玉の小櫛に「拾遺に此詞にて淺からず思ひ給へること見えたりといへるはいかが。これはかの御息所の御方へと心ざしておはしますに、その道の間にて大貳の乳母又夕顔などの所の事をいへる故に、御心ざしの所とは言へるにこそあれ」とある。六條御息所の御所は、後に修理して六條院と號し、源氏の御所となつた。○あさけ――朝あけ。朝のねおき姿。河海抄に「わがせこがあさけの姿よく見ずて、今日の間をこひくらすかも。」その他の歌をひく。○ゆききに御目とまり給ひけり――弄花抄に「戀路のならひ、いささかなる事もそくばくの思ひとなる也」とある。

通釋　まだお見かけしないお姿ではあつたけれど、それが源氏の君であることは、御横顔を見ても、大そうはつきりと想像がつくやうな、そんなお姿を見のがさないで、歌をよんで驚かせたのを御返事もなくて時がたつたから、何だか工合がわるいのに、今度はまた、このやうにわざとらしげな御返歌であるから、女たちは圖にのつて「何と御挨拶を申しあげよう」など、お互に言ひ爭つてゐるやうすである。何だ小賢なことだと思つて、隨身はかへつてきてしまつた。

前驅のともす松明の光もほのかで、大そう忍んでお出かけになる。蔀はもうおろしてゐた。戸のすき間からもれる火の光は、螢よりももつとほのかで哀れである。今日行かうとしてをられた六條御息所の御殿には、木立やうゐこみなど普通の所に似ず、大そう長閑に奥ゆかしく住みなしてお出になつた。うちとけない御樣子などの、他人とはまた格別であるのに、さつきのかき根などはもうお思ひ出しになるべくもない。翌朝すこしお休みすごされて、日がさし出る時分にお出かけになる。その朝のお姿は、本當に人がおほめ申し上げるのも當然な御有樣であるのだつた。

今日もかの半蔀の家の前をお通りになる。これまでも度々およぎりになつた場所ではあるが、ほんの一寸した歌の一ふしに御心がとまつて、どうした人の住み家であらうとは往き來の折ごとにお目がおとまりになつた。

惟光は數日たつてから參上して、その後の樣子を報告した。彼の話によると、西隣の家には五月の頃から來てゐる一人の婦人があつて、その人は非常に美人であるとのことで、源氏の氣持は大いに動いた。

以下「惟光日ごろありてまゐれり」から、「心ならずも少しはうつろふことあらむこそ哀なるべけれとさへ思しけり」までを省略する。今その部分の大體の梗概を下にかかげる。

さういふ時にも、源氏はやはりかの空蟬と軒端荻とを忘れることは出來なかつた。その中に空蟬の夫の伊豫介が上洛した。その實着な老人を見るにつけ、源氏は自分の行爲をつくづくと考へざるを得なかつた。今度は空蟬をつれて任國に下るといふ噂さがあるので、

源氏は心が落着かず、小君に相談して見るがその機會がない。女の方でも、源氏の事は忘れないが、今更逢はうとも思はない。

秋になつた。絶間がちの日がつづくので、葵の上や、六條御息所を訪ねた源氏は、霧の深い朝、歸らうとれを源氏は氣の毒に思つた。ある日、六條御息所を訪ねた源氏は、霧の深い朝、歸らうとして、御息所の侍女中將の君の美しさに見とれて、互に和歌の贈答をした。

話は横道にそれたが、惟光は又探索の結果を報告に來た。彼の報告によれば、ある日、頭中將の行列が門前を通つた。その家の女童が「右近の君こそ先づ物見給へ」と一人の年增の女をよんで、前を通る行列の人の名など指しながら見てゐたといふことである。源氏は、頭中將が雨夜の品定の時に話した女がゐるのではないだらうかと疑つた。そして、かういふ程度の女が、馬頭が品評して輕蔑した下の階級の女であらうと思つた。それから後惟光は大いに奔走して、源氏をその女の家に通つて行かれるまでに漕ぎつけた。

女の名もきかず、自分も名乘りをせず、大そう忍んで源氏は熱心に通つた。女は源氏の正體を知らうと思つて色々骨を折つたが、結局分らなかつた。源氏はこの女には全く夢中になつてしまつた。どうしてこんなにひきつけられるのかと不思議に思つた。女の方でも昔住んでゐたお化けの類ではないかと、風變りな氣苦勞をした。源氏はこの女のために評判がたつてもかまはない、二條院に引き取らうかとも考へた。さういふ場合にも、常に、女が頭中將のおもひものではなからうかとの疑は晴れなかつた。

この一段は、源氏物語中の名文といはれてゐる。注意していただきたい。

八月十五夜隈なき月影に、隙多かる板屋のこりなく漏り來て、見ならひ給はぬ住居のさまも珍らしきに、曉近くなりにけるなるべし、隣の家々あやしき賤男の聲々、目さまして、「あはれいと寒しや。今年こそなりはひにも賴む所少く、田舍の通ひも思ひかけねば、いと心ぼそけれ。北殿こそ、聞き給へや」なと言ひかはすも聞ゆ。いと哀なる己がじしの營に、起き出でてそゝめきさわぐも程なきを、女いと恥かしく思ひたり。艶だち氣色ばまむ人は、消えも入りぬべき住居の樣なめりかし。されどのどかに、つらきも憂きも、かたはら痛きことも、思ひ入れたる樣ならで、我がもてなし有樣は、いとあではかに兒めかしくて、またなくらうがはしき隣の用意なさを如何なる事とも聞き知りたる樣ならねば、なか〳〵恥ぢかゞやかむよりは罪免されてぞ見えける。

ごほ〳〵と鳴る神よりも、おどろ〳〵しく踏み轟かす碓の音も

枕上とおぼゆる、あな耳かしがましと、これにぞ思さるゝ。何の響とも聞き入れ給はず、いと怪しう目ざましき音なひとのみ聞き給ふ。くだくだしき事のみ多かり。白栲の衣うつ砧の音も、かすかに此方彼方聞きわたされ、空飛ぶ雁の聲、取り集めて忍びがたき事多かり。端近き御座所なりければ、遣戸を引き開け給ひて、もろともに見出し給ふ。程なき庭にされたる吳竹、前栽の露は、なほかゝる所も同じごときらめきたり。蟲の聲々みだりがはしく、壁の中の蟋蟀だに間遠に聞きならひ給へる、御耳にさしあてたるやうに鳴き亂るゝを、なかなか樣かへて思さるゝも、御志一つの淺からぬに、萬の罪免さるゝなめりかし。

語釋　○のこりなくもりきて――源註拾遺に「君なくて荒れたる宿の板間より月のもるにも袖はぬれけり。六帖」○あやしきしづのを――首書に「或抄、五條わたりは京の中にても末つかたなれば、小家がちにていやしき者どものすむあたりなるべし」とある。○なりはひ――紫明抄に「稔ナリハヒ　農ナリハヒ」とあり、評釋に「なりはひを諸註共に農業ととかれたるは本の意也。されどここは轉りたる末の意にて、ただ家業といふ程の事也。次に田舍のかよひもとあるを思ふに、小商人の上と聞ゆれば、なりはひも商賣のわざなるべし。」とある。○ゐなかのかよひ――岷江入楚に「伊勢物語にゐなかわたらひとあるに同じ」とある。評釋に「京より田舍へゆきて商するをいふ」とある。○きた殿こそ――河内本には「えい」とある。○えんだち――千鳥抄に「麗立と書く」とある。しなをつくるを云ふ。○わがもてなし――自分の態度。○こめかし――湖月抄に「巨めかしく也。大やうなる也」とあるが、「巨」の字をあてることは如何。「子めかし」であらう。子供らしの意である。○くだくだし――うるさき。やかまし。○はぢかがやかす――はづかしがつて赤面する。○ごほ〳〵――湖月抄に「コホコホ稱名院點。ゴホゴホ三光院點」とある。眞淵は古事記に「許遠呂許遠呂」とあるを引いて、コヲコヲとよむべきであるといつた。石川雅望は、「古胡」をのべてコウ〳〵といひならひたるならんかといつてゐる。松井博士の大日本國語辭典には、「こほこほ、なりひびく音にいふ語」「ごほごほ、雷などのなりひびく音にいふ語」として區別してあるが、理由は說明してない。後考をまつ。○からうす――河海抄に「碓カラウス」とあり、評釋に「本居翁云　柄碓の意也。韓碓にはあらずと云はれたり。さもやあらん」とある。○白栲の衣――細流抄に「北斗星前横旅雁、南樓月下擣寒衣」なる劉元叔の詩を引く。この詩は朗詠集にもとられてゐる。評釋に「白栲は白き栲にて下賤の者の衣にせし也。故にことさらにかへ云くる也」とある。○されたる吳竹――明星抄に「枝のゆがみなどしてすぐならぬ竹也。故禪閤仰、ざれたるやり戸口はゆがみよろぼへる心也。この竹はかれたる竹なるべし。やせさらぼひかせたる竹をいふ也。花鳥說非也云々」とある。花鳥餘情に「上にされたる遣戸口とあるに同じ」といつて、しやれたの意に解してゐる。玉の小櫛に「花鳥に上にされたるやり戸口といへると同じとあるよろし」といつてゐる

るやうに、花鳥の說を正しとすべきであらう。○かべの中のきりぎりす――玉の小櫛に「壁の中になくは、屋の中なれば間近きことなるに、それだに間遠にききならひ給へるは、殿の廣くて壁もやや間遠き故也。然るにこの宿は狹き故に、庭になく蟲どもの聲も耳にさしあてて鳴くやうに間近くおぼす也」とある。

通釋　八月十五夜に、隈なく澄んだ月の光が、すき間の多い板屋から、殘りなくもれてきて、まだお見なれなさらない住居の樣も珍らしいのに、曉近くなつたのであらう。隣の家々が目をさまして、妙な聲の男の聲々がする――「ああ、ひどく寒いなあ。ことしこそは稼業も見込がなく、田舍廻りも思ひかけないから、全く心細い。北隣さん、お聞きですかい」など云ひかはすのも聞える。大そうあはれげな、めいめいの活計のために起き出で、ざわつき騷いでゐるのも間近であるのを、女は大そう恥しいこととおもつてゐた。しなをつくつて、氣取つたりするやうな人は、消入つてもしまひさうな、住居の樣らしい。しかし、のんびりとして、つらいことも、いやなことも、きまりのわるいことも、氣にかけた樣子もなく、自分の態度だけは、大そう上品に子供らしくて、またとないほど亂雜なおとなりの不用意さを、何のこととも知つてゐる樣子でないから、はづかしがつて赤面するよりは、却つて罪がないやうに見えた。

ごろごろとなる雷よりも仰山にふみとどろかす唐臼の音も、枕もと近く聞えるやうに思はれる。ああやかましいと、これにはお思ひになる。何の響とも知らず、ただひどく怪しく、不愉快な音とばかりおききになる。白袴の衣をうつ砧の音もかすかに、こちらあちら聞き渡され、空をとぶ雁の聲も、あれやこれや取り集めて、あはれさのこらへ難いことが多い。端近かな御座所であつたから、

遣戸をお引きあけになつて、女君ともろともにお見出しになる。間もなくせまい庭に、しやれた臭竹や、植込の草花の露は、やはりかうした所も、御殿と同じやうにきらめいてゐる。蟲の聲々もみだりがはしく、壁の中に來てなくきりぎりすでさへも、間遠にお聞馴れになつてゐたのに、今は耳にさしあてたやうに泣き亂れるのを、かへつて風變りに珍らしくお思ひになるのも、夕顔に對する愛情一つが淺くないために、すべての缺點が許されるものと見える。

しろき袷薄色のなよゝかなるを重ねて、花やかならぬ姿、いとらうたげにあえかなる心地して、そこと取り立てて勝れたる事もなけれど、細やかにたを〳〵として、物うち言ひたるけはひ、あな心苦しと、たゞいとらうたく見ゆ。心ばみたる方を少し添へたらばと見給ひながら、なほ打解けて見まほしく思さるれば、「いざ、たゞこのわたり近き所に、心安くて明さむ。かくてのみはいと苦しかりけり」と宣へば、「いかでか俄ならむ」と、いとおいらかに言ひて居たり。

この世のみならぬ契などまでたのめ給ふに、うち解くる心ばへ

など、怪しく様かはりて、世馴れたる人とも覺えねば、人の思はむ所もえ憚り給はで、右近を召し出でて、隨身を召させ給ひて、御車引き入れさせ給ふ。このある人々も、かゝる御志の疎ならぬを見知れば、おぼめかしながら頼をかけ聞えたり。明方も近うなりにけり。雞の聲などは聞えで、御嶽精進にやあらむ、唯翁びたる聲に額づくぞ聞ゆる。起居のけはひ堪へがたげに行ふ、いとあはれに、朝の露に異ならぬ世を、何を貪る身の祈にかと聞き給ふに、「南無當來導師」とぞ拜むなる。「かれ聞き給へ。この世とのみは思はざりけり」と、あはれがり給ひて、

優婆塞がおこなふみちをしるべにて來む世もふかき契たがふな

長生殿のふるき例はゆゝしくて、翼をかはさむとは引きかへて、彌勒の世をぞかね給ふ、行先の御たのめ、いとこちたし。

さきの世のちぎり知らるゝ身の憂に行末かねて頼みがたさよ

話釋　○しろき給――古本及び河内本に「白き給に」と「に」の字があるのが正しい。花鳥餘情に「白きあはせの衣に、うす色の上衣をきたるべし」○うす色――官職故實抄に薄色にも織物と染色との二樣あり。染色をまた付色といへり。凡裝束諸抄のならひ、うす色といへるに他の色はあらで必ずうす紫をいふ也。只紫と記せる時は、こき紫と心得てよし。名目抄、薄色經紫韓白」とある。○あえか――周桂註に「はかなき心也」とあり、岷江入楚に「小さくかよわき樣也」とある。○たをたをとして――なよなよとして。○心ばみたる方――細流抄「心ある方也。よしあるをよしばみと言ふが如し。ばみは讀つけ也。今ちと深き用意を加へたきと也。源のよくぼり也」とあり、玉の小櫛に「俗言に氣のあるといふ意と聞ゆ。夕顔の上は無下に氣のなき人なれば也。註當らぬ事也」とある。○心やすくてあかさん――河内本に「心やすく夜をもあかさん」とある。評釋は「夜を」の二字を補入してゐる。河内本・古本の方よく聞ゆ。○苦しかりけり――心苦しい事であつたの意○たのめ給ふ――夕顔にたのませ給ふのである。頼みに思はせなさる。下に彌勒を引き出さんための下構へである。○よなれたる――この「よ」は男女の仲らひについて言へるもの。男にあつた、結婚した。○右近をめし出でて――評釋に「上に右近の君こそ先づ物見給へとのみありて、ここに右近を召し出でてとある、いとくすしき書きざまといふべし。かくてこの女の夕顔の乳母子なる由ははるか下に見えたり。心をつけて見るべし」とある。○ある人々――ここに仕へてゐる人々。○おぼめかしながら――おぼつかなく思ひながらも。○とりの聲々などはきこえで――湖月抄に「などはのはの字ある本になし」とある。山下水に「ての字清濁の事は、の字ある時は濁るべし。はの字をのくる時は清む也」とある。玉の小櫛に「は文字なき本、またて文字清みてよむといへる皆

わろし。下にただおきなびたる聲にぬかづくぞきこゆるといへるにて、島の聲は聞えざることしるきをや」とある。○たちゐのけはひ――評釋に「行法に禮拜の度ありて、立ちては居／＼する事あるも也」とある。○あしたの露――紫明抄に「朝露貧名利、夕陽愛子孫」と白氏文集を引き、河海抄以下皆之にならふ。源註餘滴に「消えぬまの身をも知る知る朝顏の露と爭ふ世をなげくかな」なる玉葉雜四、紫式部の歌をあげてゐる。○御嶽精進――河海抄に「御たけは金峯山也。清少納言枕草子に、あはれなるものは若き男のみたけ精進したる（中略）この外にきびしくへだてなしてひとりゐてうちおこなひたるあかつきのぬかのほどいみじくあはれなり」とあり、湖月抄に「大和の金峯山に千日精進して參ること也」とある。○南無當來導師――南無は歸命、敬禮と譯す。當來は未來將來、導師は衆生を化益する師、彌勒は佛滅後五十六億七千萬年の後にあらはれる。湖月抄に「此禮拜する聲にて御嶽精進と聞知り給ふ也」と舊註を引いてゐるのに對し、玉の小櫛に「註ひがごとなり。此名を唱ふるを聞きて、來世を祈ることを知り給へるにこそあれ」と反對してゐるが、河內本は「みたけさうじにやあらん」の一句前になく、「何のいのりにあらんとききたまふ。みたけさうじなるべし。なもたうらいだらうしとぞおがむなる」とある。これによつて、宣長の說よりも、湖月抄所引の說が大體に於て正しいと見てよからう。○この世とのみは思はざりけり――註釋に「當來の導師といふを聞き給へ。この世とのみは修業者も思はざりけり。來世は必ずあるべきなれば、その來世まで變らぬ契をたがへ給ふなといはんとて、あはれがり給ふ也。上にこの世ならぬ契までたのめ給ふにといへる脉也」とある。○優婆塞――うばそくは俗ながら佛弟子に入れる人。四部弟子（比丘・比丘尼・優婆塞・優婆夷）の一である。涅槃經に善男善女受三歸依一是則名爲三優婆塞一とある。宇津保物語嵯峨院の卷に「うばそくが行ふ山の椎が本あなそは／＼しとこにしあらねば」とある。

通釋　女は白い袷の衣に、薄紫色のなよらかな上着をひきかされて、はなやかでない姿が、大そうかはいらしげに、いたいたしい感じがして、そこがよいと取り立ててすぐれたこともないけれど、細やかになよなよとして、物を云つた樣子、ああいぢらしいと、ただもうひどくかはゆい。もう少し氣のつくといつた點を添へたらばと御らんになりながら、矢張もつとうちとけて見たくお思ひになるので、「さあ、ただこのあたり近い所に行つて、のんびりとして一夜を明かしませう。かうしてばかりゐるのは心苦しいことでした。」と仰せになると、「どうして、あまり急ではございませんか」と、大そう大やうに答へてゐた。

この世ばかりでない、來世かけてのお約束などまでして、女に頼みに思はせなさる中、うちとけて來る心ばへなど、不思議に並々の女とは樣子が變つて、男を知つた人とも思はれないので、他人の思ふだらうことも憚ることがお出來にならないで、右近を召し出して、御隨身をおよばせになつて、御車を引き入れさせなされる。ここにつかへてゐる人々も、かうした御心ざしがおろそかでないのを見知つてゐるから、不安心ながらも、頼みをおかけ申した。

明け方も近くなつた。鷄の聲々などは聞えないで、御嶽精進をする人であらうか、ただ老人らしい聲で、ぬかづいて禮拜してゐるのだけが聞える。立つたり居たりする樣子も、堪へがたげに勤行をする。朝の露と變らぬこのはかない世であるのに、何を貪る身の祈りであらうかとお聞きになる。「南無當來導師」とおがむのである。「あれをおきなさい。この世だけとは思はないのでした。」と

以下「長生殿の古きためしはゆゆしくて」から「息長川と契り給ふより外のことなし」までを省略する。今大體の梗概を下にかかげる。

あはれがられて、
優婆塞が行ふみちをしるべにて來む世もふかきちぎりたがふな
——優婆塞が來世を祈るおつとめを私共二人の道しるべとして、來世にてもこの深い契を違へないで下さい。

源氏は連理比翼といふ詞は不吉であるといふので、彌勒出世の時をかけてかたく契つた。

月がにはかに雲がくれたかはたれ時の闇にまぎれて、源氏は女を車にのせ、右近をつれて附近の荒れはてた別莊に向つた。霧の深い朝で、袖がしつとりとぬれた。別莊について、二人は西の對の家に御座所をつくる間、車の中にまつてゐて、互に和歌をよみあつたりした。

留守番が一生懸命にお世話をする樣子に、この美しい貴公子が源氏の君であらうと、女は想像した。源氏は、しひて人の來ないやうなかくれ家を求めてきたのだから、誰にも知らせるなと、口がためをした。二人とさしむかひに、將來を契つたのであつた。

日たくる程に起き給ひて、格子手づから上げ給ふ。いと痛く荒れて、人目もなく遙々と見渡されて、木立いとうとましく物古りたり。氣近き草木などは殊に見所なく皆秋の野らにて、池も水草に埋もれたれば、いとけうとげになりにける所かな。別納のかたにぞ、曹司などして、人住むべかめれど、此方は離れたり。「氣疎くもなりにける所かな。さりとも鬼なども、我をば見許してむ」と宣ふ。顔はなほ隱し給へれど、女のいとつらしと思ふべけれは、實にかばかりにて隔あらむも、事の樣に違ひたりとおぼして、

夕露に紐とく花は玉鉾のたよりに見えしえにこそありけれ
露の光やいかにと宣へば、後目に見おこせて、
光ありと見し夕顔のうは露はたそかれどきの空目なりけり

とほのかにいふ。をかしと思しなす。實にうちとけ給へる樣世になく、所がらまいてゆゝしきまで見え給ふ。

語釋　○いといたくあれて——評釋に「院中のけしきをあらはしたり。變化第四の脈。はるばるとは前栽の廣きさま也。木立云々は內より見たるけしき也。上なるは門前のさまなり」とある。○秋の野ら——紫明抄に「里はあれて人は古りにし宿なれや庭もまがきも秋の野らなる」といふ古今集秋上の遍昭の歌を引いてゐる。○いとけうとげになりにける所かな——玉の小櫛に「これは下に源氏の君ののたまへる詞よりまがひて寫し誤れる所あるべし。其故は同じ語のつたなく重なれる上

に、ここは地の詞なれば、かななどいふ言あるべき所にあらざれば也。されば、もとはいとけうとげに荒れたりなどぞ有りけんかし」といひ、評釋に「この說の如し。但し荒れたる事は上にもあればいかが也。しばらく「に」文字をもけづりて、けうとげなりとして、さしおく。よき本を得て正すべし。」と云つてゐる。古本系統の本にはこの句があるが、河内本にはない。これは河内本の校訂者が創つたか、さういふ本が傳はつてゐて、それによつたのか不明であるが、結果としては正しい本文となつてゐる。評釋に河海抄を引いて、氣疎（ケウトシ）とあげてゐる。○別納――玉の小櫛に「河海に別に建てたる屋也。別納にて大饗行はれたる事多し。小寢殿なりとあり。細流に雜舍なりとあるはいかが」と云つてゐる。○さりとも鬼なども――評釋に「この語いと妙也。變化第五の脈なるが、自らほこりて招き給へるさまにほのめかされたり」とある。○かほはなほ――花鳥餘情に「狩衣の袖などを覆面にせるにや、又扇などさしかざして半面にはたかくれたるにや、おぼつかなし」とあるが、先きに、車に同車する由が見えてゐるから、扇ではなかつたであらう。○たまぼこの――道の枕言葉。但しここでは道そのものをさす。岷江入楚に、枕言葉を物そのものに用ゐる例、この歌にはじまる由を說いてゐる。○つゆの光やいかに――細流抄に「夕顏を折りし時のことを思ひてのたまへり。心あてにそれかとぞ見る白露の光そへたりとありし光や如何にと也」とある。○そらめなりけり――弄花抄には、あの歌をよんだ時のことをはづかしく思つて、その折は返事に夢中になつて、空目をしたと解してある。細流抄には又の義として、今見るお姿は、前にたそがれ時に空目で見た姿とは比較にもならぬ程美しいとほめた意であると解してゐる。玉の小櫛に「さきに光ありと見しはそら目にてぞありける。今より見れば光はなきものぞとよめる也。さるはあくまで光ありと見ながら、ことさらにさからひて、かくそのうらを云ふこと、このたぐひ今の世にもよくあることと也。」といひ、評釋は「この說いとよろし。諸抄の如くにては、しり目に見おこせてといへる、あざれたるさまにかなはず。さてそのあざれたるををかしくおぼす也」と云つてゐる。從ふべきである。○ましてゆゆしきまで――評釋に「かくあれはてたる所がらにては、光君の姿似つかはしからず、いま〳〵しきまで見え給ふと也。まいては常ざまの所にても此君のさま似つきたる所はあらぬを、まいてといふ意也。ゆゆしきはいま〳〵しきにて變化の見入るることを、その下にふくめたる書ざま也。」とある。但しこの似つかはしからずといふ說はなくてもよいと思ふ。

通釋　日が高くなる頃にお起きになつて、格子を御自分でお上げになる。たいそうひどく荒れて、人影もなく、はるばると見渡されて、木立もひどくいとはしくもの古びてゐる。手近かな草木などは格別見所もなく、何もかも秋の野らになつて、池も水草に埋もれてゐるから、實に恐ろしげになつてしまつた所ではある。離れ家の方に、部屋など作つて人が住んでゐるやうであるが、こちらはそこから離れてゐる。源氏は「氣味わるくもなつてしまつた所だな。でも、いくら何といつても、鬼なども私だけは見逃してくれるだらう」とおほせになる。顏はやはりかくしていらつしやるけれど、女がたいそう無情と思ふであらうから、いかにもこれほど親しくなつて、なほ隔てをおくのはこの際まちがつた仕方であるとお思ひになつて、

夕露にひもとく花は玉ぼこのたよりに見えしえにこそありけれ

――夕露にひもとく花のやうにかくれた顏をあらはすのは、ほんのとほりすがりに見たといふ緣によつてである。

以下「つきせずへだてたまへるつらさに」といふ源氏の詞から、「をこがましき名を取るべきかなと思しめぐらす」といふ所まで省略する。この省略した部分は、夕顔の卷としては非常に重要な部分であり、全卷の氣分が最高潮に達する所であるから、さういふ意味からは省略してはならないのであるが、男女關係の記述が中心となつてゐるので、試驗問題としては、あまり採られさうもないと考へたから省いたのである。その點をよく了解して、一通り他の參考書によつて讀んでおかれることを希望する。今大體の梗概を下にかかげる。

つゆの光はどうでせう」と仰せになると、女は流し目にこちらを見て、

光ありと見し夕顔のうは露はたそがれ時のそら目なりけり

——夕顔のうは露に光があるやうにあなたを美しいと見ましたのは、それはたそがれ時の私の見そこなひでありました。

とほのかにいふ。おもしろいことだとお思ひになる。本當にうちとけていらつしやる御樣子は世に比類なく美しく、場所がらだけにまして氣味がわるいほどにお見えになる。

惟光がそこに尋ねてきて、色々お世話をする。夜になつたので燈火をつけて、源氏と夕顔とは色々な話をする。源氏は、六條御息所のことなど思ひ出して、氣の毒にも思ふ。

宵がすぎたころ、源氏がうとうとまどろんだと思ふと、美しい女が枕もとにあらはれてうらみごとをいひ、そばにねてゐる夕顔をかき起さうとする。源氏はおどろいて起きて太刀をぬいて右近をおこし、自ら渡殿に出て宿直人をおこす。そこには別莊守の子と、殿上童と、隨身とがゐるだけであつた。隨身は弓づるをならしながら警戒し、別莊守の子が灯をもつて來る。灯にてらして見ると、夕顔はもう息が絶えて正體がない。又してもさつきの幻の女があらはれて消えた。源氏は昔紫宸殿の鬼が何とかといふ大臣をおどかした例を思ひ出して、まさか命に別狀はあるまいと思ふが、女は益々冷え入つて、死相もあらはれて來る。惟光も丁度今夜にかぎつて不在なので、兄の阿闍梨と一緒に來るやうに迎ひにやる。夜半の院は荒涼として鬼氣人にせまる。源氏はつくづくと自分の行爲を後悔する。

やつとの事で惟光が參つた。兄の阿闍梨にも來てくれと云つてやつたのに、來ないのはどうしたかときくと、あひにく叡山にかへつて行つたあとですと答へる。萬事工合がわるい。とにかくこの別莊を出られるやうにおすすめする。惟光の知つてゐる東山の尼君のところに死骸を運ぶこととし、右近と共にそこに向ふ。源氏は馬にのつて二條院にかへる。かへつても色々のことが氣になつて苦しい。

日が高くなつても源氏の君はおきない。左大臣の君達が勅使としてお見舞に來る。源氏は頭中將だけをよんで、父帝への御言傳を申上げる。

日暮れて惟光參れり。かゝる穢ありと宣ひて、參る人人も皆立ちながらまかんづれば、人しげからず。召し寄せて「いかにぞ。今はと見はてつや」と宣ふまゝに、袖を御顏に押し當てて泣き給ふ。惟光も泣く〳〵「今は限にこそはものし給ふめれ。長々と籠り侍らむも便なきを、明日なむ日よろしく侍ればとかくの事、いと尊き老僧のあひ知りて侍るに、いひ語らひつけ侍りぬる」と聞ゆ。「添ひ

たりつる女はいかに」と宣へば、「それなむまた、え生くまじう侍る
める、我も後れじと惑ひ侍りて、今朝は谷にも落ち入りぬべくなむ
見給へつる。かの故郷の人に告げ遣らむと申せど、暫し思ひ靜め
よ、ことの樣思ひ廻らしてとなむこしらへ置き侍りつる」と、語り聞
ゆるまゝに、いといみじと思して、「我もいと心地なやましく、如何
なるべきにかとなむ覺ゆる」と宣ふ。「何かさらに思ほし物せさせ
給ふ。さるべきにこそよろづの事侍らめ。人にも漏さじと思ひ
給ふれば、惟光おり立ちて、よろづはものし侍る」など申す。「さかし。
さみな思ひなせど、浮びたる心のすさびに人をいたづらになしつ
る、かごと負ひぬべきがいと辛きなり。少將の命婦などにも聞か
すな。尼君ましてかやうの事などいさめらるゝを、恥かしくなむ
覺ゆべき」と、口がため給ふ。「さらぬ法師ばらなどにも、皆いひなす
樣異に侍り」と聞ゆるにぞかゝり給へる。

ほの聞く女房など、怪しく何事ならむ、穢のよし宣ひて、内裏にも

參り給はず、またかく私語き歎き給ふと、ほのぼの怪しがる。さら
に事なくしなせと、そのほどの作法宣へど、「何か、ことごとしくす
べきにも侍らず」とて立つがいと悲しく思さるれば、「便なしと思
ふべけれど、今一度かの屍骸を見ざらむがいといぶせかるべきを、
馬にてものせむ」と宣ふをいとたいだいしき事とは思へど、「さ思
されむはいかがせむ。早おはしまして、夜更けぬさきに歸らせお
はしませ」と申せば、この頃の御やつれに設け給へる、狩の御裝束著
かへなどして出で給ふ。

語釋　○いまはと見はてつや――今はかぎりと見きはめたかの意。○谷にも落ち入りぬべく――
花鳥餘情に「右折悲しみのあまりに谷に身をなげんの心也」とある。○ふる里――なじみの所。五
條の宿をさす。○こしらへ――なだめ、すかし。○おりたちて――評釋に「此詞は其の事を人にま
かせずして、みづからいたづくをいふ。本は馬船などよりおり立ちて、手づからその事をとりて、
いたづく意より出でたるなるべし」といつてゐる。○さらぬ――何もかかはりのない、一般のの意。
○更に――宜へどにかかる。しかし河内本では「さらはともかくもことなくしなせ」とつづいてゐ
る。「さらに」は「さらば」の誤寫と解し、これから源氏の詞と見るのがよいではないかと思ふ。

○何か――いやなに。そんなことはない。何でといふやうな意。○この頃の御やつれに――夕顔の宿へのおしのび用としての意。○あやふかりし物ごりに――評釋に「前の夜の變化の事にこり給ひて、いかにせんとたゆたひ給ひながら、猶悲しさに堪へで出立ち給ふ也」とある。

通釋　日が暮れてから惟光が參つた。かうした職があると仰せになつて、參る人も皆立つたまで退出するので、御前には人は多くゐない。よびよせて「どうだ。もうだめだと見きはめたか」と仰せになると同時に、袖をお顔におしあててお泣きになる。惟光も泣く〳〵、「もう最後でいらつしやる樣子でございます。長々と死骸を尼寺にこめておきませうのも不都合なことでございますから、丁度明日はよい日柄でございますから、葬式のことを、大へん尊い老僧の知り合ひがございます、その人に、相談をしてたのんでおきました」と申し上げる。「附添うてゐた女はどうした」と仰せになると、「それがまた、とても生きさうもない有樣でございます。『自分も一緒に死ぬ』とさわぎまして、今朝などは谷にも身投げしてしまひさうに見えました。『あのもとの五條の家の人に告げにやらう』と申しますけれど、『まあ、しばらくぢつと落着いてくれ。前後の事情を考へめぐらして』と、さうなだめて置きました」とお話しするままに、源氏の君は大そう悲しく思はれて、「私もひどく氣分が苦しく、どうなる事かと思ふ」とおほせになる。惟光は「今更、何でそんなに御心配になる事がございませう。萬事は左樣な運命なのでございませう。誰にも祕密をもらすまいと存じますればこそ、かうして私が一人で手を下して萬事始末をしてゐるのでございます」などと申上げる。源氏は、「全くさうだ。さうはよく思つてはゐるけれど、浮氣心のきまぐれから、人一人の命を無にしたといふ恨みを受けなければならないのがつらいのだ。少將の命婦なども聞かせるな。尼君はましてかやうなことなどやかましく仰る、だから私ははづかしく思ふ」と口どめをなされる。惟光が「一向無關係な法師たちなどにも、みな說明のしやうをちがへてをります」と申上げるのに、頼つて安心していらした。

かうしたささやきを、はしばし耳にする女房などは、「不思議なことだ、何事だらう。觸穢だと仰せになつて、參内もなさらない、又かうしてひそひそ話し合つてお嘆きなさる」と、うすうすあやしがる。「では間違のないやうにやつてくれ」と、今更お葬式の場合の作法を仰るけれど、「いや、どういたしまして、何でさう仰々しくやることがございませう」といつて立ち去るのが、大そう悲しく思召されるので、源氏は「不都合なことと思ふだらうが、もう一度あの死骸を見ないのが大層氣にかかるから、馬で行かう」と仰せになるのを、惟光はだらしのないことだとは思ふけれど「さう思召されるのでしたら致方もございませぬ。早くお出でになりまして、夜の更けない先きにお歸り遊ばせ」と申すので、この頃の御忍びあるきの爲にお作りになつた狩衣にお着かへになつて、お出になる。

御心かきくらし、いみじく堪へ難ければ、かく怪しき道に出で立ちても、危ふかりし物懲に、いかにせむと思し煩へど、猶悲しさのやる方なく、ただ今の骸を見では、またいつの世にかありし容貌をも見む、とおぼし念じて、例の大夫隨身を具して出で給ふ。路遠く覺

ゆ。十七日の月さし出でて河原のほど、御前の火もほのかなるに、鳥部野のかたなど見やりたるほどなど、物むつかしきも、何とも覺え給はず、搔き亂る心地し給ひて、おはしつきぬ。あたりさへ凄きに、板屋の傍に堂建てて行へる尼の住居、いとあはれなり。御燈明の影ほのかに透きて見ゆ。その屋には女一人泣く聲のみして、外の方に、法師ばらの二三人物語しつゝ、わざとの聲立てぬ念佛ぞする。寺夕の初夜も皆行ひはててて、いとしめやかなり。清水の方ぞ光多く見えて人のけはひも繁かりける。この尼君の子なる大德の、聲たふとくて經うち讀みたるに、涙殘りなく思さる。入り給へれば、火取り背けて、右近は屏風へだてて臥したり。いかに侘しからむと見給ふ。恐ろしき氣も覺えず、いとらうたげなる樣して、まだいさゝか變りたる所なし。手を捉へて、「我に今一度聲をだに聞かせ給へ。いかなる昔の契にかありけむ、暫しの程に心を盡してあはれに覺えしを、うち捨てて惑はし給ふがいみじき事」と、聲を惜まず泣き給ふ事限なし。大德たちも、誰とは知らぬに、怪しと思ひて皆涙おとしけり。

語釋　○危ふかりし物ごりに――評釋に「前の夜の變化のことにこり給ひて、いかにせんとたゆたひ給ひながら、猶悲しさに堪へで出立給ふ也」とある。○例の――出で給ふにかかる。例の如くの意。○わざとの聲たてぬ念佛――常のやうに大聲をたてない低聲の念佛。新釋に「大方は聲を高く佛の御名を唱ふるを、こはいとつぶつぶと唱ふるをいふならん。一向に無言念佛にはあらじ。さてはいかにとも知られじ」とある。○初夜――六時のつとめの一。六時とは、晨朝、日中、日殘、初夜、中夜、後夜をいふ。○大德――高德の僧。一般に僧のことをさす。○聲尊くて――聲を尊くしての意ではなく、聲が尊くて、尊き聲にての意。○火とりそむけて――この所、河内本及び古本系統の諸本とは本文大いに異る。河内本には「いりたまへれば、ひやうぶひきつぼねてほのぐらきに、うしろのかたにぞ右近はふしたる」とある。古本系統もほぼこれに同じ。死人の方には灯をむけず、屏風をへだて、灯のある方に右近が臥したのである。○聲をだに――他のことはともかく、せめてこゑだけなりとも聞かせ給への意。○誰とは知らぬに――死にたる人が夕顔の君とも、又ここに來てゐる人が源氏の君とも、一向知らないのにの意。

通釋　御心が眞暗になつて、非常にこらへにくいから、かうした變な路に出て行くにつけても、あぶなかつた昨夜のことに懲りて、どうしようかと心配されるけれど、やはり悲しさの慰めやうがなくて、今の中に死骸を見ないでは、又いつの世に昔ながらの容姿を見ることが出來ようと、おそ

ろしさをこらへて、例のやうに大夫と隨身とをつれてお出かけになる。路が遠く感ぜられる。

十七日の月がさし出て、加茂の河原のあたり、前驅の松明の火もほのかであるのに、鳥部野の方など見やつた時など、いつもなら氣味がわるいのを、今夜は何ともお感じにならないで、胸をかき亂すやうなお心持でおつきになつた。そのあたりまで物すごいのに、板屋の傍でお堂をたてて勤行をしてゐる尼の住居は、まことにあはれである。御燈明の影がほの暗く透間から見える。その家には、女一人泣く聲ばかり聞えて、端の方で法師たちが二三人物語をしながら、ことさら低い聲の念佛をする。寺々の初夜の勤行もみな行ひ終つて、大そうひつそりとしてゐる。清水の方だけには光が澤山見えて、人のかげも多かつた。この尼君の子の大德の聲尊く經をよんでゐるのをお聞きになつて、源氏は涙も殘りなく出るやうに思はれる。この家におはいりになると、灯をあちらにむけて、死骸との間に屏風をへだてて、右近は臥してゐた。どんなにつらいことだらうとごらんになる。死骸はおそろしいといふけはひもせず、大そうかはいい樣子で、まだ少しも變つた所はない。手をおとりになつて、「私にもう一度だけ、せめて聲なりとも聞かせて下さい。どうした前世の緣であつたらう、一寸した間に、心のありたけを盡して、かはいいと思つたのに、私一人あとにのこして、途方に暮れさせなさるのが、ひどくつらいことです」と、聲もをしまず、限りもなくお泣きになる。僧達も、これ等の方々がどなたであるとも知らないのに、不思議なことだと思つて、皆同情の涙を落した。

右近を、「いざ二條の院へ」と宣へど、「年ごろ幼く侍りしより、片時立ち離れ奉らず馴れ聞えつる人に、俄に別れ奉りて、何處にか歸り侍らむ。如何になり給ひにきとか人にもいひ侍らむ。悲しき事をばさるものにて、人にいひ騷がれ侍らむがいみじき事」といひて、泣き惑ひて、「煙にたぐひて慕ひ參りなむ」といふ。「理なれど、さなむ世の中はある。別といふものの悲しからぬはなし。とあるもかゝるも、同じ命の限あるものになむある。思ひ慰めて、我を賴め」と、宣ひこしらへても、「かくいふ我が身こそは、生き留るまじき心地すれ」と、宣ふも賴もしげなしや。惟光、「夜は明方になり侍りぬらむ。はや歸らせ給ひなむ」と聞ゆれば、顧みのみせられて、胸もつと塞がりて出で給ふ。

路いと露けきに、いとどしき朝霧に、何處ともなく惑ふ心地し給ふ。ありしながらうち臥したりつる樣、うち交し給へりし、我が紅の御衣の著られたりつるなど、いかなりけむ契にかと、道すがら思さる。御馬にも、はかばかしく乘り給ふまじき御樣なれば、また惟

光添ひ扶けておはしまさするに、堤の程にて馬より滑り下りて、いみじく御心地惑ひければ、「かゝる路の空にて、はふれぬべきにやあらむ。さらにえ行き着くまじき心地なむする」と宣ふに、惟光も心地惑ひて、我がはかばかしくば、さ宣ふとも、かゝる道に率て出で奉るべきかは、と思ふにいと心あわただしければ、川の水にて手を洗ひて、清水の観音を念じ奉りても、術なく思ひ惑ふ。君も強ひて御心を起して、心のうちに佛を念じ給ひて、またとかく助けられ給ひてなむ二條の院へ歸り給ひける。怪しう夜深き御歩行を、人々「見苦しきわざかな。この頃、例よりもしづ心地なき御忍歩行のうちしきる中にも、昨日の御氣色のいと惱ましう思したりしには、いかでかく辿り歩き給ふらむ」と歎きあへり。

語釋　○さるものにて――玉の小櫛に「悲しき事はいふもさらなれば、それはそれとして」。○煙にたぐひて――煙につき添うて、つきまとうての意。○さなむ世の中はある――玉の小櫛に「世の中といふものは、さやうに頼みに思ふ人に思ひかけず俄に別るるやうのことも、常に多くあるならひぞと也」とある。○とあるもかかるも――玉の小櫛に「世の常のやうに病みて死するなども、又夕顔の如く、思ひかけぬことにて俄に死するも、その別のやうはさまざま變れども、何れも皆定まれる命の限りあるものにて別るるなれば、畢竟は同じことぞと也」とある。定命のこと。○うちかはし給へりし――玉の小櫛に「すべてかはすとは、互に相交ふるをいひて、衣を打交すは、寢たる時、男女互に打掛けまじへ着る也、さればここは河原院にて、夕顔と寢給ひたりし時、互にまじへ給へりし源氏の君の、御衣の夕顔の死骸の方につきて、そのままにてあるを見給へる也云々」とある。○堤――契沖の説に「兼輔を堤中納言とひ、大和物語に監命婦の堤なる家を賣りてとあり。所の名也」とある。○はふれ――契沖の如く、死ぬこと、横死といふ意に解する説もある。はふるといふ語は、自動下二段の動詞で、さすらふ、さまよふ、漂浪するの意。どちらにも行けなくなるの意。○昨日の御氣色の――評釋に「昨日なやましくし給ひし御氣色なりしに、かく忍びありきし給ふは、いかなる事ぞと嘆きあへる也」とある。

通釋　右近を「さあ二條院へ」とおさそひになるけれども、右近は「長い年月の間、幼少の折から、片時もお側をお離れ申さず、お馴れ申したお方に、俄にお別れ申して、今更、どこに歸りませうか。どうおなり遊ばしたと人にも話しませう。悲しいことは申すまでもございませんから、それはさておきまして、人にとやかく言ひ騒がれませうのが、ひどくつらうございます」といつて泣き迷つて、「火葬の煙につき添うて、みあとを慕つてまゐりませう」といふ。源氏は、「それは尤もだけれど、世の中といふものはさうしたものだ。別れといふものの悲しくないものはない。ああした死に方をするのも、かうした死に方をするのも、どれも定命なのだ。あきらめて私を頼りとする

以下「まことに臥したまひぬるままに」から「かしこになむときこゆ」までを省略する。今この部分の梗概を下にかかげる。

がよい」となだめて仰つても、又「かう言ふ自分の身こそ、とても生き永へてをれさうもない氣がする」と仰せになるのも、頼もしげのない事であるよ。惟光は「夜は明方になりましたでせう。もうお歸り遊ばしませ」と申上げると、源氏は、後ろばかり振りむかれ、胸もぐつとつまつて、お出かけになる。

路が大そう露つぽい上に、ひどい朝ぎりで、何處へともなく惑ふやうな心地がなさる。昔のままでねてゐた樣子、あの院で互に交はし合つた御自分の紅の御衣の着せてあつたことなど、思ひ出されて、まあどうした前世の因緣であらうかと、道中思召される。御馬にもはきはきとお乘りになれさうもない御樣子なので、又惟光がおたすけして歸らせ奉るのに、堤といふ所のあたりで、馬から滑るやうに下りてきて、ひどく御氣分が惡くなつてきたので、「かうした道中でどこにも行けなくなつてしまふのであらうか。とても二條院へは行きつけさうもないやうな氣持がする」と仰せになるので、惟光も動搖して、自分がはきはきしてゐたならば、そのやうに仰せになつても、こんな道におつれ申すべきであらうかと思ふにつけて、大そう心がおどおどするけれども、川の水で手を洗つて、清水の觀音を念じ奉つても、何のすべもなく途方にくれる。源氏の君も強ひて御心を起して、心のうちに佛を祈念せられて、又種々助けられなされて、二條院におかへりになつた。不思議にも夜深い御忍びあるきを、人々は、「見ぐるしいことだなあ。この頃はいつもよりも落つきのない御忍びあるきのしきりにつづく中でも、昨日の御氣分が、ひどくお惡さうにしていらしたにもかかはらず、どうしてこんなに氣まぐれな歩きをなさるのだらう」と歎き合つた。

源氏は本當の病氣になつて床につかれ、主上を始め天下の歎きとなつた。源氏は右近を親切に面倒を見てやり、右近もほどなく人々と馴染むやうになつた。左大臣も心配して、百方源氏の世話をした甲斐があつて、二十餘日の間、ひどく苦しんだけれど、全快した。死穢と病氣とが同じ日に果てたその日、源氏は主上の御心のもつたいなさに、參内した。

九月二十日頃全快した。ある長閑な夕暮に右近を召しよせて、夕顔の素性を尋ねた。右近の話によると、夕顔は、三位中將の娘で、父に早く死別し、ふとした機會に頭中將が少將であつた時に見そめられて、二人の間に女の子さへまうけたが、中將の北の方四の君の方から恐ろしい小言が出てきたのにおぢて、一旦西の京にかくれ、更に方違のために五條の家にきてゐる所を源氏に見出されたのであるといふ。源氏はその子供を引きとつて世話をしたいと右近に話したりする。

夕暮のしづかなるに、空の氣色いとあはれに、御前の前栽かれがれに、蟲の音も鳴きかれて、紅葉のやう〳〵色づくほど、繪に書きたるやうに面白きを見渡して、心より外にをかしき交らひかなと、かの夕顔のやどりを思ひ出づるも恥かし。竹の中に家鴿（いへばと）といふ鳥の、ふつゝかに鳴くを聞き給ひて、彼のありし院に、この鳥の鳴きしを、いと恐しと思ひたりし樣の、面影にらうたくおもほし出でらる

れば、「年はいくつにかものし給ひし。怪しう、世の人に似ずあえかに見え給ひしも、かく長かるまじくてなりけり」と宣ふ。

「十九にやなり給ひけむ。右近は、なくなりにける御乳母の乗て置きて侍りければ、三位の君のらうたがり給ひて、かの御あたり去らず、生ふしたて給ひしを思ひ給へ出づれば、いかでか世に侍らむとすらむ。いとしも人にと悔しうなむ。物はかなげに物し給ひし人の御心を、たのもしき人にて、年頃馴ひ侍りける事」と聞ゆ。「はかなびたるこそ女はらうたけれ。かしこく人に靡かぬ、いと心づきなきわざなり。自らはかばかしくすくよかならぬ心ならひに、女は唯柔和にて、とりはづしては、人に欺かれぬべきが、さすがに物づつみし、見む人の心には従はむなむ哀れにて、我が心のまゝにとり直して見むに、なつかしく覚ゆべき」など宣へば、「この方の御好にはもてはなれ給はざりけりと、思ひ給ふるにも、口惜しく侍るわざかな」とて泣く。空のうち曇りて、風冷やかなるに、いといたくう

ちながめ給ひて、

見し人のけぶりを雲とながむればゆふべの空もむつまじきかな

とひとりごち給へど、えさしいらへも聞えず。かやうにておはせましかばと思ふにも、胸のみふたがりておぼゆ。耳かしがましかりし砧の音を、思し出づるさへ戀しくて、「まさに長き夜」とうち誦じて臥し給へり。

語釋　○御前の前栽――二條院の庭である。○紅葉のやうやう色づく――紫式部日記の巻頭の一文と比べられたい。○家鵠――山鵠ではないかといふ説がある。○かのありし院――前に見えた河原院。あれはてたる別荘。○この鳥のなきしを――前に院の有様を叙した時、作者は梟のなくことは書いたけれど、家鵠のことは書かなかつた。ここではじめて家鵠のことをあげたのも、又一法であらうと古人は云つてゐる。○面影に――幻の如く眼前にちらつくのである。○あえかに――はかなげに、弱々しげに。帚木の巻に「拾はば消えなんと見ゆる玉笹の上のあられなどのえんにあえかなる」とある。○三位の君――三位の中將。夕顔の父。○かの御あたり――三位中將の側とも、夕顔の側とも、又この兩人の側とも解せられてゐる。○いとしも人に――拾遺集戀四に「思ふとていとしも人に馴れざらむしかならひてぞ見ねば戀しき」とあるのを引いたのである。○ならひ侍りけ

る――右の引歌にしかならひてぞとある。○はかなびたるこそ――孟津抄に「右近が前の詞に、物はかなげに物し給ひし人といひし詞に付て、女ははかなびたるこそよけれと源の宣ひし也」とある。○心づきなし――氣にくはぬ。○とりはづしては――どうかすると、わるくすると。○あざむかれぬべきが――だまされてしまひさうなのが。○このかたの御好み――この方面の御趣味。○見し人の煙を雲とながむれば――齋宮女御集に「見し人の雲となりにし空なれば降る雪さへもめづらしきかな」とある。この歌を心において作られたものであらう。源註拾遺に「今案、異本にむつかしきとあるは寫し誤れるなるべし。新古今哀傷に同じ人の歌に、見し人の煙になし夕べより名ぞむつまじき鹽がまの浦。之を考合て思ふべし」とある。紫式部が、夫宣孝の死を悲しんだその心を、直ちに夕顔を失つた源氏の悲しみとなし、右の一首を得たものであらう。かく考へると、この歌は源氏物語の成立年時の考證に、何等かの證據たり得るかも知れない。○まさに長き夜――源氏釋に「八月九月正長夜、千聲萬聲無止時」といふ白氏文集の一句をあげてから、奥入以下の諸註みなこれに從ふ。

通釋　夕暮が靜かである上に、空の景色も大そうあはれで、御庭さきの植込みはかれがれとなり、蟲の音もなきかれて、紅葉が段々と色づく有樣は、繪に書いたやうに面白い。その景色を右近は見渡して、豫想もしなかつた風流な生活であるよと、あの夕顔の宿を思ひ出すにつけても氣はづかしい。竹の中に家鵠といふ鳥が、無骨になくのをお聞きになつて、あの河原院で、この鳥がないたのを、大そうおそろしいと思つてゐた樣子が、幻のやうに眼前にかはゆらしくお思ひ出されになつたので、「年はいくつでした。不思議に世の人に似ず、かよわげにお見えになつたのも、さてはこのやうに長生をなさるまいからであつたよ」と仰せになる。

右近は「十九にかおなりでいらつしやいました。私は故人になりました乳母が、この世に拾てて行きましたみなし子でございましたので、御父君の三位の君が、お可愛がりになりまして、そのお側を離さずお育て下さいました、その御恩を思ひ出しますと、どうして姫君のいらつしやらない後に生きて行く氣になれませう。古歌の「いとしも人に」と悔しいことでございます。物はかなげにいらした姫君の御心を、頼もしい人として、長の年月をおなじみ申してをりました事でございます」と申し上げる。源氏は「その頼りなげなのが女としてはかはいいのです。かしこぶつて、容易に人になびかないのは、實に氣にくはぬことです。私自身がはきはきして、がつちりしてゐない習慣から、女はただ柔和で、どうかすると他人にあざむかれてしまひさうなのが、さすがに物づつみをし、夫の心に從ふやうなのが、あはれで、わが心のままに取直して見ようのに、なつかしく思はれるであらう」など仰せになると、右近は「此の方面のお趣味におそむきでいらつしやいませんでしたことと思ひますにつけて、今更何としても殘念なことでございます」といつて泣く。

空がうち曇つて、風が冷やかなのに、大そうひどく物思ひにお沈みになつて、

見し人の煙を雲とながむれば夕べの空もむつまじきかな

――親しい人を燒いた火葬の煙を雲と思つて眺めると夕べの空も何とはなしにむつまじいことであるよ。

と、ひとりごとを仰せになるけれど、右近は悲しみのあまり、御返歌もえう申し上げない。姫君が今の自分のやうにしてここにお出でになつたならば、どんなによからうと思ふにつけても、胸ばか

以下「かの伊豫の家の小君參る折あれど」から「又もあだ名は立ちぬべき御心のすさびなめり」まで省略。今省略の部分の梗概を下にかかげる。

り一つぱいになるやうな氣がする。耳にやかましかつた砧の音をお思ひ出しになるのさへ戀しくて、「まさに長き夜」と口ずさんでお臥しになつた。

伊豫介の家の小君が參上することがあるが、昔のやうな言傳もなさらないので、もうすつかりいやだと思つておしまひになつたのかと、空蟬は淋しく思ひ、ある時、試みに一首の歌をお見舞狀の奥に書いて源氏に上つた。源氏からもねんごろな返歌が遣はされる。

源氏は又あの軒端荻が、藏人の少將を通はしてゐるとの評判をきいて、ここにも手紙をつかはす。軒端荻からも、ただ早いといふのを取得に、返事が來る。これ等の婦人をなほにくからず思ひ、またしてもあだ名は立ちさうな始末である。

かの人の四十九日、忍びて比叡の法華堂にて、事そがず、裝束より始めて、さるべきものども細に、誦經などせさせ給ふ。經佛のかざりまで疎ならず。惟光が兄の阿闍梨、いと尊き人にて、二なうしけり。御文の師にてむつまじくおぼす文章博士召して、願文作らせ給ふ。その人となくて、あはれと思ひし人のはかなき樣になりにたるを、阿彌陀佛にゆづり聞ゆるよし、哀げに書き出で給へれば、唯斯くながら、加ふべきこと侍らざめり」と申す。忍び給へれど、御涙もこぼれて、いみじく思したれば、「何人ならむ。その人とは聞えもなくて、かう思し歎かすばかりなりけむ、宿世のたかさよ」と言ひけり。

忍びて調せさせ給へりける裝束の袴を取り寄せ給ひて、

泣く〳〵も今日は我が結ふ下紐をいづれの世にかとけて見るべき

この程まではたとよふなるを、いづれの道に定まりて赴くらむと、思ほしやりつつ、念誦をいと哀にし給ふ。

語釋　○四十九日――「ななぬか」とも「しじふくにち」とも兩方によまれる。細流抄に「いづくにても訓によむべし」とあり、紹巴抄に「ななぬかとよむべし」と云つてゐる。しかし、契沖は、「今案拾遺集に、藤原輔相が四十九日を晉に擬題によめる歌もあれば只晉然るべきか」と云つてゐる。拾遺集の歌は、「秋風のよもの山よりおのがじしふくにちりぬるもみぢかなしも」である。花鳥餘情に「十月四五日の間、四十九日にあたる也」とある。○法華堂――河海抄に「在二止觀院西一」とある。○さうぞくよりはじめて――評釋に「法師に布施する裝束よりはじめて、然るべき

以下「伊豫介、神無月のついたち頃に下る」から「なほかく人知れぬ事は苦しかりけり」と思し知りぬらむかし」まで省略する。今その部分の梗概を下にかかげる。

最後の段は、帚木の巻の巻頭なる「光源氏名のみことごとしう、いひけたれ給ふとが多かなるに、いとどかかるすきごとどもを、末の世にも聞き傳へて、かろびたる名をや流さむと、忍び給ひけるかくろへごとをさへ、語り傳へけむ人の物いひさがなさよ。さるはいといたく世をばばかり、まめ立ち給ひける程に、なよびかにをかしきことはなくて、交野の少將には笑はれ給ひけむかし」とあるのに、物金銀諸具を省略せず、沙汰してつかはし給ふ也。經佛のかざりは、經卷の軸表紙佛像の莊嚴などをいふなるべし」とある。○もんざうはかせ――官職故實祕抄に「文章博士は令外の官なり。大學寮被接官にして、神龜五年七月廿一日に始めて置かる。」とある。○願文――佛への願意をしたためた文書。玉の小櫛補遺に「草稿を書きて見せ給ひて、此趣にてさりぬべく取りつくろひしたたむべき由仰せらるるをいふ也。下にただかくながら云々と有にてしるべし」とある。○阿彌陀佛にゆづり――玉の小櫛に「此世にてはわがあひ見し人なるを、今は極樂へやりて阿彌陀佛を賴み奉るといふ意也」とある。○しのびて――この語は「取寄せ給ひて」にかかるやうに設く人もあるが、私は「調ぜさせ」にかかると解しておく。從つて裝束は布施の裝束ではなくて、微行の時に用ゐる狩衣のことと解することになる。○なくなくも――山下水に「けふは結緣の功德をもつて、いづれの時か共に解脫の門に入るべきとなり。」とある。玉の小櫛に「とけて見るべきは、うちとけて逢見るべき也。注に解脫の義といへるはかなはず」とある。眞淵は、「本は旅などに行く夫の紐をば妻の結びて又あふ時解かんなどいふ意の歌萬葉集に多し。然るを是はみまかれる女のぬの布施のさうぞくの紐なれば、わがゆふ云々とよみたまへり。さてこれも今かくゆふ紐を、われもこんよとなりて、いづれのよにか夕顏と解きて夫婦となりてあらんと、先づ夫婦の上にていひて、且解脫の門に入るべき願をもそへたるなるべし」と云つてゐる。○このほどまでは――山下水に「四十九日の間は、中有にただよふ義也。しかれば其識の生處六道の輪廻いまだ定まらず、仍て造佛造經等の善根を修して善果を得せしめんと也。中陰經の設也」とある。

通釋　かの人の四十九日の法事を、こつそりと比叡の法華堂で營まれる。萬事省かず、布施の裝束をはじめとして、然るべき品々を、尊美を期してなされ、又誦經なども遊ばされる。經卷や佛像の飾りまで、粗略でない。惟光の兄の阿闍梨が、大そう尊い僧で、ならびなく立派にした。漢詩の師で、睦じく思召される文章博士をおよびになつて、願文をお作りになる。その人が誰だとは明かにしないで、ただ可愛いと思つてゐた人がはかなくなつたのについては、阿彌陀佛のお手におまかせ申すといふ趣を、あはれげにお書き出しになつたので、「ただこのままで、これ以上何も附け加へるべき事はないやうでございます」と申しあげる。源氏の君は、ぢつとこちへてお出でになるけれど、御涙もこぼれて、ひどく悲しいと思召されたので、人々は「その佛とは一體誰だらう。誰とも評判はなくて、かうして源氏の君をお嘆かせ申すほどの宿運の高さよ」と言つた。

源氏はこつそりとお作りになつた裝束の袴をおとりよせになつて、

泣く〳〵も今日はわが結ふ下紐を何れの世にか解けて見るべき

――泣く泣くけふ結ぶ下紐を解くやうに、いつの日に再びうちとけてあひ見ることが出來るであらう。

まだこの頃までは、魂魄は中有の空に漂ふものであるが、いよいよ今日は、六道の中のどの道に定まつて行くことであらうかとお思ひやりになりながら、御念誦を大そうあはれに遊ばされる。

伊豫介は十月の上旬に任國に下る。今度は女房たちも下るといふので、源氏は公式にねんごろな餞別を贈り、内々にも、櫛や扇を澤山おくり、幣なども注意しておくつた。又あの持ち歸つた小袿も、こまやかな消息と共にかへした。空蟬からは小袿の返歌が來た。い

相應するものであつて、この首尾照應する所に、一つのまとまりを認めることが出來る。「しのび給ひけるかくろへごと」は結局十七歳の夏の出來事、空蟬、軒端荻、夕顔の三女性に關するものであることが明かである。下の下なる階級の戀愛事件が、ここに取扱はれ、それを源氏が「いたく世をばばかり」つてもゐたし、又「あながちにかくろへしの」んでもゐたのである。それ等のこと、卽ち帚木卷頭の一文の內容は、この夕顔の卷の卷首なる一文によつて、はつきりするのである。これを首尾相應じて一つの體系の中に解釋したものは細流抄や、湖月抄の師說があるが、これを更に發展せしめたのは廣道である。詳しくは彼の「評釋」を參照せられたい。

元來作り物語であるのを、作り物語でないやうに書きなしたのは、例の作者の深い用意と見るべきである。

この卷は源氏の君十八歳の三月から同十月までの事を叙す。

よ〳〵立冬の日、源氏はうつろのやうな氣持で、暗い時雨の空をながめながら、一首の歌を吟んだ。

かやうのくだ〳〵しき事は、あながちにかくろへ忍び給ひしもいとほしくて、皆もらしとどめたるを、「など帝の御子ならむからに、見む人さへかたほならず物ほめがちなる」と、作り事めきてとりなす人物し給ひければなむ。あまり物言ひさがなき罪さりどころなく。

語釋　○かやうのくだくだしきこと云々――細流抄に「夕顔の上のこと、空蟬の事などなり。皆此事をばしるすまじく思ひたれども、源氏は桐壺の帝の御子なるが、善きことばかりをことえりしてしるさば、私あるそしりもはべるべし。又實錄の心にたがへり。さればありのままにしるすと也」とある。○あまりものいひさがなき罪さり所なく――評釋に「のこりなく記しつけたるものから、餘りにものいひさがなき罪は、記者の上に避けん所もなくおぼゆると也。見ん人さる方にゆるし給へなどの意をふくめたり。さりどころは、さけ所といふが如し」とある。

通釋　かやうなくだ〳〵しい事柄は、源氏の君が無理に隱し秘密にしてお出でになつたのもお氣の毒で、一度はみな書きもらしてしまつたが、「いくら皇子だからといつて、その御行蹟を現在目の前に見てゐる人さへもが、なぜ君を完成しきつた人のやうに、ものほめ勝ちなのだらう」と、まるで作り事でもあるかのやうに、とりなす人がいらつしやつたから、しかたがなく、一切をここにあばき立てたのである。しかし、あまりに口さがないといふ非難はまぬかれることは出來ない。

若紫

瘧病に煩ひ給ひて、萬にまじなひ、加持などせさせ給へど、驗なくて、あまた度起り給ひければ、ある人、「北山になむ、なにがし寺といふ所に、かしこき行人侍る。去年の夏も世におこりて、人々まじなひ煩ひしを、やがてとゞむる類あまた侍りき。しゝこらかしつる時はうたて侍るを、疾くこそ試みさせ給はめ」など聞ゆれば、召しに遣したるに、「老い屈まりて、室の外にもまかでず」と申したれば、いかゞはせむ。忍びて物せむ」と宣ひて、御供に睦まじき四五人ばかりして、まだ曉におはす。やゝ深う入る所なりけり。三月の晦日